
p & P

朝昼夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

p&p

【Nコード】

N5253U

【作者名】

朝昼夜

【あらすじ】

上層と地下街。人間の住まう環境は大きく変わった。宇宙妖怪という謎の生物の飛来によって人の住める土地がなくなり、人の住まう土地のその「上」に鉄の天井を作ることによって、人は土地が少なくなったにも関わらず地球上にての生活を続けた。

八城「ホルシユ」V。その姉のシャアリ。その弟のスー。両親は出稼ぎでいない。

三人は日々アパートの一室で過ごしている。金があまり無い毎日。

ホルシユはアルバイトで金を稼ぎ、シヤアリは毎日ぶらぶらし、ス
ーは病弱で毎日家で過している。

そんな彼らと、彼らの周囲で起きる様々な事件。

人は凶器を持ち地下街を侵攻する。上に住んでいた者たちへの憎し
みと、日々の貧相たる虚ろを糧にして。

T i t a n

自動治安維持機械・Titan・に追いかけられている中年男性が、遠目に映った。

彼の悲鳴は通りに立ち並んでいる建物の構造のおかげか、やけに耳に障って印象に残ろうとするのが、仕事と買い物でくたくたに疲れている青年、八城「ホルシユ」には不愉快極まりない。やけに響くのだ。

今夜姉弟たちに食べさせるつもり Beefカレー。その材料となる、三割引だから買った、分厚い牛肉が入っているビニール袋を大事そうに握ってから、今年で二十三歳になる若い男性のホルシユは、そそくさと地下街の暗がりにも身を潜めようと端に寄る。巻き込まれないようにするためだ。地下街では珍しくもない警備ロボットと犯罪者のいざこざからは、遠ざかるに限る。

誰だって、平穩に日々をやり過ごしたいものだ。

「……………こつちに来るのか……………」

遠目にあつた中年男性の影は、端に隠れているホルシユのほうへと向ってきているから、次第に姿形と悲鳴が大きくなって迫り来る。平穩を阻害する、やかましい、秩序を乱す騒動。万引きをしたのだか人を殺したのだか知らないが、ホルシユからすればただ邪魔なだけだ。五月蠅く、憎たらしい。

元々が陽のあたりづらい土地のここで、時間的にはすでに夕方を迎えていて、今しがた闇がやって来たのだから視界は良くない。周囲に街灯はわずかにあるが、ここは丁度寂れている地区で、かつては賑わっていたらしいが現在はシャッター街。人通りの少ない所だと言つのに、犯罪者とTitannの鬼ごっこをしている現場に居合わせたのは運が悪いとしか思えない。ホルシュは、赤錆の目立つシャッターの脇に佇んだまま、ため息をついてしまう。

(Titannは犯罪者を捕まえるためなら、それに関係の無い住民を平気で巻き添えにするのは、俺たちをゴミか屑だとしか認識していない証拠だ。実際、地下街にしかTitannは配備されていないわけだから……)

ちっ、ゴミ掃除のつもりだな、と舌打ちをしてしまう。今の世は何て残酷なのだろう、とビニール袋を持っている拳に力が入るが、暗い気持ちのやり場は無い。赤錆のシャッターを拳で叩けば音が響いて、騒動に巻き込まれるのは間違いない。

「
この場は静かにやり過ぎす他ないじゃないか、と気持ちを落ち着かせる彼の耳に近づいてくる逃走の気配。人間の足音と、Titannのカタピラ音。

星の音が聞こえそうな夜に、建物の壁と壁を伝いながらホルシュの耳に入り込んでくる騒音。

それに加えて、逃げている中年男性の息遣いが聞こえてくると、ホルシュもいよいよ身を固まらせて、自らの呼吸さえ止める。ビニール袋を何処かに擦らせてしまわないように、注意した。ビニール

袋の音は五月蠅いものだ。

ホルシユは手元の袋に一度だけ目をやってから、瞼を下ろす。
声が耳に入ってきた。

……ふざけやがって……くそが……はあ……。

耳に入ってきた中年男性の声は、随分と機嫌が悪そうだった。Titanは問答無用で犯罪者を殺す警備ロボットなのだから、それに追われれば機嫌が悪くなるのは、当然と言えば当然だろうが…。

一瞬、中年男性に何らかの手助けをしようかとホルシユは思考する。Titanは嫌いだからだ。だが思ってみてから、それは迂闊過ぎるなど首を横に振る。Titanに対する人質にされる可能性もある。中年男性が見境なく焦っているのだとしたら、みかけた人物を手当たり次第で盾にすることは充分ありえることだ。

(同じ地下街の住人とはいえ、俺自身の命を脅かして助ける義理はない……この人にはこの人の事情があつて、俺には俺の事情がある……姉と弟がビーフカレーを待っているんだから……目の前でこいつが殺されたとしても……うわっ……)

黒光りの装甲の、蟹のシルエットの機械がすぐ隣に。眼前に。何時の間にか、重装甲で地下街中を我が物顔で闊歩するTitanが、ホルシユのすぐ隣で青光りする両眼をきらめかせていた。青く目を光らせているのはサーチ、人間の姿を探知しているということだ。(……俺は犯罪をやった覚えはない。別にTitanに見つかったからといって殺されるわけでは、ないのだろうけど……)

これまで長い間、地下の世界にて人間の四肢をもぎ、血肉を噴出させてきた、武装している蟹型機械なのだ。それがTitanだ。無情たる黒い鬼蟹であるが故に感情で人間を殺すことはないの、頭では殺される状況でないとわかっていても、身体のほうが脅えてしまう。ホルシュの右手はふるえていて、ビニール袋の音をがさがさと鳴らしてしまうのを、彼は何とか抑え込もうとするができない。そしてTitanは目だけでなく耳も良いから、即座にビニールの音に反応する。

ギューン、という稼動音を鳴らしながら、青白い両眼がホルシュを射抜いた。機械に見下ろされる人間。人間を見下ろす機械。八本ある足の内の一本の先端を、向けられる。そこには黒い穴ぼこがたくさんある。

互いが数秒間、見合い、星の見える夜は静まり返る。

Titanは蟹のように足が幾つも生えているように見える外見だが、それらは全て機体を移動させる足の役割をするのではなく、足に見えるそれは実質はガトリング砲であるから、Titanにとっての敵を抹殺するための砲門だ。キャタピラで移動して、八本の砲門で犯罪者を穴だらけにして殺す。そういうむごいやり方で治安を維持するのが、Titanのやり口だ。いや、Titanを操っている者たちの、やり口だ。

そんなやり方で二十年以上、支配され続けてきた地下街の一員であるホルシュからすれば、支配者どもの象徴的存在とも言えるTitanに対して持つ感情の線は、平常たるものではない。いやホル

シユだけでなく地下街に住まわされ続けた人間たちからすれば、非常に根深い、ねちっこく禍々しい憎悪がある。

T i t a nが作る死体は全て、生きていた時の原形を止めないのだから。

かつてホルシエの友人も一人、ぐちゃぐちゃにされた。ふと、彼はその当時の記憶を思い出してしまった。目玉が飛び出していた。内蔵が。臭い。その鮮血。

ホルシユは、T i t a nが言葉を認知できないことを知っている。だから、見下ろされて銃口を突きつけられている状況ではあるが、脅えさせられたことと、かつて友人を殺されたこと、その復讐にせめて、暴言を吐いた。

「俺は、犯罪なんてやっていない潔白な男だ。善良な市民に砲口を向けるなんて、さすがに蟹さんは鬼でいらっしやる。俺はお前を見ただけで虫唾が走るんだ。さつさと目的の犯罪者を追えよ。さすがに犯罪者以外の人間を殺すほど、脳髓が錆びちゃいないだろうな。油、刺してやるうか」

これが実は有人型のT i t a nの中に支配者側の人間が乗っかっていたりしたら、俺はガトリング砲の銃弾の嵐にぶち抜かれて頭が無くなっちまうんだろうな、そしたら姉弟と両親には申し訳ないな、ピ―フカレーを姉弟に食べさせることもしないで……………。

ホルシユはガトリング砲の砲弾が発射されるであろう穴を、じつと見つめながら、ぼんやりした。

で、気が付くとT i t a nは砲口を彼に向けるのを止めていて、キヤタピラを忙しなく地面と擦らせながら、犯罪者の中年男性を追

跡することを再開したようだった。

がりりりり、と耳障りな音と共に、どうやら人が乗っていることはなかったTitanは、ホルシエから離れて行き、姿を遠ざけていった。がりりりというやかましい音も、星の夜の静寂さに紛れて聞こえ辛くなっていった。

ホルシエはしばらくその場で呆然と立ち尽くしていたが、ふと思いついたようにビニール袋の中身を確認した。中に入っているのは三割引きだから買った高めの肉。カレー粉。野菜。

激しく動いたわけでもないのに、食材がちゃんと揃っているか確認する。全てが足りていることを確認できると、彼は大きく息を吸って、一瞬息を止めてから、そして吐いた。

「……………どうやらあいつらにビーフカレーを食べさせることに、なりそうだ」

彼は歩き出した。人気の無いシャッター街の道路の真ん中を、車が行り過ぎる心配もしないで歩いていく。途中、人間の断末魔らしき叫び声とガトリング砲の砲撃らしき騒がしさが夜を揺るがしたが、彼は一度立ち止まって、音のした方に振り向いただけで、すぐに歩くの再開した。

「……………俺には、関係ないさ」

寂しげな言い方のそれだって星の夜空に吸い込まれて消えてしま

ふと彼が天を見上げれば、そこには太陽の光のほとんどを遮ってしまう天井がある。

この地下街を薄暗いものにしていく要因。そしてTitanを操る者たちが住まう空間でもある。

上層街。選ばれた人類だと自らを吹聴する連中どもが寝息をたらず、一部の支配者層だけが住める天井の街。地下街の陽の光を奪い取っていく欲張りな連中。地下街を機械によって力づくで支配する単細胞な連中。

星は、その天井が無い位置、真上というよりかは前方。

星はそこにしか見えない。地下に住む限りは、星の輝きの多くを見る権利さえも奪われる。

でも地下街に住む連中は、上層に移住することなんて出来ない。だから星はいつでも、前方にあるものだ。地下街で育った子供は、星が天井になっっている夜空を知らない。鉄の天井ばかりを知っている。

「何時まで、生きられるんだろうな。こんな街でさ」

ホルシユは鉄の天井を眺めながら愚痴をこぼす。

よたよたと、ビニール袋を右手に握ったまま、シャッター街を通り過ぎていく。

十畳の部屋で

牛肉を調理するのなんて久しぶりだよな、と感慨深い思いに駆られながら肉を5センチ程度に切り分ける。塩、こしょうをまぶし、サラダ油を入れてから強火で肉に焼き色をつけていくのだ。その後肉に対してカレー粉をふりかけて香りを楽しめば、後は水とチキンスープの素を加えて、随分と昔から使い続けている圧力鍋の、蓋をして、強火で肉を熱する。

こんなものかな、と肉の調理は終わりにして、野菜を切り刻んだりカレーのルーを用意したりなどする。ぐつぐつと、台所にカレーの主張の強い匂いが充満していくにつれて、ホルシユ自身の食欲も煮立っていく。胃がぎゅると音を鳴らし、唾液が口内に湧いてくる。

(いい感じだ)

自然と鼻歌を歌ってしまうほどに、ホルシユの機嫌は良くなった。先ほどのTitanとの遭遇のことなど忘れて、目の前で除々に完成していく、ビーフカレーの、その膨れ上がるような匂いに心が躍る。青の花柄エプロンを纏っている彼は、身体を左右に振ってご機嫌だ。鼻歌は音痴だが。

音痴な鼻歌は、本人は気持ちが悪くても、他人からすればふざけるなと怒号を飛ばしたくなるものである。

ホルシユの弟である病弱の少年、八城「スー」Cは叫ぶ元気を持っていないので怒号を飛ばすことはしないが、何度も咳き込んでか

ら、パタリと枕に顔をうずくまらせた。まだ若いその少年はまだ十二歳ほどの年齢で、年で言えば元氣盛りのはずだろうが、彼は実気だるそうな眼をしている。

スーは針のように小さな声で、

「ひどい気分だ……」

と苦しそうに呻いてから、指で両耳を塞いだ。布団に横たわったまま。

二十三歳の兄であるホルシユは、丁度スーが呻いた時に鼻歌の息継ぎをしていたのでスーの言葉を聞き逃さなかった。彼は調理の手を一旦止めると、鼻歌を歌うことも止めてから布団のある方へ振り向く。すると両耳を塞いでいる姿勢で布団に横たわっている弟の姿が見えたので、なるほど、と思ったホルシユは音痴な鼻歌を再開した。

「ふん、ふーん、ふふー、ふふん。ふんふふーん、ふーふー、ふーふふー、ふんふふーん。ふふふふふふー、ふーふふー、ふふふふふふー、ふーふふー、ふーん。ふーふふー、ふーん。ふふーん。ふーんふふーん。ふふふつふーん、ふつふふふーん。ふつふふううん」

人を小馬鹿にしている、ありとあらゆる生命の活気を奪い取っていくがごとくの音程狂いを狭い室内で聞かされれば、病氣の人でなくとも気分が悪くなるだろうが、スーは病人であるが上で狂った鼻歌を聴かされるのだから最悪だ。

彼は小さくて細い体をむっくりと起こすと、片方の耳から指を自由にして、その手でぼろっちい壁を、こんこん、と軽く小突いた。隣の人に迷惑だろ、というスーなりの主張だがそれは実に正しい。

ここは築何十年かのアパートであるからして老朽化が進んでおり、壁はベニヤ板のように薄いのだ。

「また苦情が来るよ。不愉快すぎて、耳がもげるってさ」

スーのその言葉を聞いたホルシユは鼻歌を止めたが、ビーフカレーの香りのおかげだろう、機嫌は相変わらず良さげだ。

「その時は姉さんに追い返してもらおうさ」

ホルシエの軽口を聞いてから、スーはため息を付いて言葉を継いだ。

「姉さんは今出掛けてるよ」

「え、いない？ 寝てるかと思っただけだな」

「見てみなよ。空っぽだから」

「あ、本当だ……」

十畳の小さな室内に一つだけある押入れは、八城家の長女、八城「シヤアリ」Cが自らの部屋として使っている空間である。押入れだから当然狭いのだが、本人曰く女子で長女の私に部屋が与えられないのはおかしいとのこと、押入れを無理矢理に自室として改造、暑い時には小型扇風機を使い、寒い時には毛布に包まるなどして体温調節も可能だし、空気が悪くならないように換気のための穴をいくつか襖に開けていたりする。その姉の押入れ部屋の天井にはアイドルのポスターが一枚張られており、そのアイドルの顔は一年に一度くらいは変わる。アイドルは全て上層に住んでる連中だというのに、そういう点に関してはあの姉は節操が無い。上層だろうが何だろうが、格好良ければいいのだろう。彼女だって上層の連中は嫌いだ。みただが、彼らアイドルだけは別らしい。容姿に魅力があるとい

うのは得だ。

そのシャアリが押入れにいない。天井にいるアイドルの山田君と向かい合った体勢で幸せそうに眠りこけているかと思っただのに、布団すら敷かれていない。影も形も無い。では何処に行ったというのか、彼女は。一瞬疑問に思ったホルシユだったが、ああ、と思い当たる。

ホルシユは圧力鍋に当てていた強火を弱火に変えてから、独り言のような、スーに話し掛けているかのような、どっちとも付かない口調で、

「姉は河原であいつと遊んでるってことか……いい御身分だよな、まったく」

とぼやいた。それは正しい推測だったらしく、背後で弟のスーは肯定するように何度か頷いてから、力尽きたようにパタリと枕に横たわった。そして何度か咳をした。

「薬は飲んだのか？」

「飲んだよ。忘れてない」

「ならいいけどな。その調子じゃ、ビーフカレー、食べられそうにないか？」

「それは食べられるに決まってるじゃん」

「あ、そう」

「そこまで病弱じゃない。兄ちゃんのビーフカレーを食べ逃すほど」

「そりゃあ絶品だからな。わかってるじゃないか弟君。……じゃあ、ちよつと姉ちゃんのこと読んで来るけど、待ちきれないからって、先につまみ食いとかするなよな。先に食べるだなんて、お行儀が悪いんだぞ」

「餓鬼じゃないんだからそんなことしないよ」

「するから言っただよ。あと、地震とか来たらすぐに火を止めるよ」

「来るわけないだろ。姉ちゃんのいる河原なんてすぐ目の前なんだから」

「いちいち反論するなよな」

「いちいち小言を言っくなよな」

「……………」

「ふん、ふん、ふふー、ふふんー。ふんふふん、ふーふー、ふーふふー、ふんふふん。ふふふふふふー、ふーふふー、ふふふふふふー、ふーふふふー。ふーふん。ふふん。ふふん。ふふふつふん、ふつふふふん。ふつふふううん」

「うわああああ」

「耳がもげてしまえばいい。ふん、ふん、ふふー、ふふんー。

ふんふふん、ふーふー、ふーふふー、ふんふふん。ふふふふふふー、ふーふふふー、ふふふふふふー、ふーふふふー。ふーふふん。ふふん。ふふふつふん、ふつふふふん、ふつふふふん。ふつふふううん」

「うわああああ。出てけ、出てけ」

「言われなくても出てくよ。すぐに帰ってくるけどな」

さすがに十一歳も年上とだけあって、余裕の貫禄で病弱の少年を撃退したホルシユは、玄関まで歩くとサンダルを履いて外の風を浴

びた。乾燥している風。陽があたらないせいだろうか、地下街は一年中、特に夜が寒い。サンダルではだいぶ足の爪先がこたえるが、河原は歩いて一分ほどで到着できるので我慢する。「まったく、面倒だ」そんな愚痴をこぼしながら、ホルシユは懐中電灯を一つ持って、姉の姿を河原に探した。

太郎 宇宙妖怪 姉 包丁 男 河原にて

暗い夜。河原の水流は先日の雨で増水しているらしく、土手に降りたばかりの位置でも水の流れる音が激しいとわかる。耳に障る。

月光は鉄の天井によって遮られるから街灯が欲しいところだが、河原には数えるほどしかそれが設置されていない。よって暗闇の中で、懐中電灯は必須であり、長いことこの場所でアパートの一室を借りているホルシュ青年は、そのことをわかつているから右手にそれを持つ。

彼はサンダルで土を踏み、途中、砂利がサンダルと足裏の間に挟まるのを振り落したりしながら、土手を歩き回る。懐中電灯を左右に振り、二十四歳の姉シャアリの影を闇からあぶり出そうとするが、探すに夢中になるあまりに足元に気が行っていなかった。

びちゃり。

先日の雨のせいでまだ残っていた水たまりに片足を突っ込んでしまい、ただでさえ寒いというのに裸足を水で濡らしてしまった。

彼は咽喉奥から湧き出てくる絶望を吐息にして落ち込む。だがピカピカはしっかりと作りたいから、さっさと一室に戻って調理を再開したい。みるみる冷える足を暖めるためにも姉をさっさと見つけてしまおう、嫌になつてる場合でもない、と彼は歩を速める。ほとんど手元の明かりだけを頼りに。

それから後、どれくらいの間、彼は歩き回っただろうか。

長いこと歩いたが、そこまで広い河原という訳でもないのだが、

案外なことに捜し求めている姉のその姿形は、現れることがない。

ホルシユは立ち止まって、考える。もしかすると、姉はもうアパートの一室に戻っているのかもしれない。だとしたら自分は馬鹿の間抜けで、ビーフカレーを姉弟に先に食べられてしまう可能性もあるかもしれない、のではないだろうか。だとすると、俺はこの河原にいる場合ではない。

考えたホルシユは懐中電灯の明かりを、アパートの方へ向けた。勿論、それで姉がいるかどうかはわかるわけでもないのだが。これでアパートに帰ってみて、姉が戻っていなかったら、また河原に出なくちゃいけない。水たまりに突っ込んで冷えている裸足で、再び。サンダルじゃなく、ちゃんと靴を履くべきだったと、悔やみながら空を仰ぐ。星があるわけでもない、鉄の空を見ていると気持ちには晴れない。ああ、とうんざりしたような呻きを上げてから、前方を確認もしないで一步を踏み出すと、少し大きめの石に躓いて転びそうになった。

「…ああ……もう」

ホルシユは多少イラだったのだが、そのイラ立ちに任せて懐中電灯で足元を照らしてみた所、彼は全身を動かさなくなってしまった。背筋を固まらせた後に、鳥肌が一斉に湧く。

懐中電灯に照らされている片方の足が、血塗れだった。赤のペンキが入っているバケツに足を突っ込んで放置したみたい、に。一体

全体どうして俺の足はこんなに出血大サービスなんだ、と思案してみてから、彼は先ほどの水たまりのことを思い出す。突っ込んだ片足は、血塗れの側だ。

「血の臭い…事件の、匂い………！」

ふと気が付く。これはもしかすると、一大事なのかもしれない、と。

水たまりだと思っていたあれが、実は血のたまりだとしたら、この片足にこびりついている血液は誰の物だ……？

ホルシユの頭の中で閃光がバチリと弾けて、彼は急いで駆け出した。懐中電灯の光はそこら中に暴れまわって安定しないが、気にしている場合じゃない。ホルシユは嫌な予感が外れることを祈りながら、歩いてきた河原の道に戻る。そして彼は、見つけた。血のたまりがあつた場所の近くにて、うずくまっている人。倒れている人。人じゃない者がはしゃいでいる姿。何故、さっき通り過ぎた時に気が付かなかつたのだらう、とホルシユは思う。

うずくまっている人は体育座りをしているから顔が見えないが、誰なのかはすぐにわかる。だとすると倒れている人は誰なのか。うつ伏せになっているが、見た所男性だ。見覚えの無い。血のたまりが土手に広がっている。

凶器が一本、握り締められている。血のついている包丁。それはうずくまっている人が握っていて、それを使ってうつ伏せの男性を

刺したのだろうと推測できる。だとしたら、事実はこのようになる。

姉が、人を殺した。凶器を握ったまま体育座りをしているのは姉だから。

刺されたと思わしき男性の血が、地面を流れていて、ホルシユの足元あたりにまで広がっている。片足にこびりついている血も、この男性のものだと気が付き、足を水洗いしたくなる。気持ち悪くなる。だが水道はアパートに戻らなければ。

ホルシユは握っていた懐中電灯を地面に落としそうになってしまった。人間、あまりにも衝撃的な光景を目の当たりにすると、綿になつたかのように全身の力が抜けてしまうのか、と知った。

「今日は、ビーフカレーなのに……」

訳もわからず、深く考えないで言葉がこぼれる。頭が現実を受け入れたくないらしく、さつきから脳の裏側がヒリヒリと痺れるだけで、この状況をどう受け止めるのか、どう判断したら良いのか、姉に何と言葉を掛ければいいのか、わからない。

わからない、わからない、わからない。頭でそれが繰り返される。

実際、呆然として当然の光景だ。

『あいつ』。上層にも地下街の人間にも見下される存在、宇宙妖怪略して宇怪と呼ばれる連中の一匹である太郎。太郎という名は姉が付けたただだから本名というわけではない。といつても、この知能の低い連中に名前を付ける必要なんて無いと思うが。

その太郎は、何が楽しいのだろうか、白玉のような餅のようなぷにぷにしている丸みを帯びた饅頭の全身を跳ね回らせていて、黒点のような二つのつぶらな瞳で、うつ伏せの亡骸を見ている。血のたまりになっていいる箇所にも跳ねてしまっから、跳ね返りをもろに饅頭の身体に浴びてしまっから、下の方に赤い斑点がついてるみたいになっって、実に見て汚らしいというか不快だ。死体を見て楽しんでるんじゃないだろうかと想像できる。宇怪は大体にして、下衆なことに喜ぶのだ。

姉は茫然自失といった様子だと思える。本当に姉が凶器を振ったのだからわからないが、体育座りの姿勢を一切に崩さずに、自分の世界に閉じこもるようにしてうづくまつている彼女から見るに、そういうことなのだろうと察するしかない。ホルシュはだが、そのことが信じられないし、信じたくもない。

人を殺した奴は、Titanのガトリング砲で打ち抜かれて穴だらけにされるのに。

「どっこういうことだよ、姉ちゃん」

しかしホルシュの言葉にシャアリは何の反応も示さない。銅像のように動かない。

「この倒れてる男は何なんだよ。なんで姉ちゃんが人を刺さなくちゃいけないんだ。Titanに殺されるんだぞ、こんな事件すぐに判明して、死んじまっんだぞ！……太郎に何かたぶらかされたんじゃないのか。宇怪なんてみんな碌なもんじゃないのに、可愛い饅頭みたいだ、とか言っって迂闊に関わっっちゃいけないかったんだよ。こいつなんて、疫病神みたいなものなんだからさ！」

ホルシユは太郎が目の前にいるにも関わらずボロ糞にけなすが、自分がけなされていることをわからないのだろっ、太郎はぺちんぺちんと可愛らしく飛び跳ね回っている。相変わらず血のたまりにも構うことなく入るので、太郎の真つ赤な斑点の数は増えていく。それがホルシユにも跳ねたので、彼の頭脳はぴりぴりと痺れた。怒怒怒。

「宇宙妖怪が……」

この世を上層と地下街に分けるに至った理由を作り出した宇宙よりの迷子者、宇怪。

世間だけでなく俺たち家族にも迷惑を掛けるつもりなのか。ただでさえ毎日が大変な俺達に！

ホルシユはやりきれない。父母は出稼ぎに出ていて、毎月仕送りを欠かさず送ってくれるが、その金額は年々減っているし、弟を治療するための料金は高いから薬で病気の進行を遅らせることしかできない。食材の値段は年を経るごとに増えていくし、姉は気まぐれで怠け者で、こんな太郎とかいう饅頭宇怪と河原で遊んだりしている、かと思いきや今日は血塗れの包丁を手にしたまま、体育座りで塞ぎこんでいる。ぎりぎりの生活。息切れる毎日。だというのに清らかな上の世界で住んでいる連中は地下に住む人間を同じ人間とは扱わず、Titanで力の征服を行っている。そしてそういう世界に変わった理由は、宇宙妖怪にその責任がある。こいつらが、いなければ。

ホルシュは姉の握っている包丁を無理矢理に奪い取ると、その刃の先を無邪気な饅頭、その飛び跳ね回っている白くて丸いものへと向けた。その大きさは約八十センチメートル。人間の半分程度の大さのそいつは、その見た目のせいか確かに愛嬌があつて、抱きしめたくもなるかもしれない。

だが今のホルシュにはそれが許せない。その愛嬌が、見た目が、憎たらしく、だから包丁の切ツ先を饅頭に向けたまま、近づいていく。饅頭は跳ぶことに夢中らしく気が付いてない。

「もういいや……！ お前みたいなのは……！」

宇宙妖怪を殺すことは罪になる。だからこれを殺せば自分もTitanに殺される。やった者はやり返される。実に単純で、当然な原理だ。

ふと病弱の弟、スーのことが浮かんだが、自分と姉が死ぬならば食費が浮くのだから、もしかすると弟の病気が治る為には俺達が死んだ方がいいのかもしれない、とホルシュは思う。

だから彼は覚悟を決めて、包丁を振り上げて、刺そうとした。刺し殺してしまおう。包丁に気が付いたらしい太郎は、元気に跳んでいたというのに全身を小刻みに震わし始めた。どうやら怯えているらしい。哀れにも見えるが、良い様だな、とホルシュはひきつつた微笑みを浮べた。

だが刺す手前で、突発的な感情に駆られたホルシュの背中に、今まで一言も喋らなかつた姉から声が掛けられた。それによって時間は止まった。

「太郎は、私の命を救ってくれたんだよ！」

………救った？ホルシユの頭は混乱する。

そんな内容の言葉を聞けば、振り下ろそうとしていた刃を止める
しかない。

どう考えても〇の中で、天国へ

刃が落ちた。

包丁を道端に落としてしまつて、血のたまりの中に失くしてしまつた。

ああ、とホルシュは血のたまりに手を突っ込むのは嫌だから戸惑つていて、さっきまで怯えて震えていたはずの太郎が 形の口を開いたのである。

「あきやあ。探すの面倒じゃんかあ、ほうちよー」

太郎が餡蜜みたいに甘つたるい声付きで、喋つた。宇怪が、喋つた。あきやあつて何だよ、あきやあつて何だよ、あきやあつて何だよ……脳内で繰返しあきやあという叫び声の意味を検索している途中で、ぽんぽんと背後から肩を叩かれた。振り返つて見ると、人の影。照らして見ると、姉の顔がにっこりと微笑んでいる。で、こう言つた。

「包丁を返して」

ホルシュの肌が鳥肌になる。沈黙の空気。とりあえず、ごまかしたい。

「今日はビーフカレーなんだぜ。家族全員誰もが大好きな、俺の手作りだよ。まだ作つてる途中だけど帰つたらすぐに完成させてあげるから、とりあえず今は、ここを離れよう？ まだ俺状況つかめてないけど、なんなら一日くらい、この宇怪を家に泊めてやってもいいんだし……。Titanのこととか、誰がどうなつて男を殺した

のか、とか……わからなきゃ、姉ちゃんを手助けすることもできないんだし……」

「助けてもらう必要なんてないの」

「え」

「八城の血が騒ぐわ」

「はい？」

「いや、だから包丁を返せって言うてるのよ」

「誰か殺す気？ え、やっぱ姉ちゃんが殺人鬼？」

「八城の血が、騒ぐのよおおおおおお」

「え、何、何なの！」

「包丁返せつつってんだろっつがよおおおおお！」

「本当ッ、すみませんした」

「それでいいよ」

「つつてももう血のたまりの中です」

「んだとコラア!？」

姉が土下座の格好をした後に、顔を血のたまりの中に突っ込んだ。目が染みないのだろうか。

まるで犬が血を飲むかのように、しばらくの間土下座の体勢のまま、包丁が落ちた血のたまりの中を口で探っている姉の後姿を懐中電灯で照らしていると、ひどい空虚感。

なんでこんなことになっているんだろう。姉ちゃんはずいにおかしくなってしまった。犬みたいに土下座をして、包丁を口で探している。そんな姉嫌だ。

涙が湧いた。ホルシユの頬を涙が伝いそうになった。目頭が熱い。

うづくまりたい気分。

「 & # & 」

姉が血のたまりから顔を上げて何か言ってるが、血のせいで喋りづらいのだろう、呂律が全く回ってない。何言ってるか訳わかんない。懐中電灯でその顔を照らしてみると、人ならざる者な真つ赤な顔。のっぺらぼうみたいだった。その口に、ボーンを加えてるかのよう包丁を加えている。よく唇が切れないものだね、と思いながら、こいつどうしよう、と思う。

迷っている途中に足音が近づいてくるのに気が付く。誰だろう、Titanのキャタピラ音でないのだからマシだが、普通の人間がこの光景を見ればTitanを保有している地下街管理局に連絡を入れるだろう。人に見られるのは不味い。どうする、俺。どうする、ホルシユ。

だが彼の悩みは杞憂だった。河原の暗闇に影を現して姿をホルシユの目前に見せたのは十一歳下である弟のスー君であった。病弱なる十二歳が咳をこぼこぼとしながら、

「ビーフカレー全部食べちった。僕一人で。……ペロりんちよ！」

いたずらっ子みたいに舌を出した。ペロりんちよ？

兄ホルシユの怒りは火山の噴火のように怒張して、叫んだ。

「俺の姉弟はどっちも馬鹿野郎かあああッ！」

ホルシユの頭の天辺から、実際にマグマみたいなのが噴出した。

凄まじいくらいに上に向うエネルギーがある噴火で、血とはまた違う類の赤色をしているマグマが、天を何処までも登りあがっていくのだから、それを頭から出してるホルシユ自身が、何だか笑えてくる。だが、他のみんなは全然受けてない。しらけた顔をしてつまらなさそうに、ホルシユの噴火を見ている。

ふと、昇り上がっていくマグマが、上層である鉄の天井に直撃した。

するとマグマが鉄の天井全体にアメーバのように広がっていつて、ついには鉄の天井全てを真っ赤に熱し、ドロドロに溶かしていく。突然溶けたものたちは鉄の雨となって、地下街に降り注ぐのだから、地下街のほぼ全域に、上層自体が崩れ落ちてくるような惨事になる。大惨事だ。

ホルシユはひどく空しい気分で、自分の頭からマグマが出たせいで地下街も上層もまとめて滅んでいく光景を、硬直して眺めるほかない。彼は直立したまま呆けた顔をしていて、口が半開きのまま閉まってない。そのみっともないホルシユの姿に気が付いたスーとシヤアリが、ひそひそとそれを笑い合ってクスクス言っている。そして饅頭の太郎は、世界を滅亡させてしまったホルシユの脇に寄る。

「あきやあ、ホルシユ兄さん。あんた、とんでもねえことを、しでかしちまったな。おいらにはフオローする言葉も見当たらねえが、ま、お互い天井からの落下物でお陀仏しないように、せいぜい上を向いて逃げようじゃねえか。じゃ、おいらはこの辺でおさらば。Titanとか殺人とか気にしなくて良くなったじゃねえか。滅んだら、全部気にしないで良くなるわけだし。じゃあ、またな。あきやあ」

ハードボイルドな口調だな、とホルシユは思った。思いながら太郎の背中を見送っていると、何だか生きてることがどうでも良くなってくる。シヤアリがどう見ても白い饅頭にしか見えない背中に、声を掛けていた。説明口調で。

「ありがとう太郎くん！ あなたは夜の河原にていつもの様に小石を食べていた所、暴漢に追いかけられていた私に気が付いて、暴漢は包丁を持っていたにも関わらず勇敢にも立ち向かっていき、手足も無いあなただというのに、暴漢を足止めしようと噛み砕いてる途中だった小石を口内から発射させて、暴漢の足に直撃したので彼は倒れましたね。暴漢が倒れたことに気が付いた私は、そのまま逃げれば良かったのに、様子を窺うようにして立ち止まってしまったのは今にして思えば最悪でした。暴漢が再び起き上がって私を追いかけてきたのは、私の姿が夜の闇に隠れていなかったせいでした。ですがそんな私をあなたは見捨てず、果敢にも饅頭の身体のアナタは暴漢にのしかかり、見事暴漢を動けなくしてくれました、最高でした。しかしその時の拍子で、男の胸に包丁が突き刺さってしまいました。私にもあなたにも、これは事故になるのか殺人になるの

か正当防衛になるかの判断は付かず、とりあえず私は彼の胸に刺さっている包丁を抜くだけ抜いて、うずくまりましたし、あなたは闘いの後の興奮で、飛び跳ね回っていましたね。そこに私の弟であるホルシユがやってきたということです。ばいばーい！ また会おうね太郎くん！ 私、あなたのことは絶対に忘れな………ぶええ！」

最後まで言い切ろうとした姉の頭に、落下物が直撃して姉は死んだ。それを懐中電灯で照らしてみれば、鉄アレイだ。筋トレ用の器具で死ぬだなんて、恥ずかしい死に様だ。地面に倒れて姉は動かなくなってしまうた。最後にはおかしくなっていた姉だが、死んでしまうとは悲しい。

「ペろりんちよ！」

突然大声が聞こえたので驚いて振り向くと、どうやら、弟スーの頭にも落下物が直撃したらしく彼も倒れていて痙攣している。だが、やがて痙攣も止まって、動かなくなった。病弱なスー。死んだ。悲しい。落下物を懐中電灯で照らしてみると、それはスピーカーだった。なんてことだ。

そして俺の頭にも落下物が直撃した。死ぬ直前、俺は何によって死ぬのだろう、と思い必死になって懐中電灯で落ちてきたものを照らしてみると、それは牛だった。ビーフだった。

「そんな…なんたる…皮肉……」

もおおお。と牛は落ちてきたにも関わらず元気に鳴いている。そ

して俺は心の中で泣いている。

死にたくない。死にたくない。死にたくない。

俺は気合を振り絞るようにして、眩暈と麻痺のある体を何とか起こす。

そして牛に跨った。

「いくぜ、はいよおおお！」

「もおおおおおおお！」

俺と牛は崩壊していく世界を駆け抜けた。落下物を何時までも避け続けて、どうにかして生き延びてやろうと必死だった。

途中、牛に羽が生えた。

「もおおおおおおお！」

牛はやけに感激したらしく、そのまま天に向かって羽ばたいた。こうして俺達は、天国に行った。

ミスページ

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ああああああああああああああああああああああああああああああ

ミスページ（後書き）

編集の都合によるミスページです 申し訳ありません。

姉と兄と弟

小熊鳥の鳴き声は、ぶるるるる、だ。

おそらく咽喉辺りにある声帯を、壊れるくらいに痙攣させているのだろう。

地下街で生きる中では生息数の多いこの鳥はカラスよりも数が多い茶色の鳥で、カラスとは対立しているらしく血肉の死闘を繰り広げる。屈強な鳥ということだ。

世の中というのは一々が騒々しい。河原、鳥、人、機械。昨日今日だけでも幾つのノイズを受け止めただろう。耳障りな騒音ばかりで喧しい。

さっき見た夢では全てが音を経て崩れ落ちていたから喧しさの最たるものの様なひどさだったが、あの後には世界が清潔にスッキリして静まり返るのだとしたら、崩壊も悪くはないかもしれない。まあ、勿論俺がその元凶になるなんて、罪悪感に耐えられそうにもないから、夢のように頭の天辺からマグマなんて出したくはないけど。

意味不明だったな。何処から何処までが現実で、何処からが夢だったっけ？

そんなことを思いながら布団の上でぼやんとしていたホルシユであつたが、目覚まし時計が鳴っていないのに俺は起きたな、と気が付き少し怖くなる。

恐る恐る頭の後ろにある目覚まし時計に手を伸ばして掴み取り、

自分の視界に入れる。

そしてホルシユは、戦慄した。時計の長針が既に午後になっていることを、告げている。現在、午後一時。

「丁度バイト開始の時間に起きるだなんて……一時……おわった……遅刻だ……」

とにかくバイト先に連絡を入れて遅れることを告げなければなるまい、どう考えても一時間くらいは遅れるし、とそこまで思ってから気が付く。思い出す。

先日の出来事がどこまで現実であり、どこからが夢であったかを。ホルシユは、すっ、と起き上がって眠りこけて起きそうにもないスーを飛び越えて、押入れに手をかけて開けた。夢であってくれたなら、と思うが、もうあれが夢ではなかったことはハッキリとわかっている。

よく考えたら今日はバイトにはいかず、このことについて考えた方が良くのかもしれないとも過ぎる。しかしそれでクビにされたら他のバイト先を見つけなきゃならないのか、と思うと微妙な心持ちになってしまふ。

そんなことを思いながら開いた襖の先には、ああ、やはり姉がまだ眠りこけている。

そして饅頭宇怪を抱き枕にして、すやすやと寝息を經ている。

饅頭の方も、気持ち良さそうに眠っているらしく、呼吸の度に身体を膨らませたり細くしたりしている。少し可愛いな、と不覚にも

感じてから首を左右に振り、「おい、お前等、起きろよ」と声を掛けるがぴくりともしない。

その後も何度も起きるように声を掛けるが、その騒がしさに気が付いたのだろう、弟の方が起きてしまった。呑気そうに大あくびを搔いてから、「兄ちゃん、バイトは？」と言う。

「いいから、お前はまだ寝てるよ。それか、姉ちゃんを起こすのを手伝ってくれるか？」

「おやすみい」

「おいしいい」

「姉ちゃん信じられない程起きないんだもん。お隣さんに迷惑を掛けないように起こすなんて無理無理。諦めて、兄ちゃんも寝なよ」

「そんな悠長に構えてる場合じゃないんだよ。……うん、まあ」

「ねえ、なんか隠し事してない？ 僕が十二歳の餓鬼だからって、はぶいてるでしょ」

「いや、別に隠し事なんてしてないよ」

「あんなに嫌ってる宇怪を兄ちゃんが家に入れるなんて、よっぽどなことだよな？ ビーフカレーを食べさせてあげたくなった、なんて理由、餓鬼の僕でも嘘だってわかるよ」

「嘘じゃないよ。今回のビーフカレーは今までに無い程に良いデキだったからだな……」

「何か事件があっただんでしょ？」

「ふ？」

「いつも馬鹿みたいに元気な姉ちゃんが静かだったし、兄ちゃんは、何だか取り繕ってる雰囲気があったからね。明らかにいつもと違う空気だったよ。宇怪を家に入れたから、っていう理由とは別の、緊張感が、ずっと張り詰めてた。……子供って、特に弱ければ弱いほど、普段と違う空気には敏感なもんなんだよ。最近、僕は僕自身の

その性質に気が付いた」

「偉いじゃないか。でも、事件があつたわけじゃなくて、俺はビーフカレーを太郎君に受け入れてもらえるか心配してたから緊張してたの。早とちりすんな。……まあ、空気を読めるってのはいいことだと兄ちゃんは思うけどな。それと、お前は別に弱くもないってえ」

「……………僕が病弱だからって、変に気遣うの止めるよな！ 糞兄イ！」

ガバツと勢い良い音を経て、スーは布団の中にもぐってしまった。こうなると蝸牛が殻に入ったようなもので、なかなか出てこない。まあ、腹が減ったら出てくるから、放置しておいて大丈夫だろうと見当をつける。

ホルシユは、ふう、と一息ついてから、再び姉を起こそうと躍起になるが、宇怪の饅頭はある程度で起きて、押入れからぐにゅにゅと餅のように身体を変形させながら出て来たので良かった。

しかしシャアリは本当に起きない。ホルシユは思う。この姉より寝起きの悪い奴は世界全てを探し回ってもいないに違いないと。

だが、その馬鹿を起こす方法は長年ともに過ごす内に身につけている。ホルシユはその方法を体得しているのだ。

「スー！ 例のあれを持ってこい」

「……………」

「あ、そうだ、今怒らせちゃったんだ……」

仕方が無いので自分で取ることにする。部屋の隅の、いろいろな物が混雑している所から、ゴムボールとワインの栓に使われるコルクを二つ。この二つの器具を長年、どれだけ使い古してきたことだろうか。

ほとんど毎日、これを使って姉を起こしてきた、と感慨深くなるホルシユ。

「うゝん。……あ……きゃ……あ……」

シャアリの寝言。ハッ、とホルシユは夢の中で太郎が喋ったことを思い出す。餡蜜みたいに甘ったるい声で、あきゃあ、と口癖のように繰り返していたのを。

何だか焦らされるような感覚に囚われて、太郎に振り返ってみると、自分の な口で身体をぽりぽりと掻き毟っている。かゆいのだろうか。ていうか、憎たらしい宇怪のはずなのに、見た目がどうしても可愛い。姉が上層のアイドルを好きになるのはこういう感覚なのだろうか。

（め、めちやくちや可愛い……！……ハッ！）

危なかった、宇宙妖怪に対して可愛いという感情を発露させるなど全くもって油を断っていた、とホルシユは慌てて太郎から目を背けた。すると、

「う、うゝん……。ペ……。ろ……。り……。んちよ……」

再びシャアリの寝言。ウッ、とホルシユは夢の中でスーが口癖のようにその、ペろりんちよ、を言っていたことを思い出す。

（いかん、何だか怖い。姉は、俺が見た夢と同じような夢を見ているというのか…！ まさかな）

ホルシユは焦ってきた心の赴くままに、怖くなってきた心を元に戻すために、ゴムボールとコルク栓をスタンバイ。

標的は、シャアリの馬鹿みたいに開いてる口と、おだやかな寝息をたてている鼻腔。

「はああああ。……起きろこの糞姉があああああ！」

ホルシユは気合を入れてから、勢いしかないような勢いでゴムボールとコルク栓を、一気にシャアリの鼻口に突っ込んだ。すぼ、すぼ。

満腹そうな呑気顔だったシャアリの寝顔が、時間が経つにつれて紅潮していく。タコが無くしていた活気を取り戻していくが如く、姉は鼻呼吸も口呼吸も出来なくなったので苦しそう。今まであんなに心地良さそうだったのに、今は汗まで掻き始めて、悪夢にうなされていくかのよう。

やがて彼女は起きた。深い眠りから目を覚ました。ぼやんとしながら。

起きる時に、気持ち良い音を経てコルク栓とゴムボールを鼻口から発射するのは、いつもの光景だ。シャアリもまだ若い女性なのにそのような起き方をしたにも関わらず、照れもしない。ふわぁーと大きな欠伸を一つ掻いてから、「眠い」とつぶやいて再び目を閉じようとする。

二度寝を試みようとする彼女のオデコに、ホルシユは一発平手打ちをかました。ぺちん。良い音が十畳の一室に鳴り響いた後に、静まり返る部屋。

ぶるるるるる。小熊鳥のやかましい鳴きが、針を落とした音が聞こえてもおかしくない静かな部屋に、やけに大きく響く。ベランダにでも、一羽いるのかもしれない。なかつた。

「姉ちゃん。起きなくちゃ大変だろ。俺、今日はバイト休むから、河原に行つて、この宇怪をどうするか話し合おう」

小熊鳥の騒がしさを利用すると、声をひそひそと小さくすることによって、スーに聞こえないように注意しながら話すホルシユ。だが姉は起きたばかりで寝ぼけているらしく、ホルシユが声の大きさに配慮することに全然気が付かない。

「Tit anからこの子を助けるのは前提だからね。私達が全力を尽くして助けるんだよ。あと、スーには秘密にしておくこと。……そこんとは、わかつてるよね。あんた、スーに本当のこと言つてないでしょうね！ ……ん、あ？」

なるほど、これは完全にスーに丸聞こえな音量だな、とホルシユは心がしらけた。砕けた。

姉の方も自分の声が十畳に大きく響いていることに自分の耳で理解できたらしく、やつちまった、という表情。しばらく呆然としたような顔つきをしていたが、何事も無かったかのように押入れからのそのそと出てくると、いまだ布団の殻に閉じこもっているスーの方に向つて、一言。

「……寝てる？」

さっき起こしたのだから起きてるに決まつてる。ホルシユが首を

横に振ると、あちゃーと悔しそうに額を手で叩いてから、

「……………無かったことに」

と意味不明なことを言ってから洗面所に行った。顔を洗うのと歯を磨くことをしに行ったらしい。

再び十畳の一室は静寂に包まれた。小熊鳥の一羽も飛んで行ったのだろうか、鳴き声が途絶えた。

スーが何か独り言を念仏のように唱えてるのが聞こえてきた。

「どうせ僕は……………どうせ僕……………どうせ……………どうせ……………どうせ……………どうせ……………どうせ……………」

ホルシユは今起きたばかりだというのに、何だか疲れた。

疲れたのでもう昼寝でもしちやおうかなと考えてしまい、自分の先ほどまで寝ていた布団を見下ろしてみると、その上を太郎が乗っかっていた。太郎は相変わらずの形の口で、身体をぼりぼりと気持ち良さそうに掻いていたが、なんか人間で言う角層みたいなのがぼろぼろ零れていて、布団が汚されてるので悲しい。ホルシユ悲しい。

彼はため息をつくこともしないで、しばらくそこに立ち続けた。

そのうち姉が洗面所から戻ってきて、やけに爽やかな表情で言った。

「いやー、朝の洗顔って、気持ちいいよねー！」

弟のスーが布団の殻から頭だけを飛び出させて言い返す。

「もう昼だよ」

それだけ言って彼はまた布団に閉じこもった。

十畳は沈黙。

起きた直後だというのに鬱蒼とした気持ちのホルシユは、今度はしっかりと靴を履いて河原へ向おうとする。宇怪と一緒にいる所を他の人間に見られたくないという思いから頻繁に周囲を窺ってしまいうが、ある程度の人にそれを見られてしまつのはどうしようもない。

そこで、様々な類のゴミらしき代物が置かれている、空き地、に向ってリヤカーを見つけ出す。ぼろぼろで腐っている部分もあるが、使えないわけではない。

「これにあの饅頭を乗せて……と……」

太郎に風呂敷を被せてリヤカーに乗せる。これによってカモフラージュ。宇宙妖怪が乗っているとは誰も思つまい、俺って頭が良いじゃないか、と優越感に浸る。

「逆に怪しくない？ 河原にリヤカーで物を運ぶ人いるかな普通」

「BBQをする人とかね。使うだろきつと」

「風呂敷の理由は？」

「直射日光を浴びせてしまうと壊れてしまう繊細な器具を運んでいくということオーケー」

「ならBBQをしそうな雰囲気をかもし出さなくてはならないのね」

「そう。陽気なね、素振りをするといいかもな」

「肉を食べるのよ、っていうね」

「野菜も食べるのよ、ということだな」

「おー！ てんしょん上がっていいこうー！」

「おおお！」

シヤアリとホルシユは無理矢理に笑顔。なんか太陽さんさんって感じの陽気さで道を歩いていくが、河原に降りると野球をしている子供たちがいて、楽しそうに遊んでいる。

二人は笑顔でありながら子供達に怪しまれるか心配だったが、鍰付きの帽子を被ってはしゃいでいる彼らは野球に夢中で、二人に目を向けることにならない。

だが、カキーン、と金属バットで打たれた白球が奇跡的な確率で風呂敷を払い取った。

「あ」

風呂敷が落ちて、太郎の姿が河原の昼に現れた。太郎自身は呑気にも眠りこけていて、口から涎が垂れている。リヤカーで宇宙妖怪を運んでいる怪しい大人二人を見た少年たちは、どういう表情をしていいのかわからないみたいな感じで凍結してしまって動かなくなる。

小熊鳥が鳴いていた。

「いやー、この宇宙妖怪、勝手に家の中に入ってくるから、今から河原に捨てに行くんだけど、君たち、これいる？ 結構可愛いつち

や可愛いよね、宇怪にしてはさ。まあ、お兄さんは宇宙妖怪を飼うなんてまったくオススメはしない、けど……じゃ、またね、みんな！
……仲良く遊べよ！」

「少年たち、お元気で！」

ホルシュとシャアリは満面の微笑みを貼り付けたまま、わざとゆつたりとリヤカーを押し進めていった。ずっと背後から少年たちの視線が痛かったが、二人、気にしないふりをしたまま土手を降りて、ちようどどの角度からも見えない場所にて、一息付き、落ち着いた。

死体はその場所に隠しておいてある。土をかけてあるから、多分、そう簡単には見つからないだろう。その場しのぎにしか過ぎないが、いずれ、放置しておけばバレる。

とりあえず二人は、その場に腰を下ろして落ち着く。

で、太郎は腹が減っていたのだろう、そこら辺に転がっている小石をもぐもぐと食べ始めた。

そんな風景を眺めながら、ホルシュはぼやく。

「どうせ見られちまうんだったら、リヤカーなんて重たいもんでこいつを運ぶ必要なかったよなあ……。こいつに殿様気分を味合わせてしまった……」

シャアリは太郎をかばう。

「こんなぼろっちいリヤカーで殿様気分になれる訳ないでしょうが」

「……はあ」

「露骨なため息ね」

「そりゃ、ため息くらいつくだろう」

「ありがたいと思ってるよ。協力してくれること」

「そりやどうもね。しかし、俺としてはこいつを河原に置いて後は知らないフリをするのが一番ベストなんだけどな」

「命の恩人がTitanに罰されて穴ぼこだらけにされるのを、知らないフリをするだなんて絶対に無理、むりむり、ムリムリムリ！」

「だってさあ……Titanだぞ？俺だってTitanは憎いから、あいつらに痛い目を合わせたいとは思っただけど、宇宙妖怪を助けるだなんてなあ……同じ人間を助けるならまだしも……姉ちゃんが殺したわけじゃないなら、姉ちゃんはTitanに殺されないわけだし……」

「非情者！」

「ほ？」

「そんなナサケナイ弟だなんて、私は知らなかった！」

「いや……この場合はナサケナイとかの問題じゃなくて……」

「親切、親切、親切が我が家のモットーじゃなかったの！」

「はじめてきいたよ」

「うう……私は、悲しい……」

姉はガクツと地面に倒れて、両の掌を付いた四つん這いの姿勢のまま、泣いているかのような仕草をしているけど、これは嘘だな、とホルシュは思った。

「悲しんでないだろ」

と言いながら顔を覗いてみると、本当に泣いていた。ぼろぼろ泣いていた。頬から涙が伝って、それが零れて地面に染みを作っていた。

何とも言えない空気になって、ホルシュはその場でまた呆然とした。

呆然としながら傍を見ると、太郎がまだ小石をぼりぼり食っていて呑気。

ぶるるるるるる。小熊鳥。ぼりぼりぼり。太郎。音が入ってくる。意識がぼやんとする。

ぼやんとし続けても仕方が無いので、ここは一つ、決意してみるかとホルシユは思う。

定職についてるから時間がひどく束縛されているわけではないし、宇宙妖怪を助けるのではなく姉を手助けするのだと考えれば、小難しく悩むこともない。

そう、考え方の変換だ、人間とは考え方によって幸せに心安らかに生きていくことができるのだ。やったね！

姉の泣き落としに負けたホルシユは、早速どうすればこの太郎をTitanに殺されないようにできるのか、手段を考えてみることにする。だが、勿論簡単には浮かばない。

地下街に住む人間にはチップが埋め込まれていて、そのチップは高性能らしくすぐに犯罪は発覚するのであって、おそらく太郎がナイフでこの男を殺したということは、判明していてもおかしくはない。死体が見つかったという見つかっていない云々ではない。もう太郎が犯罪を犯したことはTitanに知れていることだろう。だがしかし、まだ諦めるには早い。なぜなら、太郎は宇宙妖怪だから、彼にはチップは埋め込まれていない。よって彼の位置はそう簡単に

Titanには特定されたりはしないはずだ。さらにTitanの稼働時間は二十四時間というわけではなく、夕方から深夜にかけてである。だから河原から逃げるなら今の内だ。夕方になる前に、Titanから太郎が身を隠せる場所を見つけ出してやれば、おそらく、太郎の命を救うことはできるだろう。ただ問題は、これから一度でもTitanに見つかってしまったら、それで太郎の命はガトリング砲でぶち抜かれてオシマイということだから、非常に難易度の高い問題だ。Titanなんてそこら中にいる。夕方から深夜にかけて常に外出をしなければ、大体は大丈夫だが、時間が進むにつれて、太郎を搜索する手は広がっていくのだから、ある日、昼とか朝にでも太郎に対する魔の手が伸びる可能性は、ある。

とにかくハッキリと言えるのは、太郎を助けることなんて、超むつかしい。超むずかしい。

ホルシュは自分の額に指を当てて、
「本気を出すしかないようだな……」

と呟いた後に自分が数年バイトをし続けたことによって築き上げた独自の人脈から問題を解決できる可能性というのを模索することに集中、フォーカスが一点に絞られ、意識は銀河を回転して数々のヒント、思い出、想像、全てが銀河的ENERGYの名の下に集束されていくではないか。

ハッ、と閃光が走る。

「そうだった……宇宙妖怪を集めている気変わりな奴が、いたではないか……！」

ホルシュは自分の人脈の素晴らしさに感動して、目頭が熱くなっ

た。
その時、携帯電話がT R R R Rと鳴った。バイト先の店長から
だった。

「あ、店長、今日はすみませんでした……」
『君、クビね』
「え」

ぶちっ。向こうから切られる。

別の意味で目頭が熱くなってきて、ホルシユもその場で四つん這
いになってうずくまった。

姉弟はお互いが向かい合う形となって四つん這いになっていて、
ひどい光景。

ぶるるるるるる。ぼりぼりぼりぼり。

「邪念が、今日から明日まで、何時まで続くのだろう」

そこは地下街の中でもさらに地下。人間は宇宙妖怪を飼ってはいけないという法があるというのに、彼女は自らの先代が遺した遺産を利用することで巨大な地下空間を建設。そこは極一部の者だけが知る隠された空間であり、Titanという力による制圧の届かない場所でもある。

アング・ラ・ノノ・エ・デンデデン。彼女はその場所を自らそう名づけた。たまにそんなネーミングにしたことを後悔するけど、寝て起きたら忘れる。

さて、彼女は今宵もただ揺れている。生きてるのか死んでいるのか本人にもわからなくなる時がある程度には、彼女の意識は錯綜することがあるのだが、自分と数々の宇宙妖怪にとっての平和なる平地であるそこ。アング・ラ・ノノ・エ・デンデデン。

そこに、見覚えの無い青年が現れた時、彼女は紅茶を飲んでいた。ちゃぶ台で座椅子にすわりながらテレビを見て、世界の撒き散らす怠惰や嘘ややるせなさ、人間のくだらなさ、逆に言えば自分自身のくだらなさ。せつなさとかも。

紅茶を飲みながら、彼女は自己を卑下し、人間という存在に対する嫌気を強めることによって世の中で真剣に生きる必要なんて全くないわ、と自分自身の揺らいでいる生活態度を改めないための動機にして、心を落ち着かせていた。

そんな風にしてゆったりしながら、たまに宇宙妖怪たちと戯れる。彼女は幸せであった。

だから青年が現れたことは、彼女にとっては気持ちの良いことではない。自分の幸福が切り刻まれるような恐怖を覚えたからだ。自らの空間に他人が入ることを、彼女はあまり良しとしない。

報酬をもらうことを前提に、Titanから逃れたい犯罪者を一時的にかくまうことはあるがそれは報酬があるから許すことであり、報酬なしで他人をアング・ラ・ノノ・エ・デンデデンに入れたくない、要は人見知りで人間嫌いというのが、彼女の性格だ。

言い忘れていた、彼女の名前は、三井〃ヘンパンス〃F。ヘンパンスは紅茶のカップをちゃぶ台に置いてから一息つく。そして、「何か御用のある方でしょうか」と声を発した。

青年の返事はすぐにきた。

「以前、人づてにこの場所のことを聞いたことがあります、ここなら宇宙妖怪を一匹、引き取ってもらえるのではないかと、思ったのです！」

ああ、面倒な話になりそうだな、と青年の言葉を聞いた途端にヘンパンスの心は萎んだ。

テレビを真つ黒な画面にしてから、ヘンパンスは座椅子から腰を上げると、

「なんで宇宙妖怪を人間が連れてくる？ 地下街の人間と宇宙妖怪は、なるべく接点を持たないようにするものだ、思っていたがな」と言った。ヘンパンスはまず、相手側の事情を知ろうと思ったのだ。

青年も、というかホルシユなのだが……。彼も、事情を理解してもらわなければ太郎を引き取ってもらえないだろうと思っていたので、先日からの経緯をヘンバンスに話すことに躊躇はしない。

ホルシユが、人が死んだなどということを知り初対面の相手にも関わらず喋れたのは、ヘンバンスが裏の世界の人間だからこういう話には慣れているだろうと想像していたからである。

実際、ヘンバンスは犯罪者をかくまう事が多いので、ホルシユの話も聞いても特に驚きもせず、胸の内、（こいつはちゃんと金払ってくれるかな）、とか想像する余裕がある程だった。

ヘンバンスは言う。平然とした声つきで。

「まあ、事情は大体わかったけど、とりあえずその妖怪を見せてよ。モノによっては高くなることもある。……逆に、安くなることもあるんだけど」

金の話。それはひどく現実的で、単純。故に、大切であり、またひどく忌み嫌われることもある。

何時までもアング・ラ・ノ・ノ・エ・デン・デンで、ゆたゆたと揺れていたヘンバンスからすれば、金というものは必要不可欠であり、重要にしなければならぬことの一つである。

なればこそ、慈善事業という訳にはいかない。

ホルシユは心の中で（ただじゃないのかよ……）と経済的な負担に対してしんどさを感じはしたが口には出さず、表情にも出ないよう注意する。注意しながら、外で待たせていた太郎とシヤアリを呼び、ヘンバンスの前にその姿を見せようとする。

シヤアリはリヤカーを大変そうに引きながら、風呂敷をガバツと勢い良く取り外し、

「太郎っていうんです。可愛いですよね、この子」

とヘンバンスに朗らかな様子で話しかけた。太郎は の口をもぞもぞとさせながら、饅頭のような白い体のこともぞもぞとさせていて、全体的にもぞもぞとしている。何か緊張しているか、恥ずかしがっているのかもしれない。周囲には他の宇宙妖怪たちがたくさんいるから、それで様子がおかしいのかもしれない。

太郎をしばらく観察したヘンバンスは、腕を組んでから、物事を考えている人のようなポーズをしばらくした後、座椅子に座って紅茶を啜った。

で、その後にまた立ち上がり、謎めいた行動に戸惑っているホルシユとシヤアリの方に顔を向けてこう言った。

「こいつ、弱そう」

言葉が通じているのかは知らないが、弱そうと言われて太郎がしよんぼりと萎れた。枯れた花みたいに。

真顔でそんな言葉が発されたので、返事一つを返すこともできなくなつて、あわわわわ、となつて二人に続けてさらに追い討ちを掛ける。

「あ、ちよつと待って、思いついたことが一つあるんで」

と意味深な言葉を残して闇に紛れた。紛れる途中で、

「あ、そのちやぶ台の所で、座って待っていて」

と言うので二人はその気遣いに応えて足を進め、ちやぶ台のところに腰を下ろした。

太郎はリヤカーで相変わらずぶるぶる震えている。

ふと見ると、ネズミに似ている宇怪にちよつかいを出されていて、嫌がっている。太郎泣きそうだ。

「いやー。あつた、あつた。金が無い奴は久しぶりだから、ちよつと探しちゃったよー」

腹ただしいことを言いながらヘンバンスが闇奥からのっそりと影を現した。

「か、金は…まったく無いわけでは……」

ホルシュがむかつとしながら反論を口に出している途中に、ちやぶ台に一枚の書類が置かれた。

ホルシュとシャアリが注目して書類を見てみると、

『分割払いに関する契約』

という類の内容が書かれている紙面なのだと理解するに至った。

「口、ローン、ということですか」

「そう。借金をあなたに勧めている」

「し…しかし…」

「利子は低めに設定してあげよう。私は別に闇金というわけではない」

「でも…信用できませんよ、そんなの」

「いや、その書類に全部書かれている。真剣に読めば大丈夫。私、真つ当、真つ当」

「あ、あやしい気が……」

「信じなさい。貧乏人たちよ」

「報われるのですか」

「わからない」

「ほふ？」

「わからないと言っている」

「ふふう……！」

「ホ、ホルシユ……。私は信じるわよ。信じなきゃ、何もはじまらない！ 太郎を救うことは出来ない」

「ね、姉ちゃん……。まじなのか……」

「真剣よ。マジよ。私は貧乏人だから、信じることにするわ。神を」

「神じゃなくて、相手は同じ人間だぞ！」

「神だと思えば神に見えるはずよ。発想の転換よ。無理矢理神さまだと思えばいいのよ！」

「それは駄目な方向に爆進している方角じゃないだろうか」

「あなたがこの人を信じられないならば、あなたは私を信じなさい。この人を信じる私を信じなさい。そうすればローンも何時の間にか、返済できていることでしょう」

「姉ちゃんじゃなくて、俺と父と母が借金を返すことになりそうだけどね」

「そこはケースバイケースよ。とにかく今必要なことは、決断と信心よ。わかって、ホルシユ」

「あまりわからないよ姉さん」

「シャアリは満面の微笑みを湛えて、

「なら、わかれ」

と弟を脅迫した。その鬼気迫るようなものを見せられてホルシユは確信した。何時の間にか俺だけがアウエーになっているではないか……と。

とりあえず束の間の抵抗を試みる。

「朱印ないんですけど」

ヘンバンスは間を置かず、

「親指から血を出してくれればいいよ。小指でもいいしね」

と抵抗をぶちやぶる。しかも血を出させるとかひどい。てか小指とかイメージが何か悪いから言わないで欲しかったホルシユであった。

ホルシユは額からだらだら汗が流れてくるような錯覚に襲われてから、脇汗が滝のように流れていく錯覚に襲われた。そして自分が脱糞したような錯覚に襲われたとき、ホルシユは自分がとても臭いのではないか、という錯覚に襲われて泣きたくなくなってしまった。

だけど彼は、負けないで頑張ろう、こうなったらヤケクソや、と脳内で阿呆みたいに呟いてから、用意された赤錆のカッターナイフで親指の腹をちよいと軽く切り、印。ローンが成立したらしかった。いろいろと手続きとかもつとあるんじゃないかとも疑わしいが、ヘンバンスは幸せそうにその書類を眺めていた。

そして書類を持ちながら立ち上がり、彼女は、

「いやあ、契約成立です。信用してくださいありがとうございます。私もあなた方を信用します」

などと急に態度が良くなってお菓子を奥から出してきて食べさせてくれたりした。

一日十個限定のやつとか、一日五個限定の奴とか。ほつぺたが落ちそうになる味わいを体験させられ、二人は気が緩みながらHAPPYになった。

そして最後には笑顔で締めくくられ、太郎と別れを告げる。

「また数日後に来てください。手続きがありますので」

とヘンバンスに帰り際に言われてから、二人は夕方になりはじめて空に出る。

Titanの活動時間が開始する前に、太郎を安全な場所にやることができた。

その達成感に満たされて、二人はすっかり陽気なおしゃべりを交わすようになる。

あはは、うふふ、と帰っている二人の背中を、ヘンバンスが不敵な微笑みで見送っていたが、二人はそのことに気が付かぬまま、ひと段落がついたと安心した心でアパートに戻ったのだった。

南無三。

歌がきこえる

いやー、太郎を運びながら結構歩いたから疲れたよね、などとホルシユとシヤアリは語りながら自分たちの住む地区へと戻ってきた訳だが、Titanの気配が現れ出す夕方になったせい、街に神妙なる雰囲気が出てきた。時折その原因である漆黒の装甲を持った蟹型機械とすれ違う時に、突如砲口を向けられやしないかと心配してヒヤツとするが、つんざくようなキヤタピラ音を鳴らすだけで、Titanは二人の反対側を通り過ぎていく。時折、砲撃が地下街に響き渡ることもあるが、それは誰か犯罪者だと認識された者が、殺されて穴だらけになったのだと推測される。

「あーあ」

「ああ」

そんなぼやきが自然と出る二人であった。電線と電線の間を、小熊鳥が飛び回っている。

勝手に使っていた、空になったリヤカーを空き地に戻そうとする。

「なんとか、ひと段落だな」

「まだ安心するのは早いけど」

「とりあえず、今日は、だな」

「そうね」

そんなことを言い合いながらアパートに帰ろうとしたその時。シヤアリが背後からの気配、つまり両眼によって見られているという視線に気が付く。その察知した感覚の赴くままに背後へと振り向いてみると、彼女の黒眼に夕焼けの光が映り込むと共に、その光を背にして子供二人が突っ立っているのがわかった。光のせい、影になっっている。

黒く染まっている影。突っ立っている二人の子供の黒い影。
歌が、聞こえた。

夕暮れ時の小熊鳥

朱色に染まって何処へいく
ことごと電車に揺れながら
帰れる場所に 帰ろうか

天の星より落ちてきた

小さな小さな災害者

人らはこの地に追いやられ
遂に果てては息絶える

人よ人よ何処へいく

僕らがここで見送ろう

枯れて焦げいく海の子よ

土に還り何処へいく

朝に騒がし小熊鳥

朝日を背にして何時へいく

懐かしい生まれの陽

眠れる場所にいくのかな

「……………」

「どうかしたの、姉ちゃんはぼーっとして」

「いや、別に何でも……………」

「夕陽が何かおかしい？」

「何でもないって」

「あ、そう」

シャアリは子供の時から、他の人には見えない、聞こえない、わからない、そういうものを理解できてしまう霊感じみたものを持っていた。他者にそのことを言おうとは思わない。霊感を持っている女なんて可愛くなくて嫌だ、そんなのバレたくない、と彼女は思うからであった。

彼女の耳には子供の背丈の黒い影二つが歌っていると思わしき声が聞こえている。男の子と女の子。どこか切なく、どこか不気味で、どこかがおかしい。そんなメロディーと歌詞を耳にさせられていると気分が悪くなる。

シャアリはさっさと部屋に戻りたいと思ってホルシュを急かし、夕焼けを背にしたまま空き地を後にしてアパートのある方角へと歩き出す。ホルシュが不思議そうにしているのがわかったので、

「何だか懐かしくなる時つてあるじゃない。夕陽を見てるよさ」

とごまかした。ホルシュはそれで納得したらしく、

「ああ、感傷に浸ってたのか」

と言った。自分に霊感があることをばれたくないシャアリは一安心したが、歌はまだ耳に残っている。

夕暮れ時の小熊鳥

朱色に染まって何処へいく

ことごと電車に揺れながら
帰れる場所に 帰ろうか

天の星より落ちてきた

小さな小さな災害者

人らはこの地に追いやられ

遂に果てては息絶える

人よ人よ何処へいく

僕らがここで見送ろう

枯れて焦げいく海の子よ

土に還り何処へいく

朝に騒がし小熊鳥

朝日を背にして何時へいく

懐かしい生まれの陽

眠れる場所にいくのかな

誘拐ではない

部屋が朱に侵されて普段とは別の部屋のよう。全てが朱に染まり、朱だからといって燃えていく気配はないが、何か訴えかけてくるような、焦燥感を持つことを迫るような、迫真、と言い換えられる何かを持っているとも言える朱の部屋。そこにシャアリとホルシユは帰ってきて、ああ疲れたなどとぼやきながら、ホルシユは酒が飲みたいなあと思うが太郎のために貯金を崩さなくてはならないことを思い出したので諦める。酒飲むと金がもつたいたい、という気持ちの方が勝ったので、バイトがあるわけでもないしとりあえず休憩しようかな、と布団を敷こうと閃く。

シャアリは冷蔵庫からお茶を取り出した。麦茶。コップになみなみとギンギンに冷えているそれを注いでから、一気飲み。一気飲みなどするから頭痛が生じるが、シャアリにはその頭痛が、痛気持ち良いというのだろうか、とにかくちよつと爽快だと感じられる頭痛。頭痛が治まってから、彼女は白い饅頭の宇宙妖怪を心配する。

「太郎、あそこにいた妖怪たちと仲良くなっていけるかなあ。いじめられたりしないかなあ」

麦茶の入っているガラス瓶を冷蔵庫に戻してから、心配そうにふうと息を吹くシャアリ。

で、何気なくテレビを点ける。画面では丁度ニュース。夕方のニュース。

ベージュのスーツを身に纏っているアナウンサーは三十代に突入

してしまつて年齢という名の悪魔に心がやられてしまつてたまに憂鬱、だけど友達と一緒にそれを愚痴りあつてストレスを軽減している、と言つた感じかなとどうでもいい推測をしようシヤアリ。

アナウンサーが原稿を読み上げている。上手に、よどみなく、事務的とも言える無感情で。

『本日、上層階級55719323以下にあたる全員を地下街送りにするという決定が、政府によつて為されました。これによつて55719323以下にあたる全員に地下移動命令が発令され、今週以内に地下住民になる手続きを役所にて行うことが義務付けられました。そのことで各地から批判の声が相次いでいますが、政府は特に回答を示していません。これほどの規模での地下送りが実施されることは非常に珍しいことですから、この問題に関しての論争は、しばらく続くことが予想されています』

画面が切り替わると、すでに八十歳は超えていると思わしき頭髪が全て真っ白でよぼよぼの、腰がまがつとるお年寄りが映る。杖を突いて歩かなくてはならない、足腰が弱つていそうに見える彼も、地下送りを命じられた一人らしい。

『この年で地下送りだなんて、本当、夢にも思わなんだ』

そのおじいさんから見れば、インタビューしてくる人間は地下送りされない側の人間だから、憎たらしいのだろう、おじいさんのインタビューをされている姿は実に陰気、なおかつ、眼が血走っている。インタビューはそれに気が付いているだろうが、物怖じせず大胆に、質問を繰り返す。

『丁度おじいさんは55719323の番号にあたるわけですが、

そのことについてはどう思われますか』

そんな質問をされたおじいさんは、ぷるる、と切なそうに震えてから、涙を零した。

よし視聴率がアップだけ、とインタビュー側は画面の外で喜んでいることだろうか。

おじいさんは涙を木綿のハンカチで拭ってから、

『番号が憎い。人間を番号でくくるなんざ、間違ってると思
う』

と答えた。そして地面に崩れ落ちた。

「……地下街に住んでる側の人間からすると、なんか微妙な心境になるわね。まるで地獄にでも突き落とされるようなことだと勘違いしてるんじゃないかな」

「まあ地獄よりはマシだろうけどね。でもまあ、お年寄りにはきつ
いだろうな。ここじゃ自分たちの命は自分たちで守る必要があるし、
人間の心も荒んでる。食べ物も満足には得られないし、犯罪に巻き
込まれる確率も高い。…それに」

「……地下街の人間による、墜落者狩りの被害にあうことがおじい
さんは一番心配なんだろうね。Titanによる犯罪抑止力がある
と言っても、それを気にしないで殺人をする狂った連中なんて、い
くらでもいるし……」

「…まあ、今回は大規模な地下送りらしいから、堕ちてくる連中の
数だってそれなりな訳だし。その大勢が結託して降りてくるのだと
したら、まあ、地下街の連中が一方的に虐殺をするってこともない
とは思うけど」

「心配なのはそれが争いに発展することだよね。狂った連中と、地下送りされた屈辱でいきりたってる連中に武器でも持たせたら、最終的には全員Titanにぶち抜かれて死ぬってこともありえるかも……」

「まあ。そんな一大事な状況にならないように、俺達は祈るとしようか」

「何に祈るのさ？」

「そうだな……とりあえず……両手を合わせてれば、いいんじゃないかな」

「てきと〜」

「じゃあこういう時はスーに聞いてみよう。スー君、まだ機嫌が悪いのかな？ そろそろ布団に籠るのは止めて、テレビでも見ようじゃないの」

ホルシユは中央だけもっこりしている布団に向って声を掛けたが、しかし返事は来ない。まだ拗ねているらしい。ホルシユは面倒臭いなあ、と思いつつ腰を上げると、毛布をがばっとめくり上げて弟の姿を朱色の世界に現そうとした、が。

「……あら？」

その布団の中に病弱の十二歳、スーの姿は無かった。

代わりに、少年くらの大きさはある岩と、置手紙らしき紙が一枚あって、紙はガムテープで岩に貼り付けられている。紙には黒のマジックで、こう書かれている。

『弟は預かった。身代金は百億円』

ホルシユは紙を岩からベリツと剥がした後、まじまじそれを眺めた後、シャアリにその紙を見せる。シャアリはため息を一つ付いてから、立ち上がる。

「まだやってたの？ あの馬鹿は」

「姉ちゃん、迎えに行ってきた」

「後でジューズおごってね」

「えー。ふざけんよな」

「まあまあ二人で行きましょう。ちょっと私もあの馬鹿の作品がどうなってるのか、気になるし」

「そうだな。確かに久しぶりだ。……病弱の弟を実験台にされるのは困ったもんだけどな」

「まあ、肉体運動をさせるわけじゃないし、外に出ること自体は悪くないことだし。作品も馬鹿だけちょっと面白いし、私は良いと思っただけだね」

「でもあいつ。連れてくなら薬もちゃんと持っていつてもらいたいもんだけどな。途中で発作が起きたらどうするんだよって話」

「それはそうね。今、あなたが持っていけばいいのよ」

「……………いくか」

「ええ」

部屋が暗く染まってきた。闇に吞まれ、影は薄れ、電灯が欲しくなってくる。

二人はけれども外に出て、寒い風に体を震わせながら、道を歩いた。

空には相変わらず鉄の天井。

来週あたりには、何万人という数の人間が、あの天井から降りてくるのだ。

人型機械と子供たちと教師

機械を兵器として使う場合において人型にすることのメリットと
いうのは、あまりない。

それよりもっと効率の良い形というのはある。例えば戦車という
のはキャタピラが取り付けられているわけだが、足場の悪い場所にも
進行できるというメリットがある。構造的にも人型というのは脆
いが故に、兵器というのは人型にこだわる必要はまったくない。

という一説はあるらしい。

が、ロマンを追い求めて生きる人間には、効率性、という言葉だ
けでは折れない情熱というものがあるらしい。故に中田「ヒート」
Gは、教師をやりながら、長い年月、一人で人型機械の製作に打ち
込んできたのであろう。

地下街にも学校というのはある。ヒートは八城姉弟三人、全ての
担任になったことがある小学校の教師であり、放課後にはすぐ自らの
趣味である機械製作に打ち込んでしまうという、教師として仕事
に真面目に取り組んでいるとは言い難い、多少自由の匂いが香ばし
いマッチョ男である。

八城姉弟は父母が出稼ぎに出ているという境遇のこともあってか、
ヒートに良く面倒を見てもらうことがあった。今でも仲良くしてい

て、スーなどは特に面倒を見てもらっているようだ。

シャアリが小学生の時も、ホルシュが小学生の時も、ヒートは人型機械開発に取り組んでいて、それを怠る日は、ほとんど無かったと言ってもいい。彼は人型機械に取り憑かれているがごとくに、それに情熱を傾けてきている。エネルギーの八割くらいは、そのために使っているのかもしれない。

八城姉弟だけでなく、数多くの人々が、彼にこう尋ねてきた。

『なんで、十年二十年と、しかも一人でこんなに大変なことを続けているのですか？』

ヒートは嬉しそうな顔をしながらこう答える。

『情熱ですよ、情熱』

実に単純ではないか。明快ではないか。

人々は彼のあまりの単純さに呆れ、また同時にある種の羨望を感じる。

鬼気迫るような意欲。地下にて鬱屈とした日々を送っている者の多いそこでは、汗を撒き散らしながらもキラキラと輝いている彼を見れば、何かを感じずにはいられなくなるのだ。それが心地よい感情であれ、心地悪い感情であれ。

賛否両論と言った感じの性格。真つ二つに好き嫌いが分かれるような。その理由はつまり彼の性格がハッキリ白黒な代物である、ということでもあるかもしれない。

スーは彼の性格をうざったらしく感じる時もあるが、人間としては尊敬できる部分もある人だな、と冷静に彼を評価することがある。ただ病気の自分を躊躇なく煙ったらしい作業場に連れてくる神経を

疑うというか、実際作業場にくると咳が、ごほっ、ごほっ、と激しく出ることがあるのでそれは嫌だったりする。

だがスーは、ヒートに作業場に連れて行かれることを拒否しないのは、つまりスーにもロマンに憧れる幼心というのがあるということだろう。スーは冷静な性格をしているが、まだ少年の心である。

ほこりが舞っている作業場にて、彼は眼を完全に開き、仁王立ちの姿勢、ぽかんと開いた口、あまりの信じられなさに内心では喜びみたいなのが滾っているがそれを表情や仕草では出せずにいた。

ヒートはそんな彼の様子を見て満足したらしく、鼻を鳴らした。

「すごいだろうスー。俺様もびっくり仰天だ」

「先生がびっくりするんですか」

「自分の想像以上の物ができたんだから、驚くさ」
「なるほど」

ヒート最新作の人型機械は、左右からのライトに明るく照らされて、二足にて直立している姿を露わにしている。

これまでとはレベルが違う、とスーは心が高揚した。心臓が高鳴り、唾液が分泌され、咳が出る。

「ごほっ、ごほっ」

「どうした？ 大丈夫か」

「いえ、どうやら僕、驚くと咳が出るみたいです」

「そんなに驚いてくれたか。…自分で言うのも何だが、こいつは俺

様の作品の中で群を抜いて最高傑作だと思う。まだ起動はさせていないが、外観の良さは圧倒的。かなりcoolだ！」

大の大人が、子供のように目を輝かせている。

スーは相手のテンションの高さに多少たじろいで、何と返事していいやら、と思いつながらもう一度目の前にある人型機械を眺める。そして単純に、すげえ、と思つて口を呆然と開いてしまふのだが、本人は自分の口が間抜けに開いていることに気が付かないのだった。

良い一品を完成させたことで舞い上がっているヒートは、スーの間抜けな口を見て、指をさして大笑いしてからこう言った。

「池の鯉のようだぞっ」

スーは鯉を恋だという風に捉えて、『池の恋』とは何だろう、と大笑いされながら考えてしまつてまたも呆然、その呆然ぶりを見てヒートはさらに爆笑するのだった。

「いやぁー！ にしても、今日は最高の日だっぜーえよ！」

などと、うざつたらしく喚きながらヒートはすっかりご機嫌だ。

そしてスーは大きく口を開けて笑っているヒートを眺めた後に、また人型機械を見上げると、

「たしかに僕は、この機械に恋をしてしまったかもしれません」

と言つたのでヒートは少し眼を丸くするのだった。ちよつとひいた。

それで彼が何と言葉を返そうか考えている時に、スーの姉と兄が作業場に現れた。

二人の第一声は、

「うわっ」

「いやー、ほんと、俺様、結構盛り上がってきちゃってるよー」
などと言つて彼は次に何をするのかと思えば、スパナを二つ、両手に持って踊り始めた。なんか、リンボーダンスみたいなの、踊り。

ウツホツホツホーッホツホツホーッホツホツホー。

三人揃つて口をあんどぐり開いた姿勢で、その光景を眺めた。あまりに恐ろしい光景だったが、三人とも目を反らさずにヒートの情熱的なリンボーダンスならぬスパナーダンスを見ること二十分。

さすがに彼も疲れるらしく、荒い呼吸をしながらスパナを床に置くと、全身から汗を滝のように流したまま、「あー寒い」と言った。服が冷えたのだろうか。

結果的に、彼のやかましいテンションは下がってくれたらしく、パイプ椅子に腰を下ろすとヒートは「誰か乗ってみたい奴いる？」と八城姉弟に声を掛ける。

それに反応して、良い姿勢のままにピーンと手を挙げたのはスーだった。背筋ぴーん。

「ハイ！ 乗りたいです、先生ッ！」
かなり良い返事だ。

「なら、こつちに来い。起動させてやることは出来ないが、コックピットに入れてやることはできるからな」

「やったっ！ 兄ちゃん姉ちゃん、聞いた今の!？」

「聞いた聞いた」

「楽しませてもらうといいよ」
「ういー」

鼻歌でも歌いそうなご機嫌ぶり、あるいはスキップでもしそうな好調ぶり。

咳き込みながら、彼は人型機械の麓へと近寄ると、何処から乗ればいいのかと迷ってきよるきよる落ち着かなくなる。

ヒートはその落ち着かない彼にリフトに乗るように促す。

スーは多少落ち着いてから、その言葉に従い、リフトに乗るとそれが起動する。それによって彼は人型機械の鳩尾、コックピット部分にまで運ばれて、そこから機械内部に入り込み、シートに座った。内部は本格的にロボットっぽい、とスーの少年の心に激烈なる刺激がぶつ刺さり、彼はシートに座りながら操縦桿を握ったり、センサーっぽいのに触ったりなどした。起動しないとわかってはいたが、触らずにいれなかった。

だがあまりに興奮しすぎたのだろう、咳込みがひどくなってきてしまい、ごほっ、ごほっ、とスーの咳の音ばかりが作業場に響いた。
「スー。薬、飲め」

「ごほっ……ごほっ……。……わかった」

ホルシユの言葉に従わないほど聞き分けの無い少年でもないのは、スー自身が自分の病気が厄介なものであり、またその治療のことで家族に経済的負担を掛けていることに引け目を感じているからである。彼はシートから立ち上がると、リフトに乗り、そして水道を借りて、薬を水と共に飲んだ。

次に手を挙げたのは、シャアリだった。

「はいはいはいー。次は私が乗せてもらってもよろしいでしょうかー！」

少しテンション高めな彼女の、やけに元気で大きな声が作業場に響く。ヒートが「良いよ」と言う前に既に彼女はリフトに歩を進めていて、ちよつとムツとしたヒートを尻目に、シートに座った。

「いやー、すごいねー、すごいよこれー、すごいーすごいー、すごいー、すごいすー！」

彼女はずつとそればかりだった。で、適当に切り上げて戻ってくるのと、

「これは確かに最高傑作だね。今までのが霞んで見えちゃうよ、ぬはははは」

と笑った。ヒートは得意気に腕と足を組んでいる姿勢のままに、「まあ、今回はちよつと本気を出しすぎてしまったようだな」

と調子に乗る。そんなやりとりを傍目にしながら、姉と弟が楽しそうにしている姿を見るにつれて楽しみになってきていたホルシユがリフトへと歩き出す。ふふふ、とか言いながら。

しかし丁度そのタイミングで、ヒートの教え子たちが現れてしまった。子供十五人近くが、まるでホルシユがそれに乗るのを妨げることがとくのタイミングで現れて、一瞬にして人型機械を彼らを取り囲んでしまつて喧しく騒ぎ始める。すげー、かっけー、のせてー、いいなー。

こうなってしまうってはホルシユは乗れたもんでもない。姉弟の前ならまだしも、見知らぬ子供たち数人、しかも弟のクラスメイトと思わしき連中の前で人型機械に乗ってはしゃぐことなど、彼の羞恥心が許しはしなかった。戸惑っているホルシユを見かねてヒートが声を掛ける。

「おい。ホルシユ、お前乗らなくていいの？」

「あ、あははー。いや、気が変わったというか、乗り物酔いしそうな気がしてきたから、いいや。また今度の機会にするよ」

「あ、そうなの？ 勿体ない。……よし、じゃあお前達、乗りたいならどんどん乗っていいぞ！ 起動はしちゃ駄目だけどね！ リフトに並んで順番にな！ 一人五分までだ！ 順番を守れよな！」

子供達の中には待ち切れず、ぶーたれる奴もいたが、それぞれそいつで楽しそうに遊び始めた。その様を遠目にホルシユは眺めながら、ふと、病弱のせいでスーがクラスの前で馴染めていないことを思い出して、ちよつとスーの様子を窺ってみると、案の定、あまり浮いた顔をしていない。

だが親切な子というのはいるもので、それを見かねたらしい子が、スーに気を遣ってくれているのだろう、

「まだアレに乗ってないんだけど、スーは乗ったんだよね？ どうだった？ すごかった？」

などと楽しそうに尋ねてくれる。スーは、緊張しているような、ぎこちないような感じではあるが、話をしていくにつれてぎこちない表情がどんどん柔らかくなっていった。それはホルシユやシャアリから見ても、微笑ましいことであると同時に、安心させてもらえた

ことだった。

「まっ。…機械は勝手に逃げたり、しないもんな。いつでも乗せてもらえる、か」

「そりゃそうよ。ていうか、あんたまだロボットなんかに乗りたいがるお年頃だったのね」

「姉ちゃんだってはしゃいでたじゃないか」

「私はまだそういうお年頃なのかなー」

「なのかなー、ってどういうことだよ。……まあいいや、大人は、先に帰るか」

「子供の時間ってことかな」

「ロマンに溢れてるロボットには、やっぱりさ、子供が側にいるのが、似合うよ」

「それは、そうかもね……。みなよ、ヒートのあの顔」

「あ、本当だ」

二人は、ヒートの、子供達と人型機械を見るその顔を見て噴き出さずにはいらなかった。

その表情もだいぶ子供染みていたからである。

「帰ろっか」

「そだね」

大人は家路に付き、夕御飯の仕度をする。

そして、少年の帰りを待った。

その男、ヒート

ウーツホホー。ツホツホー、ホツホー、ホツホツホー。

小石ばかりが転がっている何にも無い場所に、焚火台が一つ置かれている。そこに木の枝や薪が入って火が点いて焦げている。

彼がそこで踊り続けているのは、興奮が冷めぬからだろうか。

焚いた火の周囲を時計回りで、懐中電灯ダンスをしている男、ヒート。焚き火の熱で肌が赤みを持っているが、それが更に彼の踊りを激しいものに変えていくようだ。懐中電灯による二つの光は交錯を繰り返して、幾多の光線を描き残像と共に消えていく。

「ふう……………」

三十分程度踊り続けて火照った体を落ち着かせるために、彼は地面に尻をつくと先日にあつた奇妙な出会い、その出来事を思い浮かべる。数日前のことなのにそれを思い浮かべるのは、ざらざらとした違和の残り糟が、ヒートのどこかに沈底しているからだ。

「何考えてんですか、踊りすぎて疲れちゃったんですか。水、どうぞ」

向こうから歩いてきた青年、ホルシユは透き通っている水を入れているひよこが描かれているコップを両手に携えたまま、ヒートの隣に座った。

「まあ、少し踊りすぎたな」

ヒートは、ざらざらの違和について考えるのを一旦やめてから、ひよこのコップを受け取ると、なみなみ注がれている水の面を見るような素振りをする。その素振りの意図は隣に座っているホルシユからすれば理解できなかったが、まあ、ヒートのすることだからな、と思って気にもせず、水に口をつけて飲み込む。

ホルシユは喉が潤ったがゆえに一息ついてから隣を見ると、ヒートが水に口を付けていないことに気が付く。しかし言葉でそれについて尋ねるのは、なんとなく止めしておく。

焚き火の熱を暖かいと感じながら、尻に小石の当たってる感じが少し痛いとも。

ホルシユは姿勢を直してから、適当な言葉を紡ぐ。

「機械作りは、しばらくお休みするんですか？」

ヒートはようやく水に口を付けて、喉仏を動かし、透明なる水を一息で飲み干してしまっただから目を輝かせる。

「子供らが喜ぶようなレベルに達した一品を作ったからな。しばらくはいいじゃないか。これからは、あれだな、もっと授業に、熱を傾けようかなとも思っているが」

「口ではそう言っても、また機械作ってると思いますよ。あなたはそんなことはない。本職を優先するのは大人として当然のことだからな」

「どの口がそれを言うんですか……」

「俺様は、口は一つしかないさ。お前だっただろう、ホルシユ？」

「いきなり何なんですか」

「いや、ちよつと尋ねているんだよ」

「嘘を付いたりしないか、って聞いてるんですか？　嘘を付く時は、ありますけどね」

「じゃあ口はたくさんあるってことか」

「そこまででは無いと思いますけど」

「ならいい」

「はあ……もしかして、酔ってます？」

「酔ってない」

「だいぶ酔ってるような質問をしてきてますけどね、あなた」

「酔ってない、あ、ビーフカレー食べさせてくれ」

「もう食べちゃいましたよ」

「うっそーん」

ヒートはロケットのごとく、その場にて勢い良く立ち上がると同時に、懐からビー玉を取り出すとダンスをはじめた。右手の親指と

人差し指に挟んでいるのは翡翠色のビー玉。左手の親指と人差し指に挟んでいるのは瑠璃色のビー玉。焚き火台の周辺を、一人で踊りまわる小学校教諭。

発狂しているがごとくに踊る彼を見ながら、ホルシユの頭はぼんやりとした。ヒートの思考回路は全く読めないし、理解する必要の無い適当な代物であるようにうかがえる、わりには、彼が作った人型機械は凄かったし、ヒートという人間は小学生くらいには人気がある存在らしいし。

でもこうやって急に踊りだす癖のあるその人を見てみると、こういつちや失礼だが、どうみても狂っている人。人間とは思議なものだな、と考えさせてくれる人がヒートなのかもしれない、とホルシユはぼんやりしながら、ぼんやりとそんなことを思う。寒い夜。

彼はビー玉ダンスを終えると、焚き火を消してから、懐中電灯をホルシユに渡した。

そして言葉を続ける。

「さて俺様がお前を呼んだのには理由がある。言ってしまうえば……先日、俺様が作った人型機械についてのことだ。そのことについてお前に頼みたいことがあるのだ」

焚き火が暗闇の世界を照らしていたのが失われたが故に、濃度を増してしまった暗闇が不気味に感じられたから、背筋が凍っているのか。それとも、ヒートの声の調子が踊っている時に発していた掛け声とはまったく違う陰気さだから、背筋は凍ってしまったのか。

ホルシユが戸惑っているのを空気越しに察知したのだろうか、彼は道の途中で突然立ち止まる。

そして言葉を吹く。

「もうすぐ枯れ焦げる」

「……………」

枯れる。焦げる。何がだろうか。主語がない。

「え？」

「俺様は枯れて焦げる運命だから、その時が来る前にお前にあれを

「託したいのだ」

「託してどうしろって言うんですか」

「そりゃあね」

彼は懐中電灯のまるい光をホルシユの顔面に向けて、ホルシユの顔を暗闇の中から浮き上がらせてから薄く笑い声をあげて、最後にこう告げて背を向けた。

「どうもしなくてもいいさ」

ヒートは二つに別れている道で、ホルシユとは違う方角へと歩いていく。彼の住む家へいくのだろう。

取り残された男は一人、懐中電灯が道を照らしてくれているのを確認してから、ただそれだけだ。

「からかわれた…か…」

眉は潜める。闇にまぎれながら、鉄に見下ろされながら。

ガラスケースにさ

胸騒ぎというのがあったから、新しいバイト先を探そうと思って早起きしたにも関わらず、誰か知り合いに連絡を取る気にならずシヤアリやスーを叩き起こす気分にもならない。テレビを何気なく付けてみれば、地下送りを命じられた連中が反対デモを起こしているということがニュースになっているけれども、今は興味をそそられないし、人々の怒声がかましいから、画面を真っ暗に。

ホルシユは布団を片付けてから、シャワーを浴びてすつきり。タオルでわしゃわしゃと頭髪を拭きながら、現在の時刻を何気なくチェック。別に用事があるわけでもないのに時計を見てしまうのは時間というものに縛られるのが人間という生き物の習慣だからだろうか、なんて考えてみてから、そんなこと考えちゃう俺格好良いじゃないか、と心の中で自惚れてみる。

しかし胸騒ぎは止まない。心臓がどくんどくん。

アング・ラ・ノノ・エ・デンデンに赴かなければならないのは明日だし、バイトは入っていないし、暇つぶしになるようなやりたい趣味があるわけでもないし、上層と地下街と宇怪の三すくみの混乱がこれからどんな未来を引き起こすのかとか、そういう討論番組でやりそうなことを考えたくもない。とにかく、胸騒ぎがやかま

しい。どくんどくんどくんどくドドンどくんどくんどくんどくドドン。恋する少女がつつの。

「なんだろう、この気持ち……。この気持ちはー、なんだろうー」
何か起きるような気がする。

その予感地震がくることを察知して落ち着かなくなる動物であるがごとくに、確かなものであるように感じられるのである。

ホルシユは歯を磨いてから、バナナを食べて、そして私服に着替えて何気なく外に出た。

冷えている空気。乾燥していて、相も変らぬ鉄の空。小熊鳥の鳴き声。カラスと戦っていて黒い羽をむしりつつしている。

この地区でもっとも栄えており、住まう人々の生活を支えてくれている、何でも商品が揃っていて且、安いことが売りの商店マルコ・ポークにて、適当に、雑誌prayを立ち読みして時間を潰すことにする。

シャッター街を抜けて、大きな通りに出てみると、暗い顔をした人々。

自転車か徒歩かバイクか、古びたエンジン音の車。ホルシユは徒歩で、ろくに整備もされていない道路を通り過ぎて、途中足がおぼついてない老人などを心配しつつも、手を貸す事はしなかった。

宇宙妖怪の影が、所々に潜んでいるのはいつも通りの光景だ。

そして地区一番の商店、マルコ・ポーロのガラス戸を引いて、中に入る。

甘いタレの匂いがその中に充満していた。

店長は丸子「ボレロ」V。この地区ではもっとも有名な人物であると同時に、みんなのお母さんと評されるふくよかな感じである。まあ、つまり、面倒見の良い人柄をしているトゲの無い性格をしている彼女は、地下街というもっさりしている場所では重宝されるといふことで…。

「耕土の焼き鳥だから味がいいよー。安くしてあげっから買っついていきなー！」

「おばっさん、一つちよーだーい」

「はいはいよ」

小学生くらいと思わしき子供が小銭をおばっさんに渡している。ボレロはみんなから親しみを込めておばっさんと呼ばれている。ホルシユも彼女のことをそう呼ぶ。

ホルシユは改めて店内を見渡してみる。朝からの胸騒ぎのせいではなくともない街の日常にさえ気が向いてしまう。

マルコ・ポーロはテレビでよく見受けられる上層の、いわゆるコンビニエンスストア、というやつと似ている構造の建物であるが、上層のあれらとは様子が全く違うのは、使われている蛍光灯の量差のせいであろう。電灯が天井に一つぶらんと、蜘蛛の巣を貼り付けたままにぶら下がっているだけの明かり。電気。上層と地下街の格

差の違いをもつとも良く表してくるのが、この電力の使用量の差であろう。供給量が違うが故に、こういう差が生じる。地下街は基本停電が一日に一回起きるのが通常であるが、上層に住めば停電を経験することなど一度も無いが故に、上層の子供には『停電』という言葉が理解されないらしい。

ホルシユはおいしそうに店の前で焼き鳥を頬張りながらサッカーボールでリフティングを器用にこなしている小学生を一瞥してから、雑誌prayを道路側にある本棚から探し見つけようとする。が、どうしたことだろう、人気のある雑誌というわけでもないのに、雑誌prayが見当たらない。入荷するのは今日で間違いないはずだったが。

ホルシユは入り口近くの貼り紙を確認して、商品の入荷日を再チェックする。前日見た時に勘違いをして覚えていたということもある。

しかし、やはり入荷日は今日で間違いないようだった。そう間違はなく、おばっさんの手書きで、貼り紙に書き込まれている。

戸惑うホルシユ。彼がおばっさんに何か尋ねようとして振り向こうとすると、丁度レジにprayが置かれているのが見えた。雑誌prayが買われている。自分以外の人間が雑誌prayを手にとっていて、しかも購入している、だ、と……。表紙は松堂羅サザ工門の漫画の絵。主人公が煙草を十本口に加えて何かを睨んでいるとい

う、普通の人が見たら閉口する他ないキャラクターが主役である漫画が表紙を飾るような雑誌が、あのレジにて置かれて買われようとしている。

戸惑っているのはホルシュだけではない。おばっさんもprayが購入されていることに戸惑いを隠せない。いつもおばっさんは、prayは鍋敷きに使ったり、枕の代わりに使ったりする。売れないから。

一体どんな奴があれをレジに置いたのだろうか、と思って顔をその人物に向けてみる。

「……………」

いや、そこまで変な奴じゃない。

黒いスーツを身に纏っているのは地下街では珍しいし、そのスーツ姿にはまったく似合わないカラフルな水玉模様のハットを被っているのも珍しいし、雨が降っているわけでもないのに傘を持っているのも珍しいし、何だか立っているその姿の雰囲気もどこか独特で、顔は横から見ただけでもわかるのだが、陰気ながらも格好良い。うん、珍しい。

よく考えてみたら、ぜんぜん変な奴だ。
何者だろうか。

ホルシュは何らかのガムを探しているフリをして、その珍しい男の様子を、ついつい探ってしまう。

だがその男は、結局prayをレジまで持っていったというのに、買わなかったのだから、彼の持つビニール袋の中には雑誌は無く、食品などだけであった。

男が店内から姿を消して、街並みに影を紛らわせてから後、ホルシユはおばっさんに話しかけようとレジに近づく。Prayをおばっさんが本棚に戻そうとしている。

ホルシユは尋ねる。

「おばっさん。それ、さっきの人買わなかったんだね。俺、驚いちやったよ、pray買おうとした人を見たの、はじめてかもしれない」

おばっさんはprayを元の場所に戻してから、

「でもあんな奴にこれ売るのは、何か嫌だったからねえ」

と言ったので、あの男が買わなかったのではなく、おばっさんが買わせなかったのかとわかる。

「どーゆうこと？」

「prayを立ち読みしていくことを毎月あんたが楽しみにしてるのは知ってたし、他にも、案外prayを立ち読みしていく奴はいるからねえ。なんというか、守り神みたいなものだよ、この雑誌はだから、あんな奴には買わせないのさ」

おばっさんの心意気に胸が熱くなると同時に、守り神を鍋敷きに使ってる癖にな…、と思うが口には出さない。

「気に食わなかった？ たしかにさっきの奴、格好がおかしかったよね、なんか」

「あれは最近噂の連中の仲間だね」

「噂？」

「過激な連中だよ。争いごとを撒き散らす馬鹿だよ。浅はかな勢いだけの連中！」

「ああ…たしかに、少し、聞いたことはあるような気がするけど…」

「結構な規模っていう話だよ。あー。焼き鳥買っていかないかい？」

「上手いよ、耕土からのだからね」

「じゃあ三つ」

「家族の分もかい？ 良い心がけだ。……ほら、ただであげるよ」

「え、いや、まじですか」

「まじだよ。あんたん家も大変だろ？ ほら、遠慮なんてせずに」

「おばっさん……！」

ホルシユは感動しながら焼き鳥三つを受け取って、泣きそうになりながら好意を受け取り、さらにprayを貸してもらって明日まで借りて良いとまで言われた。

ここまでありがたい待遇をしてくれるおばっさんに感謝しつつ、ホルシユはprayと焼き鳥を手にとって道を歩いていく。「じゃ、夕飯を買う時にまた来ます」などと挨拶をしてマルコ・ポーロから抜けた彼は、地下街を歩いていく。地下街を歩いていく。地下街を歩いていく。

その道の途中に、物々しい色をしたガラスケースに出会ったのだ。

そこはヒートが焚き火をしていた場所。小石が転がる、空き地。

物々しい色のガラスケースは立方体。

鮮血。血、血、血。それは、血の色をしていて。

三井「ヘンバンス」Fがリモコンの赤い電源ボタンを押すと、奇妙な事件が報じられているのが目に付く。人間の姿形をしていたものが、ミキサーにかけられたかのようにぐちゃぐちゃにされた状態で、空き地に放置させられていたというのだ。

地下街での事件。しかも結構、地区が近い。近年稀に見る、猟奇的殺人事件。

しかも、そのぐちゃぐちゃの人間血液スープみたいなものは、立方体のガラスケースに詰められた状態で発見された、というのである。

殺害された人物は、中田「ヒート」G。小学校の教諭だったらしい。身元はチップのおかげで判明したそうだが、勿論チップ自体は脳味噌もろとも粉々に破壊されていたらしく、地下管理局に常に送られているチップからの定期送信が途絶えた人物が、その日のその地区では中田「ヒート」Gだけだったからそう判定できたものの、それが無ければ身元の判明は難しかったということだ。それはそうだろう、生存していた時の面影などが、ひとつも残っていないのは。

教師という職業の人間が死ぬこと自体は、別に珍しいことでもないが、もとの形を一切残さない状態でガラスケースに詰め込まれていた、というのはグロテスクすぎる話だとヘンバンスは背筋を寒くする。これだから人間っていうのは何を考えてるのかわからん、とヘンバンスは紅茶に口をつけて、小さな小さなため息をついてから、大きな大きなため息をつく。

テレビの赤い電源ボタンをもう一度押して、部屋を静かにすると、羊のような見た目をしている宇怪を暗闇の奥から呼び出す。呼ばれた羊の宇怪は、餌なのだろう、ビーフジャーキーを食べさせてもらってから、暗闇の中に紛れて消える。

ビーフジャーキーが無くなって手持ち無沙汰になった両手をパンパンと払ってから、彼女は壁に掛けられている柱時計で時刻をチエツク。

もうすぐ彼が来る時刻だな、と彼女は腰を上げるとストレッチを開始する。客人が来る前にはいつもこれをして、体をほぐす。アング・ラ・ノノ・エ・デンデンに人を入れることを嫌う彼女にとっては臨戦態勢みたいなものだろう。1、2、3、と声を出してストレッチ。

「ふう、そろそろくるかな」

彼女がそう言った時に丁度良く彼は現れた。ホルシユは建物内の照明でもわかるほどに青白い顔をしながら、しかしふらついているわけでもなく、歩調が以前と比べてハキハキとしている、という風にヘンバンスには映った。

実際、ホルシユの様子はだいぶ不自然なもので、そして彼という人間にしては珍しい状態であった。

彼はだいぶ、いきり立っている。

「お願いがあるのですが」

「お願い……か……」

二人の間に目に映ることのない火花が散り始める。交渉というのは戦争と同じだ。

下手に油断をして対応すれば自らの領地を奪い取られるほどの失態を犯す結果にもなりうる。

先ほどのようなニュースを見たばかりともなれば、警戒心も自然強まっていた。

ヘンバンスはホルシユを茶の間に座らせてから、もてなしにお菓子を出す。そして少し落ち着いた所で、

「挨拶も無しに突然お願いとは、驚かされますね。ちょっと、困りましたよ」

と相手に無礼であろうと言外に告げるような形を取ることで、牽制をしたということになる。まあ挨拶がわりみたいなものだろう。

しつかり挨拶をしてくればこのように尖った形での始まり方にはならないのに、と思つてからヘンバンスは気が付く。尖った関わり方をしてくるといふことは、この男、尖つたお願いをこちらにしてくるつもりなのだろうか、と。

その考えを裏づけするがごとく、彼の口はなかなか重たそうであらうとせざるに過ぎない。相変わらず寒い本題に入らうとせず適当なことばかり喋ってくる。相変わらず寒いですよね、みたいな。

「本題に入りましょうか」

時間をもつたないし、他人を長いことアング・ラ・ノノ・エ・デンデデンに入れておきたくないヘンバンスは、先日印を押させた書類を持ってきた上でホルシュを急かす。「ええ」彼の様子も、より気張つたように変わつていき、もそもそと落ち着かない。

ヘンバンスは太郎を奥の暗がりから連れてくる。形の口で、相変わらず体を掻きまわっている太郎を、ホルシュという男は気の無い調子で眺めている。ヘンバンスはとりあえず、彼が何かを言うのを待つてみることにする。その『お願い』とやらで釘を刺された以上こちらから借款についての話を押し進めることもやり辛い。

そのせいで、数分くらい沈黙が続いてしまった。ヘンバンスがイラつき始めた頃、ようやくホルシュは口を開いた。

「まず、見てもらわなければならぬものがあるんです」

「何を見せるつて？」自然、ぶつきらぼうな調子になつてしまう。

しかしヘンバンスがイラツクのも気にしないのか、気付いてないのか、彼は平然として言う。

「Pluto」

「Pluto?」ハデスの別名のことか、とヘンバンスが自らの知識から思い当たつた時に、キウイイイイという何か聞き覚えの無い音。彼女が戸惑つている内に、アング・ラ・ノノ・エ・デンデデンにPlutoは姿を現した。

ヘンバンスの口が半開きになる。体軀は十メートルほどだろうか。アング・ラ・ノノ・エ・デンデデンは天井が高いからそれが容易

に入りはするが、その存在感に圧倒される。

「これが君の見せたかったもの…プルート？」

「はい。Plutoです」

「Pluto」

「Titanを打ち砕くだけの力を持った、人型機械です」

白く光り輝いている機体。まるで内側から光を放っているかのごとく輝度が高いカラーリングをしている。関節部分などは赤に染められていて、掌だけは黒い。背中に一つ、縦に長い、得物らしきを担いでいるが、それだけやけに歪な形をしていて光も無く、まるで鉄くずのようだ。

人型の機械がこうして機動し、生きていくかのような錯覚を起こさせるほどスムーズに動いていることに、まず、ヘンバンスは驚かされる。この手の分野に関しては、上層でもまったく研究が進んでおらず、着手されているとしてもそれは趣味の領域の話であり実用性のあるものは開発されていないはずだった。

だが今、彼女の目前に突如として現れたこのPlutoという人型機械は、確かに動いている。この建物に入ってくる時に見せた滑るような挙動は、Titanのキャタピラでは実現し得ない機動性を持っていたのは間違いない。明らかに趣味の領域を超えている代物だ。兵器になりえる。

ヘンバンスの心に虫唾がびりびりと走って亀裂を作った。

その亀裂に膿がでてきて、彼女の心を蝕んでどろどろに溶かす。

腐敗していく心底で沈底しているのは怒りみたいな代物。

打ち合わせ

(こんなものを地下管理局の人間が見てみる。地下街が治安維持の名の下にTitanによって穴だらけにされるのは、目に見えてい
るぞ……！)

彼女は争いを好まない。特に激しいそれを。

人間が血相を変えて自らの命や家族、仲間、そういうものを必死になつて守るために、あいなすものの血肉を破り、撃ち殺す。怨念が憎悪を作り、憎悪が呪縛を産み落とし、人間同士の共食いを禍々しく続ける。

そんな非効率的で、醜いものを、許せない。

「たしか、名前を八城「ホルシュ」Cと言いましたよね？ あなた
のお願いというのは、これを私に見てもらいたいということでしょう
か？」

「もちろん、違います。そんなことはありません」

「では、どういうことが教えてもらえますか」

言いながら、ヘンバンスは目の前で慥然と立ち尽くしている男に
嫌悪を感じる。いや、男だからではない。この男が嫌いというより
かは、相手が人間という姿形をしていること自体が許せないのかも
しれない。彼女自身も人間であるにも関わらず、彼女はその五体を
持つて地面に立つ哺乳類の姿を、不愉快な存在として捕えてしまう。
その人間嫌いの性格であるために。

浅ましくて勝手な存在というのが人間であり、自分も所詮そうい
う生き物のうちの一つでしかない。

彼女は湧き上がるようなその怒りを、表面上は取り繕った上で相
手の話を聞く。

「預かってもらいたいのです。この場所に、これを隠してもらいた
いのです」

「太郎君と同様、Titanから追われているということですか？」

「きっと追われることになると思うのです。ですから、これが破壊されない為にこれを預かってもらいたいのです。突然すぎることでとは思いますが、太郎と違って食事が必要というわけではありません。お金だったら、払います。できればまたローンを組ませてもらいたいのですけれど…」

「ふむ。そうですよねえ…」

彼女は自分の額に血管が浮き出てきたのに気が付く。前髪のおかげで相手からは見えないが。

「よろしくお願ひします」彼は殊勝にも頭を下げた。

だが、ぶちちんっ。下げられた側の脳味噌内、頭の中には何が苛立ちのために噴出してきて、真っ赤な霧となって彼女の周囲を纏った。

調子づきやがって。なんだこいつ、雰囲気がこの前と違うと思ったら、やけにテキパキと物を言っつてきやがる。若造が。ただの若造が、わかってるかのように物事を。なんだ、使命感か？焦りか？やけにイキリ立っていやがる。若造が。

「あああああああああああああああああああああああああああああああああ、いや、ごめん、なんでもないです、あ、ごめんねいま、ちよっとむせて」

ヘンバンスが突如としてヒステリックに叫んだことは、実にホルシユを驚かせた。

彼女の一つの手段でもあるそれは、いわば自分が舐められないための相手への威嚇でもある。

衝動的に叫んだその内奥には、わずかに計算の色が含まれていた。りするのだが、それは相手に好き勝手言わせないための抵抗手段というわけだ。特に男というのは相手が女だというだけで甘く見積もる修正があると彼女は踏んでいるから、この叫びは必要不可欠な行為。

彼女はいつもこの方法を使っている。いや、使ってしまう、とい

う方が近いのかもしれなかったが。

ホルシユが少し身を固まらせて背後によたよたと数歩下がった所で、

（ふん：ひいたか？ ならば今がチャンスだな）

と心の中で呟きながら、懐に手を突っ込むとそこからたくさんの折り鶴を取り出す。金色の折り紙で折られたというのに綺麗に折られていて、皺一つない。それを自らの掌に乗せると、ホルシユに向けて、

「…これを見て、どう思う？」

と問う。当然、予期せぬ状況を揭示されたホルシユ側は、実はこのヘンバンスは頭が狂っている人であったのか、とか、何て答えればいいのかわからないだとか、鳥肌が首筋に立ったりとかしてしまつて、調子が出なくなつてしまつ。戸惑う。

それがヘンバンスの狙い目である。つまり、完全に流れをこちらのものにすると言つ。

あとは彼女の思う壺である。適当なことを言つて相手の脳味噌をよけいにごちゃごちゃにする。

「この金の鶴は、元々あるお方が折つたもの。私が折つた折り鶴ではありません」

ホルシユは相づちを打つことしかしない。ヘンバンスは盛り上がつていく。

「しかしある時に横断歩道に向う途中で、彼は気が付いたので。

この世の箏箏に」

「箏箏？」

「何かがその箏箏に仕舞われている。彼はそこには何が仕舞われているのだろうという空想をしながら日々を過ごすようになります。箏箏の重要さ、ひらめき、それを信じながら地下街という場所で生きていました。時折、私のところに出向いて、折り鶴を折ってくれたりもしましたが、彼の心はいつも満たされておりませんでした。だから、遠くを眺めて、箏箏のことを考えていたのでしょう」

「なるほど」

「彼は学生時代、数学が苦手で、それに関しては大変苦勞しておりましたが、筆笥のことをひらめいてからは数学に取り組む姿が目立つようになりまして、街の学生から数学博士と親しまれるようになってきました」

「すごいじゃないですか」

「彼は今までまったくモテませんでした。私が情けで付き合っただけでいるレベルの魅力の無さでした。そういう私だって彼が金の折り鶴をすごく丁寧に折る才能を持ち合わせていないのだったら、彼とは付き合いませんでした。でも彼が数学博士と親しまれるようになった頃、妙なことに彼はモテるようになってきました。なんだか、服のセンスもよくなったし、女性に良い思いをさせるようなコミュニケーション能力も拾得しておりまして、モテまくりでした」

「どうなってるんでしょう」

「不思議な話です。きっと筆笥の何かと数学が連結して、彼を別人のようにしたのかもしれない。ドヤ顔をする頻度が増えたので同姓から疎まれることも増えたのですが、その男っぽさも異性からすれば魅力に映えるようになっていたようです。皆が皆彼を好きになつたわけではありませんでしたが、確実に誰かから好かれるようになっていましたから、筆笥と数学の破壊力がすごかつたに違いありません」

「ほんと、不思議」

「不思議でしょう。……………ですが、それにも終わりはきてしまいました。ある日、彼はいなくなってしまったのです。あれは筆笥のせいです。筆笥のせいで、彼はいなくなってしまったのでしょうか。遺されたのは私と、この折り鶴だけです。彼の住んでいた部屋には、誰も見覚えのない木製の筆笥が一つだけ部屋の中央にポツンと置かれておりました。私はそれをはじめに見て、彼が筆笥になつてしまったのだと錯覚を起こしてくらくなりました。でも、その筆笥の中には、これしかなかったのです」

彼女は折り鶴を天高く掲げた。照明の光を浴びて、キラキラと光り輝く黄金色の折り鶴。

その天高く掲げられた折り鶴を見上げながら、ホルシユはその男は一体どうしてしまったのだろうかとうと空想に思いを馳せた。

だが数秒後に彼はハツとして、自分は男のことを知るためにここに来たのではないと思いつき、気を確かにしよう、と思うがもう手遅れであった。ホルシユはすっかり自分の調子を忘れてしまっており、どこからどこまで話していたのか、ということさえ思い出せない。

何でこんな話をするようになったのだっけ。

思い出そうとするが話が脇に逸れすぎて何が何だか。

だがヘンバンスはこう言った。

「長話をしてもうしわけありません。お詫びと言っては何ですが、無料でこのP l u t o という人型機械を預かって差し上げましょう」

「え」

「ここアング・ラ・ノノ・エ・デンデデンは広い。問題無しです」
「本当ですか」

「ええ。書類にサインしても構いませんよ」

「い、いえ…そこまで好意にしてもらえるのならば、サインなどしていただかなくても」

「そうですね。こちらとしても手間が省けるのはありがたいです」

「では、お願いします」

「お任せください」

ヘンバンスはにんまりと微笑む。しかしホルシユはそれをニッコリの微笑みだと受け取る。

「ご好意に感謝いたします。では、また」

「あ、太郎くんのことに関してのお話が済んでいませんよ」

「あ、そうですね。すみませんあはは」

「まったくいけませんよー、八城さん」

談笑しながら、和気藹々って雰囲気を出し合いながら、ホルシユ

は太郎を預けるために発生する料金についての細かな打ち合わせを彼女とする。

で、時間がほどほど経った頃になってそれを終わりにして、ホルシユは笑顔で茶の間から立ち上がると彼女に礼を告げる。そして、さようなら、と言って建物から出て行ったのであった。

彼女はその後姿を見送ってから、白い機体P11utoを見上げて
咳く。

「どつやってこの機体を爆破してやろうかな」

ラーメンと貧乏

建物を出てから彼は、ようやくひと段落がついただろうか、とため息をつく。

頼まれたことをやりとげはしただろう、と思う。あそこになれば、Plutoは誰かに破壊されることもないだろうと。頼まれたことをやり遂げたことによる達成感、みたいなのが彼に確かにある。

ホルシユは帰宅する途中に、ヒートの殺されたその現場に立ち寄った。

彼はそこで、黙祷とかそういう意図ではないが、なんとなく目を閉じてみる。

血のプールになっていた立方体のガラスケースは片付けられて、残っているのは乾いた空気と騒がしさの後の静けさと、小石、感じられるのは思い起こせるのは中田「ヒート」Gという人物が「枯れ焦げる」と言った、夜の記憶。

何が枯れ焦げる、だ。どろどろの液体だけになってしまっていた癖に、その予感があった癖に、なんで助けを求めなかった。一人で勝手に覚悟を決めて、死ぬなんてのは格好付けすぎだ。

そんなことを思ってから、閉じていた目を開ける。なんとなく足元にあつた小石を拾って、拳内で転がしてみたりする。自分の掌で転がる形の違ういくつかの小石を、見つめてみる。

次第に小石で遊んでいるなというくだらなさにはやられ、掌を返し、小石を地面に落とす。手が黒ずんで汚れただけ。

彼はその後も、しばらくその場に突っ立った。

頬を伝う涙、とかは出ない。風が身体を通り抜けて冷たくしていくようなスツとしている虚虚虚はあるが、血流がほどばしるような昂ぶりは無い。だから涙は出ないし、ひれ伏したくなる気分でもない。

ただとにかく思うのは、ホルシユが思うのは、こんな死に方は無かっただろう、ってことだった。

ヒートに対して思うのはそういうこと。

なんで助けを求めなかった。頼ってくれてもよかつただろうに。自分が死ぬのだと予期していたのなら何故。

しかし、考えても仕方のないことだった。彼はもう姿形を人間じゃなくしてしまって、ガラスケースに液体としてここに放置されてしまったのは、昨日のことだ。

人間として言葉を話したり歩いたりした彼には、もう会うことはない、会えたりはしない。

人間でなくなった彼が、何に変わっていったのかなんてわかりはしないのだ。

この空き地にいた所で、別に彼の声が聞こえるわけじゃない。

そういう風に真剣味溢れるようなことを考えてから、背後を自転車に乗ったおばさんが通り過ぎる時に不審そうにこちらを見ていたので、ホルシユはアパートへと歩き出すことにした。てくてくてくて歩いて歩く途中に腹の虫が鳴る。ぐう。

考え事などしたから腹が減ってしまったのだ。胃袋の悲鳴。そう言えば今日はまだカップ麺しか食べていないと思ひ出す。

その途端に身体が重たくなったような気がする。だるくなったような気がする。

食べるということ。衣食住。生きるためには必要最低限のそれが無ければいけないわけだが、人の下に住まわされている地下の人間に回ってくるそれらは残り物か、流行が過ぎた物か、陽があまり射さないこの場所でも作れるものかのいずれか。最近では耕土とかいう、良い作物、良い食料、が取れる土地が開発されてきているらしいが、値段が張るから金が無いものには手を伸ばせない領域だ。

「金、金、金、だなあ……………」

札束が落ちてこないかなあ、と思う。突然お金が花のように地面から湧いてこないかなあ、と思う。雨や花のように自然の一部としてお金がどこから出てこないものかしら。と、思う。

しかし世の中合理的にできているらしい。世の中が全て幻みみたいな濃霧で構成されているのならはお金が地面から湧いてくれたっておかしくは無いはずなのだが、そうはいかないから、現実、という言葉はあるのであろうか。

ホルシユの鼻に香ばしい匂いが。ああ何だろうと、その匂いに引きつられて歩を進めていくと、屋台が見えた。ラーメンの屋台。数人が道路の脇などという空気の汚い場所でラーメンを啜っている。ずずっ、何て軽やかな音を経て。食べられない俺はラーメン。ラーメン。アーメン。アーメン。

ラーメン。アーメン。ラーメン。アーメン。ラーメン。アーメン。
ラーメン。ラーメン。ラーメン。アーメン。ラーメン。アーメン。
ラーメン。ラーメン。ラーメン。ラーメン。ラーメン。ラーメン。
ラーメン。ラーメン。ラーメン。ラーメン。………ラーメン。

ポケットに手を忍ばせて、己の残金を確認してみればそこにあるのは、わずかな、ほんのりとわずかな、わずか過ぎて失笑な、忍び笑いさえ忍ばれるような、銭。それも小銭である。ぽけつとまねえしかねえ。

悲しみが頭を横に突っ走り、虚空が意識をどこかに引っ張っていかうとする。

そんな彼の背後を自転車に乗った少女が訝しげに見て通り過ぎていった。

不審者になってしまう。そう思われてしまう。そこで何とか言葉を発してみることで、虚空に引っ張られるのを防ごうとしてみる。

意識を保とうとしてみる。それで出た言葉は、

「ら…らーめん…」

それが屋台に置かれている器の中身をより強く求める要因になってしまうのは当然で、彼はもうどうしようもない程に腹が減ってしまったているにも関わらずらーめんなどと自ら口走ったのはどう考えても失策。無能の極み。しかし仕方の無いことだった。腹が減っていたから思考回路が麻痺していた。その麻痺していた状態で、らーめん、と呟いたことから窺える通り彼は相当に腹が減っているのである。

思考回路が終わっている状態で、腹がへこんでいる。目の前には

湯気立ち昇るラーメン屋と書かれた暖簾。ふらついている足取りがそこに向かわない訳が無い。

ホルシユは金が無いことを自分自身わかつているのにも関わらず、空いていた、左右にがたがたと揺れる不安定な木製椅子に腰を下ろす。

そして良く言えば年季が入っているとも言えるし、悪く見れば不衛生な薄汚さとも見える割烹着で調理をしているおっさんに対して、「しょう油らーめん、ひとつ」

金が無いのはわかつているのに、躊躇なく注文した。

奇妙だなとホルシユは思う。心臓の鼓動は早くて破裂してしまいそうな程なのに、今先ほど紡いだ言葉は、表面上はとても軽やかで和やか。金が無いのにらーめんを注文している人間のそれとは思えない程に、自然体な声つきになっていた。

だから勿論、おっさんはホルシユのことをらーめんの代金も払えない貧乏人だとはわからず、麺を茹で、野菜を切り、又焼をのせたらーめんが作られていくと共に、匂いも濃密になっていく。

隣の、伸びすぎている髪を後ろで束ねている男、にきびが多い。

その男の、みそらーめん、その麺を嚼る勢いがものすごい。ホルシユからすれば食欲をそえられる音となる、ずずっ、ずずっ、という音を自重せず垂れ流してくるのが、いちいちホルシユの空いた胃に響いてきて辛い。どういつ食べ方をするかは個人の自由だろうが、腹が減っているとどうにも駄目で、足をじたばたしたくなるようなじれったい、むずむず、虫唾が走る、という状態が長いこと続いてしまい、隣の男に対してむかつ腹に近いものがたちそうになる。

そうこうしている内に、屋台の主であるおっさんの方も佳境に入
ったらしい。

気合が入った漢らしい手つき、手首のスナップを利かして麵をし
ゃっしやと小気味良く扱ってみせてちよっと格好良い。

「はいよー丁！」

おっさんの親指が熱々のスープの中に見事に入っているが、もは
やそんなことがホルシユの食欲を減退させたりはしない。彼は割り
箸を前歯で割ってから、レンゲでまずスープを一口。湯気が立って
いる熱々なのを、隣の全てを食べ終わってちよっと一息をついてい
るにきび男に見せ付けるかのようにして音を経て啜る。ずずっ、
ずずっ。まさに反撃の狼煙が今上がった、と気分は戦国時代の武将、
或いは、ナポレオンとか。

彼は貪った。ひどいあり様で、しょう油らーめんを貪った。何が
ナポレオンだ、何が戦国時代の武将だ。前のめりになって周囲の目
線も気にせず、餌に喰らい付く様は、本能に赴くままに血肉を飲み
込むハイエナのようなではないか。ずずっ。ずずっ。

途中背後をTitanがキヤタピラ音をやかましくしながら通り
過ぎたことにも気が付かない程に、彼は熱中してそれを食し、スー
プの一滴も残さずに平らげてみせた。

そして、その食いつぶりは屋台にいる連中のスタンディングオベ
ーションを巻き起こしたのである。

おめでとう、おめでとう、おめでとう。

拍手喝采。拍手喝采。拍手喝采！

彼の貧乏は空腹を生み、空腹は食欲を生み、食欲が勢いを生み、結果として一つの芸と言っても良いほどの光景を生み出したのである。さあ、そこまで皆の喝采を浴びたならどう締めるのがカッコいいか、わかるはずだろう。どう立ち去るのがカッコいいか、ホルシユという青年にはわかるはずだろう。

席から立ち上がり、何事も無かったかのように銭を払い、「ありがとう。またね」と特に誰に言うでもなく呟いて、その場から颯爽と立ち去れば良いのだ。さすれば人々はそのクールな後姿に羨望の視線を向けることになり、ホルシユは彼らから名も知らぬ食いつぶりの良い男として記憶に留められるのだ。

さあ、ホルシユは立ち上がった。そして拍手喝采を静めてから、「ありがとう」と冷静に告げると、ポケットに手をつ込んで小銭を探るような仕草。ラーメンの値段をちらっと見てから、「ここに置いておくよ」とか忙しいおっさんの手を煩わせないようにそこから辺に金を置いて、後はどうするのかなんて誰にだってわかる。そう、食い逃げだ！

彼は全身全霊を駆けて、たった今摂取したエネルギーを全て使い果たすかのような勢いで、ラーメン屋の暖簾を顔面で弾き飛ばしてから、地下街を駆け出した。

（さすがにTitanも食い逃げのために殺人はしないはずだし、俺の足は誰にも負けないくらいマツハだ多分！ よってしかるに逃げられる、逃げられる、逃げられるうううううううう！」

「待てやコラアアアアアアアアアアアアアア！」

「ひっ！」

当然そんな風に慌てて飛び出せば、追っ手はすぐに迫ってくる。

「てめえこの小銭が一枚とは何様のつもりじゃあああああ」

「勘弁してッ！ 勘弁してッ！」

「勘弁できるかあああああああああああ！」

恐ろしいことに、食い逃げをしたホルシユを追いかけてくる人は、ラーメン屋のおっさんだけでは無くて、隣でラーメン食ってたにきび男とか、先ほどまでおめでとうと声を掛けてくれていた連中とか全てであった。その数、六人。その追いかけてくる連中の眼は、血眼。

拍手喝采までさせておいて食い逃げしたホルシユのことを許せないであろう、彼らは陸上競技をやっている人のように、手足がぶんぶんである。メタボかと思えるくらいに太っている人も、体力の無さそうな痩せている人も、手足がぶんぶんである。どんどんホルシユとの距離を縮めていく。

（も、もうだめだああああ）

諦めるのが早すぎである。

振り向けば目の前に般若のようなおっさんの顔。あ、終わった、とホルシユは思った。

その次の瞬間。

一瞬にして。そうそれはまばたきをする暇もない程に瞬間的。

ホルシユを追いかけてきていた男たち六人全てが、何か良く見えなかったが、衝撃みたいなのに体を横殴りにされて、地面に倒れた。

そして苦しそうにお腹を押さえたり、泡を吹いていた。食べたラーメンを嘔吐してしまっている奴さえいた。

どうということなのか、と戸惑っているホルシュの背後からの小さな声。恐らく耳元で囁かれたそれは、女性の声質を持った代物。

「見つけた、盗っ人」

後頭部に鈍器で殴られたような衝撃。景色が三百六十度の回転をしたかと思ったら、凄まじい吐き気。

何とかラーメンを吐き出すのだけは、とホルシュが吐き気に抗おうとした次の瞬間には、どこかにもう一撃が加えられて、それが止めとなり、彼の意識は消失した。ラーメンを寝ゲロみたいな姿勢で垂れ流しつつ、ホルシュはみつともなく地面に横たわった。

そんな青年を見下ろしているのは黒いスーツを身に纏っている女性。スタイルが良く、いかにも仕事が出来そう、と言った知的な雰囲気を持っていて、姿勢が良い。

Titanのキャタピラ音が迫ってくるのに気が付いた彼女は、ホルシュの口元を懐に仕舞ってあったハンカチで拭き取ってから、彼を背中に背負った。女性だというのに、男性を軽々しく。

そして彼女は、地下街の影に隠れて、消えた。

白い光

一人の姉が、押入れの中で目を覚ました。

天井に貼り付けられている山田君の顔が見えることを確認してから、彼女はのっそりと身体を起こす。

「今は、何時だ」

押入れをがらつと開けて、ホルシユが普段使っている目覚まし時計で時刻を確認してみれば、もう夕方だとわかる。

「こ、これはさすがに…寝すぎたッ！」

軽く驚きつつ、見たい番組があるわけでもないのにリモコンを手にしてテレビを点けてしまう。

ザッピングしているとニュースばかりが目について、相変わらず同じことばかり。

上層階級55719323以下にあたる連中が抗議活動を行っているらしいが、それはやはり”たかが抗議活動”といった効果しか発していないように見える。55719323以下にあたる人間というのは上に住んでいる連中の総人数の1パーセントにも満たない。故に、少数派も少数派。そして地下街よりもさらに『金』というものが物を言う上層では、金を持たない人々が行う抗議活動というのは所詮ぶーたれ行為としかならない。それ以上にはなり得ない。

シャアリは今現在の世の、その『金』によつて形作られる露骨なヒエラルキーを見せ付けられて冷静でいられるような穏やかな性格では無い。余裕がある毎日を送っている人種でも無い。

彼女は画面を真つ暗にしてから、リモコンをちゃぶ台に叩きつけるように置いて置いて立ち上がる。

「うるさいなあ」その音に反応してスーが苛立たしげに言うが、

「……………」シャアリはそれをシカトする。重苦しい沈黙を持ってして。

彼女はどすんどすと喧しい音を鳴らしながら歩くと、冷蔵庫を開けて麦茶を取り出し、コップに注ぐこともなくガラス瓶に入っているそれを、なんと一息で全部飲み干した。結構量があったというのに。

一気飲みのせいで頭が痛くなったのだろう、彼女はしばらく片手で頭を抱えていたが、それが収まると新たに麦茶のパックを取り出してガラス瓶に水を入れる。

そして一息つくと、

「スー。世の中つてのは理不尽であることが基本よね」

と尋ねてるのだから確認してるのだから良くわからないことを言う。

しかしスーはシャアリが意味不明なことを言うてくることには慣れているのだろう。

「人と人が関わりあって世の中は構成されているんだから、そりゃそうなるよね」

と、ごく自然に、もっともらしいことを答えてみせるのだった。

実はホルシユが昔ぼやいていたことを言い換えただけに過ぎない言

葉ではあるが、姉はスーに対して目を見張った。

「あなた、もしかして賢かったりするの？」

普段あまり良い所を見せる機会が無い境遇に置かれているスーからすれば、賢い、と評されることは実に胸奥がこそばゆくなるものがあつたが、そこは少年である、意地を張ってあまり嬉しそうな顔をしない。

「別にそんな、たいそれたこと、言っていないですよ」

などと小生意気なことを言う。

シヤアリはスーの見えない所で、くすり、と笑ってからそういえばスーは薬は飲んだのかなと思ひ当たって尋ねてみる。飲んだよ、という簡潔な返事が彼から返って来た。

「そう。ならいいんだけど」

洗面所に向つて顔を洗つたりなど。出掛けるにも化粧をするのも面倒だしなあ、河原に散歩しに行こうかなあ、でも太郎ももういいしなあ。……と、彼女は、暇だ、と心の中で呟く。言葉にして発しないのは、だったらアルバイトでもして金を稼いでこい、と言われるのがわかってるからだ。

とりあえず適当に道歩いてみるか、と思つた彼女はスーに留守番頼んだからね、とだけ告げると玄関から外に出た。ぶらり、って感じ。

夕闇が迫ってきている空に、灰色が夕を浴びて不気味な色になつ

ているのは鉄の天井。

どういう理由でそうなったのだろうか、夕陽を浴びている鉄のそれは実に奇妙な色遣いになっていて気味が悪い。気持ちが悪い。こんな空の下を歩いたって楽しくない、家に籠ってようかな、とシヤアリは思い直してドアノブを握った。

その時に、歌が聞こえてきたのだ。

血管の浮いた怪物と見紛うものの血潮

それを拭き取り世に放り

理にまみれ生きること願って見る

灰色の鉛は天に住まう それを苦し紛れの鉄箱の中で見上げる

嘆きが聞こえる 遠くから 耳元から 脳天を突き刺すんだ

聞こえるかこれが 喉奥から湧き上がるような嘔吐だ 刻んでい
る音階

一段 また一段と足を踏み出すごとに音階が高まってくる ああ

あああ

罪深きお前に戯言が送られるぞ そこでずっと見上げている 灰

色の鉛

ずっとそこにいる お前は天蓋に閉じられて脳味噌の中孤独だ

聞こえる音に心を震わされる涙を噛みしめてもいい

音階が響いてくる お前の耳元に ああ あああ あああああ

音階が響いてくる お前の耳元に ああ あああ あああああ

音階が響いてくる お前の耳元に ああ あああ あああああ

音階が響いてくる お前の耳元に ああ あああ あああああ

ああああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああああ

想像するんだ 血管の中に濁りながら入ってくるようなこの発音を

脳髄に染みこんでとろけて 自分がどこに位置しているのかも忘れさせてくれるよ

鉄箱から出てここは牢獄だろ だったらもう 耳元からの歌に身を震わせていればいい

一段 また一段と地下鉄から階段を踏むごとに 近づいてくるのがわかるだろう

お前のすぐ後ろだよ その音階はずっとお前に迫ってくるんだ 逃げれない

聞け 聞くんた そのノイズと共に ノイズと共に踏み入ってくる 血潮がもうすぐ

一杯になる棺におさめられて ああああああ あああ あああ ああああ

そこにいればいい一度だつて出て来たことは無い お前の脳味噌は一度だつてお前以外になつたことはないお前が一度だつて脳味噌から出れたことの無いことと同じように 空虚が向こうから手招きしているぞ 焦げた匂いとむせるような蒸気 花が全て枯れているのがそこから見えるか

見えないなら手伝つてあげるよ お前だつてそうしてもらいたいだろう ノイズは喧しい ああああああああ あああ また聞こえても問題はない 脳天を突き刺すんだ まち針で頭を貫いてぐちゃぐちゃになつても 鉄箱はいつも通り走り続けているし お前が作り上げた牢獄はいつも通りの姿形をしているだろう それは間違いないことだろう 子供たちが歌っている 合唱団はいつだって澄んだ声で ああああああああ ああああああ お前の耳元で

音階が響いてくる お前の耳元に ああ あああ ああああ
音階が響いてくる お前の耳元に ああ あああ ああああ
音階が響いてくる お前の耳元に ああ あああ ああああ
音階が響いてくる お前の耳元に ああ あああ ああああ
あああああああ ああああああ ああああああ

ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ

想像するんだ 血管の中に濁りながら入ってくるようなこの発音を
脳髓に染み込ませるんだ お前の位置を忘れさせてくれる子守唄
だとか 凱旋かその鉛を

想像するんだ 血管の中に濁りながら入ってくるようなこの発音を
想像するんだ 血管の中に濁りながら入ってくるようなこの発音
を想像するんだ 血管の中に濁りながら入ってくるようなこの発音
を想像するんだ 血管の中に濁りながら入ってくるようなこの発音
を想像するんだ 血管の中に濁りながら入ってくるようなこの発音
を想像するんだ 血管の中に濁りながら入ってくるようなこの発音
を想像するんだ 血管の中に濁りながら入ってくるようなこの発音を
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ

吐き気を催した。その場に止まっていたくない思いに駆られた。
音程がめちやくちやで、歌とは思えないのにその言葉の内容だけは
徹底的に耳の膜を通り抜けて頭の中にへばりついてくる。男とも
女とも付かない、機械的でありながら人間的でもある、まるで声に
仮面が付けられているかのように正体の判別をつけることの出来な
い声音。

シャアリは鉄柵に手を置いて、しばらく眩暈に苦しむような仕草をしたまま、その場で立ち尽くす。彼女にしか聞こえないこの歌を、禍々しい雰囲気を持ったそれを、彼女は月に一度は聞かされなければならなかった。それは彼女が二十歳を過ぎた頃から、習慣となっている。

「見てんじゃねえよ。何様だよ、お前ら」

アパートの目の前で突っ立っている、男の子と女の子。その二人は手を繋いだまま、シャアリを無表情で見上げている。その二人はしっかりと手を握り締め合っていて、シャアリの位置からでもその二人が離れないように必死なのだと感じられるほどだった。

その二人に悪態を付いたのは、単に歌のせいで苛立っていたせいなのだから八つ当たりだ。

そんなナサケナイ彼女に、男の子と女の子は一指し指を突き出した。そして満面の微笑みを二人同時に浮べて、そのまま静止画にもなったかのように動かない。

幽霊を見慣れている彼女からすれば、その光景は特に珍しいことでもなかったが、嫌いな歌を耳にしたばかりで不機嫌なので、そんなことにも感情の昂ぶりを抑えることが出来ない。

「お前ら……調子に乗ってんなよ！」

彼女は鉄柵を飛び越えて、二階の高さから一気に地上に降り立つと、男の子と女の子に一直線に駆け出した。

跳び蹴りをかまそうとしたが、跳躍する直前に、二人の子供は霧のように存在を薄めて姿を空气中に隠してしまったので、シヤアリは慌てて周囲を見渡すと遠くに見えた。

相変わらず人指し指を突き出した上で彼女を笑っている。

シヤアリの全身に怒りという名のオーラが纏い付き、拳がわなわなと震える。

「どこにいくんじゃ、こらあ！」

ヤクザ風味な怒声をあげながら彼女は二人を追いかけ続けた。

自分が何処に向わされているのかなんて気が付くこともせず、一心不乱に駆けていく。

何だかんだ姿を見失うことはなくて、ぎりぎり追いついて手を伸ばせそうな距離になった途端に薄まって遠くにまた逃げられる。シヤアリは諦めずに追いかける。

鬼ごっこは延々続き、夕が闇に覆われて夜が訪れた頃になっても、街灯を頼りにして彼女は幽霊を追い続けた。幸い幽霊は発光しているから、夕方よりもかえって何処にいるのか目に付きやすくなった。問題なのはそのせいでさらに一心不乱に目標に向って熱中してしまふことで、彼女は随分とアパートを遠く離れたにも関わらず、自分はまだ近所辺りをうろついているだろうと錯覚していた。

時間の感覚も場所の感覚も曖昧になる程に、彼女の意識が集中されてきたのも、幽霊の仕業なのであろうか。それは勿論、彼女には

わからない。

とにかくその集中の”せい”で、あるいは、集中の”おかげ”で。

シャアリは目撃する。

それは、『光』。

それは白の光。光。光光光。夜闇の中で昼の眩しさを周囲一帯にだけ放つ光源。

球の形をしていて宙に浮かんでいるそれは、蛍の光のような緑色をしている粒子をわずかに纏っているせいだろうか、やけに幻想的に映える。ひどく現実離れしていて、そして、どんな超常現象だよツ、と突っ込みたくなる。プラズマ現象か、それとも実はUFOで、宇宙人がこの中に乗っているのか。宇宙妖怪のようなものが存在している昨今、あり得ない話ではない。幽霊が見える私という存在もいるのだし……。この世では、超常現象は普通に起こりうる代物だとしたら、もうそれは超常現象とは言えないじゃん。……………
…超常現象じゃん。

シャアリはそんなことを考えながら、ここはどこだと周囲にようやく気を配ってみると背筋が凍る。

あまりはつきりと見える訳でもないが、木の棒がこんなにもたく

さん四方八方に刺さっている場所などというのは一つしか見当がない。そこは墓場だ。死者たちが弔われる空間。なにゆえにこんな場所に来てしまったのかめちやくちや怖いじゃんと心に怯えが蔓延して、背後から何かに見られているような気がして背筋が凍結する。

わかつている。本当に何かが背後から見ているわけではなくて、ただ夜の中のお墓というシチュエーションにやられてしまっていて心が撃退されてしまっているが故に、背後という視界が届かない場所が気になってしまっただけなのだ。

「ふ、振り向いてたまるか…」

口に出すことで自分の耳に、脳味噌に、振り向かないという決意を強調させる。

振り向いたら負けのような気分だった。何に負けるのかもよくわからなかったが。

だがこの時彼女は振り向くべきだっただろう。

そうすれば男が背後から近づいてきていることに気が付くことが出来たのだ。

水玉模様のハットと黒いスーツというちぐはぐな格好をしている男は、『見えない』はずの白い光を明らかに『見ている』女がいることに驚きを隠せなかったし、はじめはただ偶然そこに突っ立っているだけなのかとも思った。だが、もう陽も沈んでいる夜中のお墓に、女が一人で意味もなく立っている訳が無い。普通は。それもちよつと光の目の前で突っ立っているのだから、間違いなく『見ている』のだろうと理解できる。

驚きはするが、まあ、そんなこともあるのかもな、と適当に納得する。

(悪いけど、眠っててもらおうか)

手刀。目に見えない速度のそれでシャアリの首に一撃。

訳もわからぬまま気を失った彼女を倒れないように支えてから、その女の気を失っている顔を見て男は(あ、可愛い)と思う。

男はしばしその顔に見とれていたが、気を取り直してから白い光を見上げる。

そして切なそうに呟く。

「もうすぐだよ。もうすぐ、間違いは正され、高慢は駆逐される」
川が流れるかのような清らかさで言葉を紡ぐ男であった。

彼は女を担いだまま、闇に隠れた。

Do you understand?

kill!!

何が正義か。何が悪か。

そんな議論は中学生の時に頭の中で考えて、適当に結論付けて、結局外に出て裏路地でバスケットかしたあの日以来考えたこともない。だから何が正義で、何が悪かなんてわかりやしない。

そんなことはどうでもいい。そんなの考えたって、周りから馬鹿にされるだけだからだ。

正義だ、悪だと喧しく叫ぶのは少年向けのアニメや漫画だけで充分だと思える。

その暇があるのだったら筋トレでもした方がいい。どうやってらモテるのかも考えた方がいい。どうすれば楽で豊かな生活を送れるようになるのか、考えた方がいい。

地下街で生きる連中つてのは皆、大概、そう考えるのが一般的つてなもんだと思ってるが、それは誤った認識だったかもしれないと想像させられる空間。異端者の宴。偏った人々だけが仲間となることを許されるのはその組織のリーダーが異端を好み、異端としての己を肥大化させることで自我を形成してきた人物だから（自分でいつもそう演説するから覚えた）。

「いいですか皆さん。抹殺ですよ抹殺。過激に虐殺と言い代えてもよろしい。何を殺すのかはもはや語る必要も本来はありませんが、殺すという言葉の美しさを考えれば、語る必要も自ずと湧いてくるというものです。大切なのは異端であることですよ皆さん。異端であるということは痛んでいるということです。野菜を腐らせてしまつて痛むと黒く変色しますね？ それと同じことで、人間も痛ませると黒く変色していき、私のように殺すという言葉脈絡も無しに言いたくなってしまう人格が形成されるというわけです。異端は痛んでいるから好みで、異端であるために私は殺すという言葉を好むのです。Do you understand?」

いることを憎め！ 私達異端はそのために全てを殺さなければなら
ない！ つまり、殺す！ 殺す！ 殺す！ 殺す！ そう唱え続けることに
よって私達は真の悪を見出さなければならぬ！ ……だが、見え
ない者たちよ心配するな。お前達よ、殺すと唱えても悪が見えない
お前達よ。決して、心配するな。案ずるコトナカレ。私に全てを任
せれば良い。私には見える、殺すべき悪という名の正体を暴く能力
を私は持っているが故に、この壇上にてお前達を導こうとしている
のだが、それを決して忘れるな。裏切るな。だから私はお前達にコ
ミュニケーションを図り続けたいと思っている。さ、お前達耳の穴
良くかつぽじつてこの言葉を聞きな！ …… Do you un
derstand?」

「……………KILL!!」「……………」

「

俺くんの話

何だかいつも通りの演説だったにも関わらず、今日はいつもよりムカついた。

やはり俺の性に合わないらしい。黒いスーツで整列して壇上を見上げ同じような顔をしてあの糞リーダーもとい納豆視線に媚びへつらうような微笑を浮かべなくてはならないなど、見返りが無いのは徒労に終わるだけだ。勿論、見返りをもらっている奴はいる。幹部クラスの人間などはその良い例だろう。だが俺は下っ端であるからして、正直、幹部クラスの連中が羨ましいし自分が幹部にはなれないことが最近わかったから、夢も希望も無い。

これから先どうしよう。またやりたくもない仕事をやらなければならぬのだろうか。身元不明の腐乱した遺体を処理する仕事や、一日中肉体労働させられても日給がもらえない苦痛ばかりの体験、昔最悪だったのは一日中座椅子扱いされたことだった。人間椅子。俺はそんな屈辱的な目に遭わされておいて、一日の食いぶちを繋ぐだけのお金しかもらえなかった。

それもこれも、俺の家系の経歴が悪い。犯罪一家。どれだけ恐ろしい犯罪ができるかで、親戚の中での立場というものが変わっていくというサイコな血筋である。でもある日Titanが地下街に放られるようになってから呪われた血筋である我ら一族は、大体みんな穴だらけにされて死んだ。お亡くなりになった。で、残るは俺だけとなって、突然俺はひとりぼっち。今まで呪われた血筋というものゝを忌まわしく思いつつも、その血に導かれるがままに俺も好き勝手生きていた。そりゃ犯罪を犯すことに関してはプロフェッショナルな血筋だったから、俺だってTitanが地下街を闊歩するまでは、大体七歳くらいの頃までだけ、好き勝手自由に人殺ししていた。強盗していた。他者をいたぶって生きていた。でも、Titanに俺以外みんな穴だらけにされてしまっから、すっかり俺は萎

縮。縮こまって地下街の翳りで生きていかなくちやいけなくなつて、犯罪を犯せばどうあがいてもTitanによつて殺されてしまうのだから、真面目に生きていかなくちやいけないと誓う他なかった。血の呪いに侵されて時折目の前が真っ赤になつて訳がわからなくなつて殺意の波動がやばいことになつてしまったことも、何回もあつたが、今までそれをギリギリのラインで抑えてきたから、俺はまだ穴だらけにはされず生きてる。でも孤独。ひとりぼっち。血のことを考えれば定職に付くなんて不可能だし、友達だつて作れないし、下手すれば通行人を突如切り裂いてしまう可能性もあるのだから、小さい頃はほんとそれに怯えてしまつていて、血族の遺産を頼りにして俺はずつと社会に出ず、部屋の中で自らの殺意の波動に怯えてぶるぶるぶるぶるしているだけだつた。

でも二十歳になつてから、俺はようやく自分の殺意の波動を抑えられるようになってきて、友達を作つたり定職に付いたりは無理だが、何とか、その日その日でバイトをすることで食いつなげるようになって、俺は自分の腕で犯罪以外の手段でお金を稼ぐことができたことに、本当ッ、感動して、涙を流してしまつた。生まれてはじめて泣いたような気分だつた。薄情者の血筋であるはずの俺がボロボロとその時泣いたのだ。

でも困難なのはそれからだつた。なにせ、通常の人でも生きるのが難しい地下街だ。アンダーグラウンドだ。俺はその貧相な環境の中で異端。犯罪が出来ない俺は、ただの社会不適応者でしかない。まあ、勿論、犯罪で生きていくこと自体は社会に必要とはされていないが、しかし我々が一族が社会の中である種のカリスマ性を持つて、社会の中で闇の光を放つていた過去のことを思えば、犯罪を犯すだけの我々一族も、ある意味では社会に適応していたに違いないのだ。その末裔である俺は、ある意味では、エリートだつたに違いないのだ。良い方面での異端ということだね。

でも今は悪い方面での異端。俺は時々裏路地でバスケットボールで遊ぶけど、誰も俺には近づかないし、ていうか、誰も俺には近づか

せない。殺意の波動に目覚めてしまうから。ふふん。

俺はそんな風に孤高を保とうとすることで、自分の内奥にある、誇り、プライド、そういうものを保とうとしていたのかもしれない。裏路地を一人で占領していた俺は、裸の王様みたいなものだったのだから。当時の俺は、それでしか誇りやプライドを意地できなかった。方法を知らなかったのだ。犯罪以外のことに関しては頭が回らないという、因果な家系なのだ。その末裔が俺。

さて、青年になってアルバイトを始めて、自分で金を稼ぐということに喜びを見出して涙をポロポロ零した俺であったが、それは感動の涙であった。しかしその後からは、屈辱の涙で枕を濡らす日々だった。

必死に働いてお金を稼ごうと思っても、血の因果のせいで、社会に奉仕しようとする行為をしようとする程、なぜか頭の回転が悪くなってしまうからミスばかりしてしまう。だから毎日誰かに怒られるし、この屑が、と罵られることはもはや日常の一部分だ。殺意の波動を抑えるのに俺は必死である。Titanさえいなければお前なんて闇に葬ることは簡単なのに、と心の奥底ではいつも世間に復讐を果たしてやりたいと思っているし、その力も実際的には俺は持ち合わせている。ただ自分の命を人質にされているから手を出せないだけで。

ま、困ったものだ。おかげで人間椅子などという意味不明な仕事をさせられたり、蛆虫掃除をしたり、ゴキブリだらけの薄汚い場所を一人で掃除させられたり、日給を盗まれたり、何かの窃盗の濡れ衣を着せられそうになったり、で、悲しんでいる所に追い討ちで俺自身のミス。これによって怒声。怒鳴られて俺は萎縮、でも胸奥では漆黒の炎が滾っていることを、くすぶっていることを連中はわかっていない。俺はエリート。犯罪エリート。恐ろしい血のその末裔。異端者。

だから俺はあの組織に、異端を愛するものがリーダーのあの組織に入ることが出来たわけなのだが、俺に押された烙印は『軽レベル

異端』。軽、中、重、と三段階にランク分けされるのだが、俺はその中でも最も異端レベルの低い、軽、という烙印を押されたのだ。あのへんちくりんの納豆視線リーダーに、そう言われてしまったのだから、俺はあの組織の中では一生幹部になれない、下っ端であり続ける他ない。そうハッキリと口に出された。俺。恐ろしい血の家の系のはずなのに。

きっと、ただ単にあの糞リーダーは、俺の潜在能力に恐れをなしているだけなのだ。

だってそうだろう。俺には凄まじい漆黒の血が流れている。超絶黒い。濃密にどろどろしている。わかってもらえないだろうが、凄まじいくらいどろどろです。みんなにわかってもらいたい。

異端レベルは『重レベル異端』を行くのは当然で、中でもトップクラスであるのが俺の本来であるはずだ。あのリーダーは俺のその本来の姿、潜在能力を全て放出した俺の最強の状態、それを恐れて俺を『軽レベル異端』としたのだ。これによって俺の立場がぐんぐん上昇して、遂には俺がリーダーの座を奪い取ってしまう、てきな将来を恐怖したから、あいつは俺を幹部にもなれやしない下っ端というレッテルを貼り付けて、鼻息をふうんと吹いて煙草を吹かして余裕ぶつこいていやがるに違いない。許すまじ。

でも、確かに許せないけど、犯罪はできないし、俺は実際食いぶちを得ることに必死にならなくちゃならない。腹は毎日減っている。毎日、ぐう、と腹の虫が鳴る。満腹に飯を食べたことなんて、一年くらい前だ。組織の下っ端は別に上の者から飯をおごってもらうことはないし、むしろパシリとして軽んじられて体力を奪われるほどだ。なんで、あんな組織に俺はいたのだろう。俺は馬鹿だった。呪われた血筋のせいで頭が回っていなかったようだ。今日から俺は仕方ない、屈辱の涙を見るのはどの道を選んでも同じことだ。だったら、せめて俺は孤高の存在としてあろうじゃないか。組織なんてダサい。俺は一人でこの地下街という苦難の道を乗り切り、いつかいつか、Titanaがいなくなったその時、俺は失われる寸前のこ

の呪われた血の再興を図ろう。末裔として、それが義務だ。やらなくちゃならないことだ。それまで俺は、絶対、生き延びてやる。

孤高なる存在として、アルバイトとして日々食いつないでやる…

……そうだ、俺は……！

誇り高き、エリートではないかつ………！

「よし…。まずはハローワークだ。それがマルコ・ポーロで冊子をもらってくか……」

そうと決まれば、ぴっちりとフォーマルな組織の象徴である黒スーツなんて、うざったらしい束縛だ。こんなものは脱ぎ捨てて、白いYシャツで地下街を歩いたほうが、もしかすると俺をまっとうな者と勘違いして見込んでくれる馬鹿に話しかけられる貰える可能性も出てくる。爽やかな、純白たる白。黒のスーツなんて、だめだめなんだよあいつら、KILL、とか何だよ阿呆どもが糞どもが間抜けどもが笑えるマジ出島。もう一度笑つところ。KILLって何だよ（笑）

「あー、なんかすつきり」

通り過ぎていく地下街の鬱屈連中が、今日は何だか少しはマシな人種に見えるのは、きつと俺の心が清らかだからそう見えるのだろう。はははは、鉄の空が、上層の連中の支配下であることを露骨に俺に教える鉄の空が、今日はちょっと愉快に見えるぞ。今日はラッキードイなのかもしれない。だとすると俺に良い条件の日雇いバイトが転がり込んでくる可能性は高い。この爽やか白Yシャツの格好のまま、河原で寝転んでいれば青春を謳歌している普通の青年だと勘違いして見込んでくれる馬鹿が俺の目前に現れて、爽やかに白い歯でも見せて誘ってくれるかもしれない。

「YOU。仕事アルよ」

俺は期待に身を震わせて、希望、全身幸福感を鎧として身体に纏って、相手の誘いをにこやかに了承するであろう。そこから孤高ROADは始まり、それが何処までもうねうねと蛇行していて、Titanが誰かの手によって葬られるその日まで孤高ROADはきつ

と途切れることなく続いてくれるに違いあるまい。ハハツ。人生楽勝すぎて足の爪がはがれてもニコニコ笑っていられそう。四十度の熱を出しても殺意の波動を抑えこむという荒業を難なくこなせそう。ハハツ。ていうかまた思い出しちゃったよKILL!!(笑)殺すな(笑)なんだよあの組織。つうか黒スーツとかじゃなくもつとオリジナリティー溢れる制服でも作れよド阿呆ぼろ糞どもめがツ。ハハツ。調子乗ってきたわ俺。

俺は調子に乗っていた。

「ふっふふー(笑)ほっほほー(笑)ばんばばーっぱばばん(笑)どろっどろりゆるるるぶりゆらああああああ(笑)」

踊るようにして歌を歌い、歌うように踊りを踊る。俺はスーツをそこら辺に放り投げて気分はミュージカルの出演者。くるくる回り、喉仏を震わせてボイスを天にまで届かせる勢いさ。

繰り返ししておこう。俺は調子に乗っていた。

「ふっふふー(笑)ほっほほー(笑)ばんばばーっぱばばん(笑)どろっどろりゆるるるぶりゆらああああああ(笑)」

踊っている途中に俺は、すっかり俺の中の世界だった。今にして思えば俺はすっかり阿呆で間抜けだが、しかし、仕方が無いことだ。この呪縛。血が、俺の頭を犯罪以外のことではまともにも使用できないようにブロックしてしまうのは、DNAの問題なのか、はたまたもつと根本的な何かが原因なのかはわからない。俺はただの馬鹿だ。でもね、俺は言いたい。過去の俺に言いたい。ある意味このミュージカルの演舞をしている俺は、犯罪者だ。変態だ。地下街に出没したキチガイ以外の何者でもない。故に………ああ、言いたいことを忘れてしまった。俺はもうこの記憶を封印することにしよう。俺はもうこの記憶を忘れない。屈辱は忘却の彼方に葬らなければ、弧高ROADを攻め切るのは難しい。嫌な事はすっぱり忘れて、おいしいものを食べる夢でも見ればいいじゃない。ステーキを食べる夢を見ればいいじゃない。スキヤキ、スシ、そしてフカヒレ。全ては俺が盛んだった時に食べることが出来ていた豪華な食事も、いまや空

想の産物に等しい。だが悲しんだりなんかしない。食べた経験があるから空想をすることでスキヤキの味、スシの匂い、フカヒレの見映えのよさ、それらを脳裏に思い起こすことができるのだ。

「ふっふふー（笑）ほっほほー（笑）ばんばばーっばばん（笑）どろっどろりゆるるるぶりゅらあああああ（笑）」

この時の俺はすっかり阿呆だ。俺は調子に乗っている。

だから今しがた自分でやめようと決意した組織の、そのもつとも恐ろしい幹部に回転しながらぶつかってしまったのだ。ぶつかってから冷や汗を掻いても、ぜんぜん、遅いのに。

「あなた……見覚えがありますね。たしか、組織の一員だったはずですが……」

俺は自分の弧高ROADが閉じていく気配を、その時、確かに感じた。

無表情の鬼、という評判のその女。背中に一人、男を背負っているというのに息一つ切らしていない。

俺はミュージカルをやめたばかりで息を切らしている。ださいくらいに、肺を激しく動かしている。それと対照的に平然としているその女を見るにつけ、憎悪とも嫉妬とも付かない殺意の波動一歩手前みたいな感情が沸き立ってきた。

「組織は今日限りで抜けさせてもらう。だからこの通り、スーツも脱いでYシャツさ」

俺は感情を抑えこみつつ話す。孤高ROADが閉じていくような気配がまだある。俺はもしかしてこの女に怯えているのだろうか。

俺のそんな何とも言えない感情を気にもせず、彼女は冷静な声つき。

「やめるならばリーダーにそれを伝えなくてはなりません。それを、したのですか？」

不弥生ⅡテイⅡV。不弥生姉弟と言えば組織の誰でも知っている。弟の不弥生ⅡバチャリルⅡVはまだ話が通りやすい奴だが、この女は融通の利かない頑固なタイプで面倒だというのは俺も知っている。

その内に秘めている凶暴性の凄まじさも。噂ではこの女は酷い拷問を平然とした顔つきでやってのけるという話なのだから、関わりたくないものだ、面倒な奴と出会ってしまった。このチップの埋め込まれてない異端者は、俺みたいにチップが埋め込まれていない為に、犯罪を平気でしでかすことができる。Titanによる管理はチップが脳内に埋め込まれていることを前提として成立する。

とりあえずこんな女とは関わらない方が吉だ。Titanが地下街からいなくなった暁には、糞腹立つこの女を真っ先に殺してやりたいが、しかし今は耐える時だ。孤高ROADだ。

嘘について、この場を逃れることにしよう。

「リーダーに脱退を願ったら、一発OKされちゃったんですよ。ほら、俺、軽ランク異端者なんで」

自分で自分のことを軽異端者などというのはプライドが傷付く。後でしつかりとこんな嫌な記憶は忘れることにしよう。

「ふーん。そうですね。ならいいんですが」

良かった。まだ怪しそうに俺の様子を窺っているが、しかし一回離れちまえばもう何の問題も無い。姿をくらしちまえばいい。そうだな、ちよっとこれからは違う地区に住むとしよう。誰もいない場所で、一人、生き抜いてやるのさ、この地獄みたいな場所だな。

「じゃ、またね。今まで、お世話になったよ。ばいばい」

俺はわざと陽気な素振りを見せながら、ティとすれ違う。その瞬間全身から冷や汗がドツと出ていて、今にも肩を掴まれて「待ちなさい」と言われるのでは、と心臓の鼓動が激しかったが大丈夫だった。通り過ぎる時に、ティに担がれている見覚えの無い男の顔つきがチラツと見えたが、完全に白目を向いていてしかも口元から覗きたいなものが一筋垂れていてみっともなかった。

俺はティと通り過ぎた後には、孤高ROADが大通りのような広い幅を持ち始めていくのがわかって感動。これからも大変だろうけど、頑張っていこう。俺、根本的どころがエリートだし、なんとかなるだろ。死なない程度に、必死に生き延びてやるう。いつか血

筋を再興するという目標のために、生き延びてやるんだ………！！
空が明るく見える。世界が眩しく輝いている。こんなのは生まれ
て何度も出来ない経験だ。

晴れやかだ。鉄の空だというのに、俺の気分はとっても晴れやか
だ。素晴らしすぎる。

何か良いことが起きる気がする。ハッピーな期待が精神の海から
膨張して天を突く、みたいな表現が自然と脳から湧いて出てきて、
口笛を吹きたくなってくる。

で、実際に口笛で昔懐かしい民族ソングでも口ずさもうとしたそ
の時。

「はれ……？」

俺の景色が、三百六十度回転したと思った。

思ったと思つてたら、後頭部にするどい熱。熱い。うわっ、て驚
く暇もない一瞬で、

俺はコンクリに全身を叩きつけられていた。動けない。

意識が真っ黒くなっていく。遠くなっていく道が狭くなっていく
晴れが曇っていく悲しい悲しい忘れたいなんてこんなことに。

「すみません、気が変わりました。用心に越したことはないので、
あなたの身柄を拘束した状態でリーダーの所にまで連れて行かせて
もらいます。手荒な真似、お許しください」

滑らかな舌で良くもそんなひどいことを言えるものだ。やっぱり
こいつは、俺が反旗を翻す時には真っ先に殺さなくちゃ駄目な奴だ。
待っていやがれ。調子に乗っているのも………い………ま………のう

………ち………だ………？………

ゴツ

築五十年以上が過ぎているにも関わらず改装もされていない倉庫。見た目的にはそんな感じ。そのようなほとんど廃墟に等しい場所。天井にはまるで金平糖のようなギザギザな穴が空いているが、その倉庫の荒廃ぶりは金平糖のように甘いものではなく、実にひどいものだ。苦々しいほどに崩れていて、みつともない姿を晒している。そんな場所に何故、黒いスーツを身にまとっている人間がこんなにたくさんいるのだろうか。

上層ではサラリーマンの多くがこういう服装をして出社しているらしいが、ここは地下街だ。黒スーツを纏う必要がある職種などそう無いし、仮にスーツを纏う必要がある職種の連中が集まっているにしても、こんな廃墟みたいな場所に集まっているのはおかしい。ちぐはぐだ。黒スーツとは上層という繁栄に生息する人間が多く身に纏う象徴に等しい。

それを上層を憎む地下街の人間たちが、なぜ身に付けているのか…。ちぐはぐ、だ。

「何なんだよ…こいつら」

ホルシュは、そう呟いてから自分の口内がひどく不愉快な、胃液のネバついたような、そういう匂いが残っていることに気が付き、そうだ俺は急に地面に張り倒されて…吐いて…と思いつく。

立ち上がるうとするが、何て古典的なのだろう、縄で身体をぐるぐる巻きにされているから動けない。うんとも寸とも言わぬ程きつく縛られていて、そのロープの末端は背後にあるドラム缶に縛り付けられている。

動けないことがわかったホルシュは、どうしたものだろう、と周囲に視線を送ってみる。

黒スーツの連中の、頭、がある位置に足の爪先があるようになる高い場所に、三人くらいだろうか人間が丁度登っているのが見えた。

その内二人が黒スーツで、なぜか一人だけ白いYシャツ。で、そのYシャツの男だけ脱力していて、気を失っているようにホルシユの位置からでも見える。

何が起きるのだろうか、と様子を窺っていると耳をつんざくノイズが走った。

スピーカーの音量が大きすぎる。ザツ、ザツ、と耳が麻痺する雑音が倉庫内に行きかっついていて、明らかにうざったい。にも関わらず黒スーツたちは平然としているし、白Yシャツは脱力したままだ。こんな喧しい音に何の反応も示さないなんて、こいつらは耳が聞こえない連中なのだろうか。いや、このやかましい音に慣れている、ということだろうか。

そんなことを考えている時、ホルシユはふと、鼻がとてもムズムズしているのに気が付く。

何だこのムズムズ感は、とその正体を目を下にやることで探ろうとするが、自分の鼻の辺りというのは見えないものだし、手で確認しようにも縄でぐるぐる巻きだから手を使ってムズムズの正体を暴くことはできない。ホコリでも付いているのだろうか。いや、にしては何か感覚が違うっていうか。

自分の倒れる前の記憶を探ることで、ホルシユは自分の鼻についているムズムズさせてくるこれの正体を暴いてやろうと考えて、ハツ、とする。ハツ、としてから、絶望する。

(……これはもしかすると、しょう油ラーメンの、麺、ではないのか……)

ホルシユは自分の記憶を探ることで、ラーメンをおいしく啜ってから食い逃げしたナサケナイ過去を思い出した。その後にラーメンは吐いたはずだが、だとするとその吐いたラーメンが何らかの流れで鼻に突き刺さったということになる。麺が鼻に入って落ちないっておかしくないか。麺はつるつるしているのだから重力に引っ張られて落ちるのが普通だろう。もしかして俺の鼻毛は剛毛なのだろうか。だから麺が落ちないのだろうか。剛毛にひっかかっているのだ

ろうか。

だとしたら悲しい。鼻毛が剛毛だなんてダサイじゃないか。

鼻毛が剛毛かもしれないということで強い悲壮感を味わっているホルシユの耳に、スピーカー越しの大音量が入ってきた。声主は男性。深い怒りを身に宿しているのがスピーカーという機器越しに垂れ流れてきたというわけだ。といっても怒鳴るような叫声を発しているというわけではなく、静かに怒っているというのだろうか学校の先生が子供達に怒鳴り散らす寸前の厳肅たる雰囲気に近い声が垂れ流れている。だが喧しく聞こえるのは、スピーカーのその音量があり得ないくらいに高く設定されているからで、もしその声主が怒りを爆発させたら、この倉庫内にいる全員の耳の鼓膜が破れてしまつたろうとホルシユは予想する。その心配のおかげで鼻毛が剛毛である可能性という心配を忘れることが出来たのは良かったかもしれない。

だが、鼓膜が破れるのはもつとやばいことだ。

ホルシユはスピーカーから出来るだけ姿を離していたいが、縄に縛られているのだから耳を塞ぐこともままならない現状である。成す術なし。せいぜい声の主が怒鳴り散らさないことを祈るしか、彼に出来ることは無かつたのである。

「えー。我らが組織『マイノリテッド』が結託するための私の誠心誠意が足りなかつたと言うことなのでしょう。正直、本日、幹部のテイからその話を聞いた時、私の胸内に焦げて朽ち果てるような戦慄が轟きました。だってそうでしょう、皆さんも知つての通り、私はマイノリテッドを素晴らしい秘密組織にする。そのことに対して全エネルギーを注入してきました。ですがそれは所詮、私のひとりよがり過ぎなかつたようです。コミュニケーションを図ること、メンバー同士の信頼を深め合うこと。異端なる者ばかりが集まるこの組織においては、特にそのことが重要になってきます。コミュニケーションを通して信頼を互いに築き合わなければ、異端であるが故に虐げられてきた我々は簡単に結束を崩してしまつたからです。崩壊。

瓦解。空中分解。それは何としても防がなければならぬ。故に、私はそれを重要視していて、おっかなびつくり、みんなが組織で仲良くやっていけるように色々試みてきたんですよ。みんな、それをわかっていたでしょう………わ、私の誠心誠意は、みんなには伝わっていたはずでしょう………」

その男の静かな怒りに、涙声が混ざり込んできているとわかる。涙ぐんでいるということは感情の線が乱れているということだ。となれば、突然男が叫び声を上げても何らおかしくは無い。

男は不安定な調子で、言葉を続ける。

「ですが所詮、それは錯覚。錯覚錯覚錯覚錯覚。この世にある全てはやはり抹殺しなければいけないのかもしれないと、私は泣いています。心の奥底で赤みを持って血液を沸騰させる寸前です。言うことがわかりますよね、みんなには。でもね、ここにいるYシャツの男。この男が、この男がわかっていなかった。何もわかつちゃいなかった。わかっていているフリをしているだけのゴミクスでした。こいつはきつと何処かが腐つていやがる。Do you understand!! (KILL!!) 野菜が腐敗して真っ黒で異端、痛んで、いやがるのだ。クスボケナス、カスツ、味噌! 錯覚錯覚錯覚錯覚錯覚。Do you understand!! (KILL!!) (KILL!!) 我々は地球人だ。わ、わ、わ、私はこの男に嘘を付かれました。嘘とは虚偽ということ。よってこれから制裁を加えましょう! Do you understand!! (KILL!!) (KILL!!) 組織を裏切ろうとした軽異端者に全員で石をぶつけるのですよ。はい、みんな用意してーええ」

男が指をパチンと鳴らすに合わせて、黒スーツの連中がポケットから石を取り出した。

大小それぞれわずかに差はあるが、大体、どれもが小石というレベルではなく、石、と言える体積を持っているのがわかる。その場にいる人数はざっと百人くらいだと思っただか、それが全員石を利き手に持って構えた。

あんなものが一斉に投げられたら、壇上にて十字架に貼り付けられたあの男はどうなってしまうだろうか。白いYシャツの男。イエス・キリストみたいに哀れに見えるその男は、何か大切な希望の光を失ってしまったかのように、顔がうなだれている。ここからでも目に光が灯っていないことがわかるし、顔はとても青白い。

ホルシユの胸内から興奮が湧き出てきた。

背徳的な、集団で一人に石を投げつける行為というものは、恐ろしい事だ。

投げられる側の気持ちに立ってみれば、相手が哀れすぎてそれを見ることにすら気が引けるほどに、後ろめたい気持ちを発生させるリンチ。

しかしホルシユは縄で身体を縛られているから、その行為を止めることは出来ない。

だからその行為を、目を瞑って見ないようにするか、それとも、興奮する心の赴くままにそれを眺めるのか。どちらかだ。その小石を投げさせないようにしたり、今の内にこの場から逃げることでその光景を見ないようにすることは出来ない。

ホルシユは目を瞑らない。目を反らさない。興奮する何か。湧き出てくる、

『それを見ておかなければならない』

という野次馬精神のような低俗なる心。

彼の想像している以上に強く、彼の胸内で鼓動するその心が訴える。

『集団で一人に向けて恐ろしい行為をする。こういうものだ。見ておいて損することじゃない。滅多に見れるものじゃない。人の一種の性質だよ』

その訴えは、後ろめたい気持ちを掻き消すためだけにある、その場凌ぎのような訴えでしかないから何らの崇高も無い。美しさも無い。言葉の形だけ少し格好を付けているだけの、まるで悪魔の囁きのようなそれだ。

暴

犯罪を犯すことにだけ脳が素晴らしい回転をする、かなり偏った血の一族。

人間の狂気という性質をパッケージして一箇所に集めたかのような脅威性を持ち合わせていたその一族も、自動治安維持機械Titanの登場によって駆逐され、陰の勢力として繁栄していたその連中だったというのに、その血を持った者を残り一名とされてしまった。彼の名を、羅刹鬼「ジェノサラード」Kと言った。

しかし犯罪という点においてだけ脳味噌を特化させ、チューニングさせて生きてきた羅刹鬼家の血は、その極端すぎる濃厚さを持つが故に、社会あるいは世間、というものの比較的陽の当たる方向に行こうとすればするほど、根本的なところで拒否反応を起こしてしまいうらしく、本来持っている優秀な知能、神がかり的な運動神経、それらを発揮できぬまま地下街の埃に塗れてしまう。

屈辱の日々。枕はもう涙の匂いがするほど。

孤高ROADという独自の発想に浸り強く生きていこうと誓った彼ではあったが、不運なのか、あるいは、かつての凶暴たる悪行によつて彼に殺された人々の怨念が死を呼び寄せたのか。

十字架に貼り付けられて罪を告白せねばならぬかのよう。

だが彼が何かを告白するその前に、真っ黒い人々は彼に対して投石を行い、彼の全身をピンク色に腫れ上がらせる。内出血。水風船のように顔や手足は膨らみ、何時破裂して血をそこら中に撒き散らしてもおかしくは無い様となった。

ジェノサラードは吐血して、白いYシャツに真っ赤な縦線を垂らす。

腫れのせいではほとんど開かなくなった目を、何とか瞬かせて前を見ようとすると、数々の投石がそれを邪魔し、既に激痛を発生させている、額や、鎖骨、肩、脛、足の爪先、鼻先、口元、すでに恐る

しい程に損傷している箇所を追いついて打ちをかけてくるから前を向くとすらままならない。

「&# \$% & ' \$# & # \$」

言葉は言葉として形を持たずヒュー、ヒュー、とかすれた吐息だけが彼の喉奥から流れる。

死ぬ。

たったの二文字。それがやけに辛く響く。

塩分を含んでいる彼の水滴が腫れている部分をなぞって、さらに痛みを刺激的に与えてきて水滴がさらに溢れてくる。痛くて水滴が出るのか、死ぬ、ということに怯えているから涙が出るのか、もうそれはわからない。わかりやしない。わからなくてもいい。

石は相変わらず容赦をせず、彼の全身に降り注ぐようにして当たる。もうそこにある彼は、人間というものからはひどく遠ざかっていて、肉の纏まり、みたいだ。

キーンと耳鳴りがする。視力はほとんど失われているし、痛みがもう痛み何だか何なんだかわけがわからない。むくんでるのが気持ち悪くはあるけど、浮遊感もあってそれは気持ち良い。

くすくす。

ふと、耳鳴りを起こしていた彼の耳に聞こえた。

笑っていた。笑われていた。

脳味噌の裏側の方にへばりついてくるような、しかし頭を優しく包み込むような優しい声をしているのが、彼にさらに心地よい浮遊感を与えてくれる。彼は、その笑い声を何度も聞いた。

くすくす。

男の子だか女の子だか。とにかく子供の声であるな、とぼんやりと理解できるのだが。

だが、彼はそれに気を取られている途中に、ついに視力が失われてしまつて真っ暗な世界に閉じ込められた。黒いばかりで光は一切届かない暗闇。そこには何も。

見えない。見えない。見えない。

くすくす。

笑うな。笑わないでくれ。そんな優しい声で。

つまらないの？

え。

つまらないでしょ。こんな終わり方なんて。

そうかもしれない。

なら、おもしろくしようか。

暗闇の中で何かが見えるのはおかしいはずだった。彼の視力はすでに失われているのだから、そこでは何もかもが暗闇で、薄らぼんやりしているものでさえ映らないのが世の理の一つではなかったのだろうか。でも、彼の前方には、手を繋ぎ合っている男の子と女の子がいて、彼を手招きしている。

こっちにおいでよ。

何があるんだそっちは。

さっきも言ったじゃない。

信用できないな。

きつと大丈夫だよ。

そう。

あなたに楽しい時間を……

彼は感謝の言葉を男の子と女の子に対して告げた。一度ずつ、心をなるべく込めたつもりで感謝の言葉を口からつむいだ。いや、もつと違うところ？ きつと魂の中で。意識の中で。奥底のようなところで、この出来事は起こっているのかもしれないから。

彼の内奥に冷たい液体が入り込んできた。

清涼な流れが血管の隅々にまで、血液の代わりに入り込んできて駆け巡っていく感覚。

真つ赤な液体が全て外側にこぼれ落ちていく。皮膚の小さな小さな穴から、真上のほうへと昇って消えて行く。どんどん見えなくなっていく。その代替としてだろうか、真下から清涼なる流れは昇

り上がってきて、足の裏から身体の内部に侵入したかと思うと、隅々に、隅々に、染み渡っていく。青い清涼なるそれが、力になっていく。………身体はもう自由だ………

彼は自由になって、十字架に縛られていた体はちぎられて、あんなに腫れていた体は、青白いぼにやりとした光に包まれたままに、宙に浮いた。

それは間違いない光景だった。確かな光景だった。

黒スーツの全員がそれを目撃したし、ホルシュという青年も縄に縛られている状態でハッキリと目撃した。

羅刹鬼「ジェノサラード」Kは青白い光に包まれたまま、宙に浮いている。

彼には手を繋いだ男の子と女の子が、たくさん見える。

一組や二組ではない。倉庫の宙に男の子と女の子はたくさんいて、ジェノサラードに向って手を振っている。それはある種、恐怖してもおかしくはない不気味な光景と捕えることもできるはずなのに、ジェノサラードは手を振り返した。男の子と女の子たちに、穏やかな顔つきで。

「パーティーのはじまりだ。………こういうことだったんだ！」
すべてから自由なのだとわかる。今日散々な目に遭わされたのは、いや、違う、今まで散々な目に遭わされたのは。この瞬間のためにあったのだ！と興奮する。彼は自分の身体が重力にさえ縛られていないのだ、と高揚した思いのまま爪先を凶器に変える。尖らせて、獲物に標的を。

滑空し、そして、怯える顔つきに変わった瞬間の首を、次々と撥ねていく。

ある者の腸を引っ張り出し、ある者の両腕をもぎ取る。

両眼を引っ張り出し、そのかわりに石を詰め込んでやつたり。

股間に生えている代物をむしり取って、誰か他の奴に無理矢理に食わせたり。

足をもいだり。指をちぎり取ったり。

誰かの臭う足を他の奴に食わせたり。顔の皮膚を剥いだり。鼻を掴み取って呼吸をし辛くしてやったり。歯を一本ずつ抜き取ったり。

一人の胃に、多くの人間の歯を入れ込んだり。さっきまでの自分と同じくらいひどい有様にしてやったり。骨をわざとむごい音を経て折ったり。とにかく殴り倒したり。四肢をもいだり。

羅刹鬼「ジェノサード」Kは、七歳の時に封印せざるを得なかった自らを復活させて、今までの鬱屈全てを忘却するがためのことに暴れ回る。

百人以上あつた黒いスーツの人々は、血の海に沈み、独特たる異臭を倉庫内に充満させてしまつて、元の姿をどこにも見当たらなくしてしまつた。

彼は彼にとつての楽しい時間を満喫する。約、一時間程度。ただただ血が騒ぐに任せて、欲望のままに快楽を貪る。全てを血に変えて、生を死に変えて、己の屈辱を誇りに変えていく。

最高の時間。再興への希望。彼はこれからの先、未来への展望を開かせる。栄光。

だけど、そう。

そうは問屋が卸さない。

卸すはずが無い。何故か。

彼は人外から力を与えられた。ならば、自らも人外になつたということだ。

赤い血液は昇つて何処かへと消えていき、青い清涼なる流れが、代わりに彼へと入つたのだ。

ならば、彼はもう人には戻らない。本当に異端になつたと言える。だとしたら、再興などという人らしい望み。そんなものが叶うはずがない。叶うことを望むことすら、叶うはずがない。

「うわわ。なんですかこれは。うわわ。みなさん、何をするんですか。うわわわわ」

彼は吸い込まれ始めた。人外に吸い込まれ始めた。

人外たちは、おいしいなあ、おいしいなあ、と言って彼を吸い取っていく。

「やめてください。消さないでください。そんなことしないでください。もっと生きたいです。人を殺したいです。やることがあるんです。やらなきゃいけないことがあるんです。俺は俺のために栄光をつかまなくちゃ、いや違う、血族のために、血を絶やさぬためにうわわわわ」

彼はすっかり吸い込まれてしまって、消えてなくなってしまった。

羅刹鬼ⅡジエノサラードⅡKなどという大層な名前のわりには、呆気ない幕切れであった。

人外たちは満足気にしながら、どこかへ飛んで消えて行く。手を繋いだまま、天に隠れて姿を隠したのだ。

こうして、血の海と化した倉庫内には、一人の人間だけが残された。

彼は幸運なことに殺人鬼に存在を気付かれることなく、生き延びることが出来た。

あまりの出来事に呆然としているその青年は、しかし縄で繋がれたままだから逃げるができない。このまま人が来なかつたら、餓死してしまう。

しかし心配には及ばない。黒スーツの中でも生き延びていた奴とというのは、いるのだから。

不弥生姉弟はチップが埋め込まれて無いが故に、幹部でありながらあくせく働かされなければならなかった。だからこの集会の時も、ホルシユを縛ることとジエノサラードをリーダーに届けることだけして姉の方は再び活動のために外に出ていたし、弟の方はシャアリをどう扱おうか困ってそこら辺をうるちよろしているから倉庫にはいなかった。

故に、組織の中で生き延びたのはこの二人だけ。

だから自然、一連の出来事を見ていたホルシユは、この二人に追及されることになる。逆にホルシユからすれば何ゆえに自分がこん

な所に連れてこられたのかと思うわけだし、姉ホルシユも連れてこられるのを後に見れば、P l u t o や太郎に関係することで連れてこられたのだろうか、と想像することにもなつて警戒心は強まる。不弥生姉弟も、当然ホルシユだけが生き延びていて他の全てが死んでいる状況を見れば、ホルシユに対して凄まじい警戒心を抱くことになるのは当然だった。

こうして不弥生姉弟と八城姉弟は、スーを除いてだが、顔を合わせる事になったのだ。

非常に警戒し合った状態で。

ひとりぼつと

「あなた、彼女の弟さんですか。じゃあ、この人を僕に下さい！」

実際、現実主義者のティはホルシユに対してかなりの警戒の念を抱いていて、ホルシユにしたって自分がどんな目に合わされるか想像できないから半径一メートル以内には彼らとの距離を近づけないように注意していた。にも関わらず、そういう間合いがあったにも関わらず、その男は両目を輝かせて陽気にホルシユに近寄り、その両手を握りとつてからそう叫んだのだ。

「じゃあ土下座を三百回してからこう言ってよ。あー、ピスタチオ食べたいっ、つって。意味わかんない冗談言っちゃってごめん。なはは」

などという軽い言葉を返してやり過ぎすわけにもいかない。ホルシユはその男がどういう意図でそんな会話を試みてきたのか理解できないというか理解したくない。

しかしシカトする訳にもいかぬ。初対面なのだから。

だがどんな言葉を掛けていいものやら。場所の空気は殺伐としたものに囲われすぎているから話をするにそぐわな過ぎる。地べたに染みとして残り続けるであろう、凄まじい量の真っ赤な跡と、先ほどまで行われていた虐殺の記憶。気配の残り糟。ホルシユは男の手によって縄から切り離されたが、地に足が付いていないような感覚に囚われている。

目玉が一つ、転がっていた。瞼に覆われていない、むき出しの眼球。視神経みたいなびろびろ。

ホルシユはシャアリが気を失っているみたいで良かった、と感じる。こんな光景をわざわざ姉に見せるもんじゃない、と思う。あまりにも衝撃的すぎる。

シャアリを背負っている、その突如「あなたの姉を嫁にください」などと言った訳のわからない男は自己紹介をした。

「不弥生」バチャリル」Vと言います。この背負ってる方に一目惚れしました。結婚したいです。この方のお名前は何て言うんですか？」

ホルシユは口をあんどりと開けたい気分になる。そのバチャリルとかいう男の瞳の色はキラッキラと輝いていて、しかし瞳の奥で真剣な色をしたものがある。こちらを捕まえた側の人物の癖に縄を親切な調子でほどいてくれたり、弟だとわかった途端にいろいろ尋ねてきたり。それで結婚したい、などのたまう癖に、まだその結婚したい相手の名前さえわかっていないというのはどうということなのかまったくもって。明らかにこいつは馬鹿なのではないか。

「お前みたいな馬鹿っぽい奴に姉はやれん」

という台詞を言いたくはない。シスコンっぽいし。というかこういうのは弟ではなく、父親とか母親に対して願うものだろ……。

と、考えながらそいつのことをよく見てみると、つい最近そいつを見かけたばかりだと気が付く。何処だったっけ、と考えてみて悩んでいる途中に、水玉模様のハットを被っている様子でピンと来た。そっだこいつは雑誌prayを買おうとした奇特な奴じゃないか。

あんな雑誌を買おうとする奴なのだ、どうりでおかしいはずだ。馬鹿なはずだ！ まあ毎号欠かさずに読んでる俺が人のことを言えるもんでもないけど……。丸久九美子先生の『伝説のゴメラ』はすごく面白いよね、とか話してみるのもアリっちゃアリかもしれないが同じ雑誌を読んでいるからと言って、その中の連載の趣味が合うとは限らないから逆に気まずい感じになる可能性もある。

ホルシユは短い時間の間に脳味噌をフル回転させていた。思考が何処かを行ったり来たりしていたのだった。

バチャリルはホルシユに何も返事をしてもらえなくて沈黙が連なるのに耐え切れないので、

「ああ、結婚かあ」

などと言って背中に背負っているまだ名前も知らないこの人と婚約したら、どんな共同生活が待っているのだろうかと妄想すること

にした。これによって男二人は向かい合っているにも関わらず、互いが互い、己の世界に入り込んでしまつて奇妙な空気になつてしまつたのだつた。

現実主義者のティは、二人がそんな風に己の世界にはまり込んでしまつて収集がつかなくなつているのを見て、ため息をついてから、ふと耳を澄まして周囲の状況を窺つてみる。

静寂に包まれている倉庫内からなら、周囲を探るのは随分と楽であつた。

「……………！」

だがそれによつて判明した危機は、突破するのが楽ではない危機。それが迫つていることを知つた。

「バチャリル。そして盗つ人」

彼女は冷静な、ほとんど無感情の声つきで、二人を呼ぶ。自分の世界に入つていた二人であつたが彼女の呼び声をシカトするほどバチャリルは愚かじゃなかつたし、ホルシュは寝ゲロさせられた記憶があるから根本的などころで彼女に怯えているが故に、その声に対する反応は素早い。

その二人の素早くて滑稽でもある反応を無関心な心持ちで眺めながら、しかし彼女はこの危機をどう切り抜けるか、と表情には一切出さないが多少焦つている。

キヤタピラの音。大量虐殺が行われたことにより群がつてきた、犯人を抹殺することが役割である蟹型機械Titán。

その気配が今四人がいる倉庫を取り囲んでいることを、ティは感じ取つた。そして敵は防音領域機能ノイズキャンセラーフィールドを使用してゐるらしく、かなり意識を集中しなければそれが迫つていることをわかることができな

い。現にTitánに囲まれていることを悟つたのはティだけで、二人の男はぼうつとした顔をしている。その二人の意識をハッキリさせるために、ティは少し大きめに声を出す。

「囲まれてる。数は十以上。おそらく、この盗つ人を犯人だと連中は認識している」

ティはびしつとホルシユに人指し指を突き出した。

「だから、この男を突き出せば一応、ここにいる残りの三人は助かるんだけど」

「そりやだめだよティ姉！」バチャリルは即座に否定する。

「なんでバチャ？ 事態はまだハツキリとはしていないけど、この状況から見るにこのホルシユとかいう男は事件の目撃者。もしかすると虐殺を行った張本人ということも。Tit anもここに集まってきたということは、事件の犯人をこの男だと断定したということ」

「あんな自動機械の判断なんざ、大雑把で適当なもんだよ。せいぜい消去法でこの人が犯人だと判断したんだろう。それはティ姉もわかってるだろ」

「状況が異常すぎる。私たちは生きなきゃならない。この男に聞きたいことはあるけど、この男が犯人だろうがそうじゃなかるうが、この男一人を使えば助かるんだつたら、それが確実な方法」

「確実じゃないよ。ティ姉にしては、判断が甘い」

「……どういうこと？」

「俺達にはチップが埋め込まれていない。そして地下管理局は自らが管理できない異端分子を好まない。チップが無い俺達は奴らにとつて異端分子そのものだ。そんなものを、連中がみすみす見過ごしてくれるわけがない」

「……………」ティは考えるような仕草をしたまま、無言となった。

脇で話を聞いているホルシユとしては、自分が生贄として捧げられない方向になるのはすごく助かる。が、今の話によれば自らがあのTit anから標的にされてしまったということで、平常心を保てるわけが無い。しかも先ほど目の前で起きた殺戮の光景を地下管理局に話した所で信用してもらえない可能性が高くて、十字架に縛られ石を投げられていた男が突如宙に浮いて、石を投げていた百人ほどを一時間ほどで血の海に沈ませたなど、地下管理局どころかどんなに頭の柔らかい人に話しても信じてもらえない気がした。

そもそも相手はTit anなのだから話を信じてもらう以前に、

聞いてもらえないし言葉は通じない。

ならば蜂の巣にされない為にはどうすればいい。実際にやってもいない虐殺の犯人とされて殺されるなどという理不尽を被らないにはどうすればいい。そうそれは力ある者から己の命を守るには、生き延びるには、他者の力を借りるしかない、現実的な話。

彼にとって都合なことには、バチャリルという男が何か知らないが馬鹿だしこっちの味方をしてくれているということ。しかもそのバチャリルという男、身のこなしが何処となく鋭そうで、さつきからシャアリを背負い続けているにも関わらず息一つ乱していない。ホルシユは彼を頼りにする他ない。もはや。彼がティという女を説得して、さらに、その鋭そうな身のこなしで忍者のごとく自分のことも担いでもらって倉庫の天井を貫いて月夜に姿を消してもらうとかしてもらいたい。そんなあり得なさそうな解決策しか思いつかない程度にひどく絶望的な現状だ。

「あ、きつと死ぬ」

ホルシユから悟ったかのように無たる心境でぼやんと一言が出た。それを聞いたティが呆気ない言葉を返す。

「十中八九」

あまりにも簡潔な調子でそんなことを言うものだから余計に重たい空気が蔓延した。

静寂が再び広がったが、そこをバチャリルがフォローする。

「ティ姉。ここは彼のことを助けるべきだよ。彼に何がここで起きたのか教えてもらわないとスッキリしないし、彼が盗んだと思われるPlutoの場所だつて見当がつかなくなる」

ティはしかし首を横に振った。

「たしかにそれらは気になること。しかし、彼を助けながらTitianのリーダーと砲撃の網を切り抜けるというのは難しい。無理をして死んだら元も子も無い。それはお前も思うことだろう？」

「……………」

今度はバチャリルが黙る番だった。

ホルシユは心の中でもつと反論するんだとバチャリルを応援するが、彼は黙り込んでしまった。

嫌な予感がする。

しばらくバチャリルは顔を俯かせて考え事をしていたが、その思考がまとまったのだから顔を見ると、一度ホルシユのことを見たがすぐに顔を反らした。

ホルシユの嫌な予感が強まる。

バチャリルはホルシユの顔を見ないまま、小さな小さな声で呟いた。ホルシユの耳にぎりぎり届いたそれは、彼に絶望を伝えた。

「弟さん。この人のことは僕に任せてください。すみません……」

何がすみませんだ。謝るな。任せるつもりはない。君は彼女がゴムボールとコルク栓がないと起きることがないことだとか、働かないことだとか、麦茶ばかり飲んでることだとか、知らないだろう。名前さえ知らないで顔が可愛かったからって結婚したくなっちゃう馬鹿の君が、一体何を一人前の口を聞いているのだね馬鹿。馬鹿とか言つてごめん、助けてください。

ああしかし無情。

バチャリルとティは示し合わせたように頷き合つと、まるで風のような軽快さで駆け出して、あつ、とホルシユが叫んだ頃にはその二人の足音とシャアリの後姿は、闇に紛れてしまったのだった。

ホルシユはひとりになってしまった。

今から蜂の巣にされるのは確定的。

断首台に乗せられて時間を待つ死刑囚のように。

ホルシユは夜の闇の中、血のむせるような匂い続く倉庫で、ひとりぼっち。

キヤタピラの音がようやくホルシユの耳にも聞こえるようになってきた。

それすなわち、死への秒読みが始まったということ。

彼は立ち尽くす。手足を小刻みに震わしながら。

h u r a g u

アング・ラ・ノノ・エ・デンデンに硝煙が漂っている。むせる匂いが蔓延している。だがそれでも、白い人型機械は片膝を地面に付くことをしない。

両の足で儼然と立っているその姿に、ヘンバンスは次第に圧倒されてしまっていた。

もう嫌になった。爆破するのが嫌になった。爆薬だってただじゃないのだ。金がかかるのだ。

そこで彼女は奮起してロケットを買った。安物だけど、馬力のあるロケット一本。

それを宇宙妖怪たちに手伝わってもらいながら、Plutoに縛り付ける。ついでに太郎をコックピットの中に入れてしまうと、

「お前は脱走したということにするよ。ばいばい、太郎くん」

と汚い作戦。せこい作戦。形の口を閉じたまま、わけもわからずにPlutoのコックピットに入れられた太郎は、狭い空間に入れられてしまって不安気な様子。周囲を忙しなく窺っている。

そのうちに外側からコックピットを閉じられてしまい、コックピット内は暗闇に。太郎は真つ暗闇の中でふるふるると怯えた。狭い空間が太郎は苦手なのだ。

導火線に火が点いて、火花が散っていく。バチバチと。

Plutoの背中に連結されたロケットに火が点いて、そこから一気に爆薬がエネルギーを放出！

ちゅとととととととととととととととと！

凄まじい音と共に、ロケットが火を灯してPlutoを夜に飛び出させた。

太郎を乗せたそれは星になったかのごとく、遙か彼方にまで吹き飛んだ。

どこにいくのだろう。Pluto。太郎。

花火を打ち上げた後の人のように職人氣質な渋い表情をしている
ヘンバンスは、口笛を吹いた。
ひゅう。

随分と心地良い音をたてた口笛。

H a t r e d i s s l a u g h t e r e d !

頭を抱えて体育座りをしている男がいる。

なるべく己を暗闇と同化させるためであろう、すごく身体を縮こ
まらせている。

今は静まり返っている惨劇の後の倉庫。蠅や蛆が亡骸にたかり出
したその場所で、キヤタピラが再び鳴り響く時が、いまにも訪れる
のではないかと男は恐怖している。

沈黙。

わずか数分前までは死刑宣告のごとくにキヤタピラが音を鳴らし
ていた。男を地獄の門の前に立たせる四方八方からの反響がりりり
りりりりりりりりり。それがずつと彼を苦しませていたにも関わら
ず、今は嵐の前の静けさ。

もしかすると次の瞬間には砲弾の雨嵐が彼に襲い掛かってくるか
もしれない。

彼がふとまばたきをした時に、それが彼の最期のまばたきになる
やもしれない。

脳味噌の奥で、かつて友人がT i t a nに殺された時のことを思
い起こしてみても、そんなことをしてる間に自分が四肢をちぎられ
るかもしれない。血の海の一部になるのかもしれない。

ああ無情。

彼 ホルシュの全身はかつてない程の緊張に包まれている。

さっきまでは少し暖かいくらいだったのに、今は小刻みに震えて
しまつくらい寒さを感じる。

北の大陸に出向いたかのように。唇が紫になつたような気がする
程に。

ガリリリリリリリリりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
リリリリリリリリリリリリリりりりりりりりりりりりりりりりりりり
rr
ガ

リリリ r
ツリリリリ ツリリリ ツリリリ リリリリリリリリリリリリ

音が再開された。死への秒読み。

ホルシユの耳に聞こえる。うるさい音。死の音。

死にたくはない。

大変な毎日だけど、死にたくない。

生きたい。死ぬより、生きていたい。

そう感じた。そう願う。

だからホルシユは体育座りを止めて、立ち上がった。

両の足で立ち、両手を上げて地面と水平に。

まるで自ら十字架に磔にされたように。音が迫ってくるのに。

音は大きくなつて倉庫のあちこちを走り回つて乱雑な雑音として変質していく。それらが幾重にも重なつて違った音同士が重なり合つたり、反発しあつたりすることによつて、まつたく形の整つていない響きとして十字架に磔となつたホルシユに入り込む。入り込んだ音は彼の内臓にまで届いてから、また何処かに反射したり吸収されたりするが、乱雑なる響きは形を変えながらも消えることなく倉庫や、ホルシユの耳、血のたまり、誰もいない暗がり。

そういう所に音はがりりりりりりりりりりりりりりりりり。

T i t a n の数は十二機。砲門の数は、九十六。

ガトリング砲の雨嵐。その準備は整つているだろう。

もうホルシユは震えていない。十字架そのものとなつたように、十字の形で固まつたまま動かず、喋らず、呼吸だけをしている。目は、暗闇に注がれたままで。

いや、一語だけ、呟いた。

「死」

これだけ呟いて、後は口を閉じている。悟りを開いたかのように無表情でホルシユはティになつたかのように。無の境地。ならば後は時を待つだけだ。生きていたい。だけど、これがもつとも最善たる待ち方だった。死へと己から近づいていく他、生き残る手段が無い

ようにホルシュには思えた。

極限の状態だからこそ、そう感じた。

Titannの青光りする両眼が、暗闇の中で浮き上がっていた。その数は当然、二十四。まるで夜に飛ぶ発光虫のように、青い点灯が。

囲まれている。それがわかる。砲弾を放たれば、跡形もなしに肉片が弾け飛ぶだろうと思える。二十四の青い眼光が、左右に動かなくなり、それぞれが一点で止まった。

狙いがついたということだった。ホルシュに十二機が照準を合わせたということだった。

The weakness is sad.

Titannが対象を殺す直前に発する機械音声の言葉。これは抹殺直前に発される宣言。弱いことを悲しめ、と、強者が弱者を惨めだとみなしている態度が表われている。

もうホルシュは十字架のまま動かない。ガトリング砲が発射、されるその直前のことである。

……どどどどどどどどどど。

キャタピラ音とは別のやかましい音が近づいてくる。そして、どっかーんっ！

大きな音を経て倉庫の丁度、蠅や蛆が集まっていた人の亡骸集まる所に、落ちてきた。

汚らしい所に落ちたにも関わらず、それはその穢れをまったく受け付けない。白い外装のまま地面に突き刺さっていて、両足だけが飛び出ている。顔や上半身などは、上から落ちてきたその勢いで地面にぶっ刺さってしまったている。

なさない様。

Titannたちは抹殺の宣言をしたにも関わらず、状況の把握のために標的の補足を中止しなければならなくなった。青白い眼光が忙しなく宙を彷徨い出す。

惨めな様子で地面に突き刺さっている人の形をした機械。

状況が突如転じたことで十字架になるのをやめたホルシユは、地面に足だけ飛び出させてぶっ刺さっているそれがPlutoであると気が付くまでに、だいふ時間がかった。

しかし気が付くことが出来た。

しかもTitanたちが再びホルシユに照準を合わせる前に気が付いた。

これが功だった。

ホルシユに湧いた希望。そして作戦。人型機械Plutoの内部に侵入してそれを操縦、Titan十二機の包囲網をPlutoの機動力をもつてして突破。そしてらアング・ラ・ノノ・エ・デンデデンあたりに逃げ込めば、何とかこの危機的状況から脱し、命を失わずに済む。

となればTitanのように状況を窺っている場合ではない。

彼は走り出した。全力で、途中転びそうになりつつ。

しかしTitanのAIも馬鹿じゃない。標的が加速して移動を始めたことに反応した数機がガトリング砲の砲撃を、照準が合わさっていない状態にも関わらず、地面にアンカーを発射して自機を固定させると、構わずにぶち放った。

口径30mmから次々に発射される機関砲弾。暗闇の中を一方方向のベクトルに直進する。

照準が合っていない状況のおかげで、それがホルシユを肉塊に変えたりはしなかったが。

ただ地面や壁に突き刺さり、跳ね返り、弾き飛ばし、破壊していく。

それによって発生した鉄やコンクリの破片が、尖った形となってホルシユに飛ぶ。

無我夢中のホルシユに容赦なく。

彼のふくらはぎに大きめの破片が、突き刺さった。

「あぐあー！」

後少しで辿り着けたというのに。

ホルシユは倒れてしまい、ふくらはぎから全身に回っていく血流が沸騰するかのような熱、痛み、気持ち悪さ、に追い込まれる。

それに加えて、丁度蠅や蛆のたかっている血のたまりに転んでしまったことで、凄まじい異臭と暗闇越しでもわかる虫たちの蠢き。

この血のたまりに身を預けていると死へ手招きされるような錯覚があつて不気味だ。血の底に沈められて自らも蠅や蛆にたかられて肉を食われてしまうかのような怖さ。

血のたまりに顔を沈ませないために、宙を見上げる。

Pluto。

やるせない心持ちで見上げたそこには、人一人よりも大きな掌が。ホルシユに手が差し伸べられていた。

黒い掌が彼のすぐ目前に、あつた。

凄まじい勢いで上半身全てを地面に突き刺してしまっていたにも関わらず、何時の間にか抜け出していて、今Plutoは彼の前で片膝を付きながら手を差し伸ばしてくれていた。いや、血のたまりに沈みそうになっている彼の身体を掬い取って、鳩尾部分のコックピットにまで運んでみせるということまで、やってのけたのだ。

コックピット内に入ったホルシユは、太郎の姿を見る。(なんでおまえが)。

思った所でまさかこいつが助けに来てくれたのか、俺の危機を宇怪の能力か何かで察知して、このPlutoを操縦してやってきてくれたのかと気が付く。

少し感動して頬が緩みそうになったが、全身に張っている不快感がそれをさせない。ホルシユの表情は苦悶に満ちている。それを太郎はふるふる小さく震えながら眺めている。

不思議なことが起きた。

青白い光だ。

青と白が混ざっている仄かなる光。コックピット内で座席についたホルシユも、その輝きに包まれる。

光っているのだ。

破片はふくらはぎから抜け落ち、出血は止まり、傷口は塞がる。痛覚。不快感。眩暈。全てが無くなって、穏やかな心持ちに包まれる。

「太郎がやったのか……？ それとも、この機械が………ああ………」

コックピット内の青白い光が充満するに連れて居心地が良くなって。

とろけていく。

身体がその狭い空間の、空気や、機器らしきそれや、自分の衣服や、背後にいる太郎や、全てが混ざり合っでとろけていつて、機械の一部と化していく。自身が機器の一部分、パーツに変わっているのだとわかる。心ごと全部、青白い中に放り込まれて。

意識がザーツ、ザー、と乱れていたがやがて整ってくる。すると、Plutoの両眼から景色を見渡していた。ホルシユの両眼はPlutoの両眼で、だから高い所からTitanを見下ろすことができる、その爽快。来ていた。上の連中を見下ろすことのできる、その爽快。

自分Plutoに力が漲ってきていることがわかる。ホルシユの全身に張り付いているその衝動。今までよりずっと速く跳べる。これまでより強く力を込めることもできる。

Titanを壊すことの出来る力。奴らを壊滅させることのできる復讐の暴力。

これがあれば。Plutoという力と己を交わらせるだけで、世界というものが広く澄み渡っているものだと感じれる。高慢な鼻息を垂らす連中の象徴の一つである蟹型機械の装甲を、頭上から叩き潰せるならそれ以上に嬉しいことはない。

「Hatred is slaughter!」

H a d e s

P l u t o は純白の外観を掌から変貌させていく。黒掌から、黒が白を侵食するようにして外観が白から黒へという極端な変化をしていく。掌から腕へ、アームバが増殖していくかのように凄まじい速度で、ボディが剥げていくかのようにでもあるが、実際には色が変色しているだけだ。腕から胸部へ、胸部から頭や下半身へ。血走っているかのように赤色をしていた関節部分は、青色に変わった。ボディが黒で、関節部分が青。極端な色彩の変化をしてみせたその人型機械には、ホルシユの意識が乗っかっている。宇宙妖怪の太郎も乗っているはずだが、その者には意識というものが無いのだろうか、乗っている意識はホルシユの物だけであった。

『I・m H a d e s』ホルシユの意識に文字が浮かんでいる。なるほど、と彼はこの機体は今P l u t o ではなくH a d e s なのだ、と自分の感情ではないみたいに恐ろしい、凄まじい高揚感が底より昇り上がってくることを歡ぶ。

P l u t o = H a d e s . そして自分はその意識。

ホルシユ = H a d e s は手の指先にまで神経が通っているかを、親指から小指まで順番にそれを動かしてみることを確認する。滞りなく神経は通っていて、滑らかに指は動く。H a d e s はその滑らかな指の動きを眺めるだけで、より気分を高揚させて、「I・m r e a d y」と機械音を発する。

その後、

跳躍。

T i t a n は人間を殺すことに長けている。人間を殺すためのマシーンであるため、上空に標的がいることを想定しない。よって対空能力は著しく低い。H a d e s はそのことを知っている。

故に、上空から攻め込めば容易にT i t a n を潰せるとわかっている。

ゆえに跳躍。

倉庫の天井を吹き飛ばして夜空に抜け出ると、熱源を探知できるセンサーアイ眼で十二機それぞれがどの位置にいるのか把握。丁度、円の形を描くようにしている連中の一機、もっとも近い位置にたまたまあったそれに標的をつけると、背部に取り付けられているアクセラレーター加速装置で自らの上空位置を調節。標的をつけたTitanの、真上にて滞空した後、重力に引つ張られることによって己を落下させる。

ある程度の位置にまで降下した自身を途中でアクセラレーター加速装置を使って回転させる。くるつと空中で回転。それによって勢いをつけた状態でやることはただ一つ、その勢いが失われる前に、踵落とし。一撃玉砕。

一度も敗北を味わったことのないTitan。人間によって作られ人間を虐殺し続けてきたその禍々しい蟹型機械が初めて破壊されて凄まじい爆発を発生させた。そして爆風と煙。

まだ生存しているTitan十一機たちは混乱する。『friendly lost』。まるで予測していなかった事態の発生と、爆発によって視界が悪化したことにより一瞬だけしか補足できなかった標的。爆発がおさまって燃え移った火がちりちりとそこら辺で残り火になっている時には、再び標的は姿を消していた。Targetのロスト。

Titanは上空を探らない。敵は地上にいるものとしてプログラミングされているから、上空に敵がいるということを考えることが出来ない。

上層という連中は地下街の人間を小馬鹿にしている。だからそんな雑なプログラミングをしてもそれを修正せずに来たのだ。

黒光りしている装甲の上半分を特に頑丈に作っているから、上空からバズーカをぶち込まれても破壊されないが故に生まれている高慢でもあったのだが。

だがその上空からの攻撃には強いはずの装甲も、踵落としの一撃でひしゃげられ、爆発してしまったのが、今先ほど起きた現実だ。

嫌な音を経て、衝撃と共に鉄塊と化した friend。

残された十一機は連携して地上をしらみつぶしに探した。

サーチ。標的をサーチ。しかし見つからない。

その途中でまた一機が、今度は両足で思いつきり踏みつけられて爆散した。

『 friend lost 』

『 emergency 』

『 danger 』

再度発生した爆風と共に Titan たちの探知速度も高まる。

やはり地上ばかりを探っているから敵機を見つけることが出来ないその内の一機に上空からの肘内。ずごつ、と重苦しい音を経て蟹の装甲は内側にへこみ、エンジン部分に摩擦による出火を発生させ、結果三度目の爆風。風を切り、残り九機となった連中は一瞬サーチに引つかかった標的を撃とうとするが、アンカーを地面に打ち込んで自機を固定させた頃には、既にマリンプルーの残光だけが地上にあつて、黒の Hades を彼らは捉えることが出来ない。

にも関わらず地上をサーチ、探知し続ける Titan たち。上空に一切気がいかないから、鉄の天井を背景にして空に滞空する青い線を発見できない。サーチ。サーチ。地上をサーチ！

そんな Titan に対して鋭い一撃。雷鳴のように素早く轟く一撃、蟹の甲羅は潰されて火が燃え盛ると共に爆風による衝撃。この衝撃のせいで Titan は一瞬だけ地上に降りてくる標的を捉えられない。衝撃のせいで機体が仰け反つてしまったためだ。だが Titan の、もつとも Hades と位置が近かった一機は衝撃が来た上でも、幸運なことに砲撃を発する機会を得た。ちよつと補足できた相手をアンカーを地面に打ち込むこともせずにガトリング砲で狙いを付けて、撃つ、撃つ、撃つ撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃撃。

だがその砲弾が為したことは、倉庫の壁に穴を開けただけ。マリンプルーの残光だけがぼんやりと消えていって、狙いを付けていた空間には暗闇しか残らなくなった。

『target loss:t:』

標的を見失ったことをfriendsに告げようとしたそのTitanの甲羅に重たいボディプレス。

『friend lost』

瞬く間にTitanは八機。

滞空したままその八機を見下ろしているHadesは、圧倒的有利である状況ではあるが、激しい頭痛に悩まされているという謎の負担を強いられていた。

行動をすればする程激しくなっていくその頭痛は、針を表面にくつも刺されていくような、強い苦痛を与えてくる。もつと相手を一機ずつ丹念に壊していきたかったHadesにとっては残念としか言いようが無いが、頭痛のひどさと言ったら耐える耐えられないレベルを遥かに超えている。

「……………Hated is slaughter」

Hadesの両掌に青白い輝きが集束していく。線が幾重にも踊り回ってその後束になっていくその輝きが右と左の掌の両方に。そして掌と掌は合わせられて、一つの雷となる。

濃厚な青となったその雷は一本の槍のようでもある。

Hadesは呪詛のように同じ言葉を呟き続けていて、非常に恐ろしい。頭痛をごまかす為に呟かれているにしても、憎しみを虐殺する、という意味を持つそれが繰返し発されるのでは狂っているとか言い様が無い。狂っているかはともかく、高揚しているのは間違いない。

ずっと圧力を掛けてきていた恐怖たる存在を今ここで、十二機も鉄塊にしてやれるということは、ただでさえ鬱屈とした日々を送ってきたHadesの捻じ曲がっている神経を満足させるには充分たる理由になる。

自らを見下ろし続けてきた連中の武力を、見下ろしたまま壊滅させる。

雷の槍が地上に放たれた。流れ星のような綺麗な直線を描いてそ

の場所に突き刺さり、突き刺さった後に集束されていた線が周辺一帯に放射状に広がっていくと同時に、八機のTitanたちは強力な電力に回路を焼き切られ、機能を停止していく。

『danger』

そんな受動的な反応しかできないまま、沈黙することしか出来ない鉄塊へと変わったのだった。

錯覚？

Hadesが憎しみを全て叩き潰してから数分後。

多くの鉄塊が転がるようになったボロボロの倉庫内にて、黒の外観を持つその機体は掌から色を変えていって、そのほとんどの配色を白に戻し、関節部分だけを赤へと戻した。

Pluto。

ホルシユの意識は、肉体がコックピット内で姿形をはつきりさせていくに伴って、人間としての物へと戻っていた。嬉しいことに頭痛がすっかり止んでいて、しかも破片が突き刺さったふくらはぎは何てことは無い、痕もまったく残っておらず、傷が塞がっている。

ホルシユは、気だるいな、と思う。

そんな中、背後に気配を感じたので振り返ってみると、太郎が呑気そうにそこにいる。なんとなく、頭っばいところを撫でてやる。

「助けに来てくれて感謝。おかげで本当、命拾いした」とか言いながら。太郎はくすぐったそうにもぞもぞと動いてから、その場で微妙に跳ね上がる。可愛らしい仕草だった。ぼんやりしている頭でもそれはわかる。

撫でるのはほどほどに止めてから、コックピット越しに映っている周囲百八十度の景色を確認してみる。

そこには先ほど、自分(Hades)がslaughteredした蟹型機械のその残骸がある。

「すごかったな……」

自分でそれを殺ったことをわかってはいるが、どうにも人の形に戻った上でそれを眺めていると現実味が希薄で、ぼんやりとしている頭では、この後自分がどう行動していけば良いのか、変わらぬ生活をしていっていいのだろうか、と考えてみようとするが上手く回転せず思考できない。

俺を人柱にしたテイの前で幽霊かと思わせるような登場をして驚

かせてやるつか、と多少どうでもいいことをぼやんと考えながら、とりあえずアング・ラ・ノノ・エ・デンデデンにお邪魔しちゃうかな、と思う。

とりあえずPierroを動かせるのかわからないけど、やってみよう、とばかりに適当にそれっぽい機器をいじくってみる。さつきみたいに自分が機械自体になれば楽なのだろうけれど、どうすればそうなるのかわからないし、真っ黒くなって激しい頭痛に襲われるくらいなら多少不自由でも手で操縦した方が心地良い。

ホルシユはそう思ったのでいろいろと試してみる。

案外、素人でもいじれる簡素な設計らしく、倉庫内で前後左右に動かしてみたり加速装置アクセラレーターを稼働させてみたりしていると、体感的に操作方法が理解できてきた。

「すごい。いけるわこれ」

操縦系統を作ったヒートの才能がすごいのか、それとも機械をいじることに関して秘められた才能が俺にはあったのか。後者ならいいなあ。

きっと前者なのだろうな、と簡素な操縦方法に感謝してからホルシユは加速装置アクセラレーターを踏んで機体を上昇させ、倉庫の天井にもう一つ穴を開けてから、夜空に飛び出した。

鉄の天井は相変わらず無機質に黒い。遙か向こう側に見える星空は月の光を纏ってうつすらとした藍色で安らぎがあるくらいなのに、鉄の空はひたすらに無骨。

（さっきの状態になれば鉄の天井も難なく壊せるのかもな）

そう思うが、それは迂闊にやってはいけないことだとはさすがにわかるし、今の時点でも大変なことになってしまったような予感はある。たださっきの状況では自分が生き延びることに必死で後先なんて考えられるはずもない。今、生きてるだけでも奇跡だ……。

「お前もそう思うだろ？」

ホルシユは後ろにいる太郎に振り返らないまま、独り言のように呟くが当然太郎は返事をしない。背後でもぞもぞ言っている微かな

だが、たしかにそこに見えている。やがて青白い星は、点からゆつたりと膨張していき一つの形へと変貌を遂げ、ホルシユは青白い光に包まれている少年と少女の輝きを目撃した。手を繋いで、ホルシユに向けて手を振っている。彼は手を振り返すことも出来ない。束縛はまだ止まず、胸奥と鼓膜を締め付けるノイズは永遠に金縛りを解かないかのよう。

血管の浮いた怪物と見紛うものの血潮

それを拭き取り世に放り

理にまみれ生きることを願って見る

灰色の鉛は天に住まう それを苦し紛れの鉄箱の中で見上げる

嘆きが聞こえる 遠くから 耳元から 脳天を突き刺すんだ

聞こえるかこれが 喉奥から湧き上がるような嘔吐だ 刻んでいる音階

ああああああああああああああああああああああああ

想像するんだ 血管の中に濁りながら入ってくるようなこの発音を

脳髓に染み込ませるんだ お前の位置を忘れさせてくれる子守唄

だとか 凱旋かその鉛を

想像するんだ 血管の中に濁りながら入ってくるようなこの発音を

ああああああああああああ あああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああああああ あ

あああ ああああ ああああああああ ああああああああああ

あ あああ

聞こえる。Plutoのコックピット内を跳ね回り廻ってその歌が聞こえる。ホルシユの両耳にノイズとしてやかましくゴミ箱からの悪臭よりもむせる匂いを踊らせて聞こえる。

男の子と女の子は手を握り合って、こちらに手を振って。呼んでいる。何をするつもりなのか。

夜空に湧いた全ての青白い点たちが、歌と共に膨張していきそして全てが男の子と女の子になっていく。どれもが青白い光に包まれていて、どれもが同じ顔をしていて、同じように手を繋ぎ合っていて、同じように手を振っている。歌は終わらない。脳髄を突き抜ける音波。その物悲しくもあり神聖でもあるような、しかし聞きようによっては狂気とも受け取れる音階は終わらない。

何か不吉な予感がホルシユに走る。背筋に奇妙な違和。背後には何ともなさそうな顔をしている太郎しかないが、しかしその違和感は強くホルシユに宿る。

不安感。凄まじいほどの不安。違和感はやがてネガティブな感情として背筋をびく、びくと更に強張らせる。金縛りのこととも相まって、身体がいろいろとおかしな方向に痙攣していて格好がひどくださいものになっているとわかるが、どうしようもない。

両眼で見えるもの。そうあれは子供たちだ。

だけどホルシユにとってのその子供たちが姿形をまた変えていく星だったものが子供になり、次は何になるのか、と知っている彼の前に現れたそれ。それは、小学校教諭。中田〃ヒート〃G。そして不弥生〃ティ〃V。男の子はヒートになり、女の子はティになっていた。錯覚だとはわかる。本人たちではないとはわかる。ヒートは死んだはずだし、ティが空を飛んでいるわけではないし、青白い光に包まれているのが人間のはずは無い。

(何…を……)

刀身の長い銀色に輝く刃を持っているティ。

過ぎたこと 袈裟斬りにされて

まさかそうということだとは、夢にも思わなかった。

青白い発光をしているティ。彼女が両手に持っている銀色の刃が、中田「ヒート」Gに対して振り下ろされる。右上から左下に。

袈裟斬りにされたヒートの筋肉質な身体に斜めの線が綺麗なほどにスツと入ると、上半身と下半身に彼の身体が分離した。その裂け目から水に溶けた血のようなものがぬったりと溢れ出てきて、煙のように宙を舞い上がっていく。

薄暗い蘇芳色の煙となって大気中に混ざり、いずれ見えなくなっていく生命の靄。

そして上半身だけとなったヒートが死んでいるはずなのに会話を始めた。

ヒートとティの会話は、外で行われているにも関わらず、脳味噌にこびりつくようにホルシュに鮮明に聞こえてくる。”あああ”と混ざりながらも、その内容はハッキリとわかるのだった。

「意外と早かったな」

「そんな奇天烈な踊りをしているのは、許しを請うているつもりですか？」

「はは。ティ相手にそんなことが望めないことはわかっている。死ぬ前に一踊りしたかっただけさ」

「あなたは今から私に袈裟切りにされた後、無惨たる様になってこの空き地に放置される。あなたがPlutoのonlyに設定した男をそれで誘き出す。なるべくひどい様にした方がショックも大きいはずです。Plutoが置かれている場所を張り込みして、それでその男が姿を現せばそれで終わりです。残念でしたね」

「別に残念なんかじゃないさ。その男をお前等は殺すことはできない。Plutoのonlyを変更するためにはその男の生きている状態の指紋が必要になるのだから。殺してみる。お前らが汗水垂

『人は笑いながら死ぬということですか。それも悪くはありませんね』

『……知ったようなことを言うな』

『すみません』

『謝るのはおかしい』

『おかしいですね』

『なあ』

『はい。どうしましたか』

『頼みがある』

『はい、なんででしょう』

『もしお前がonlyの男を見つけた時には』

『見つけるでしょうね』

『巻き込んですまないよ、と伝えてくれ』

『伝えておきましょう』

『それと』

『それと、何でしょう?』

『なるべく痛くないように、優しく斬ってくれ』

『優しく斬ったら痛いですよ』

『じゃあ強く斬ってくれ』

『勢いを付けて死んだのもわからないほどの速度で斬って差し上げ

ましょう』

『怖いな、ティは』

『性格でしょうね。他にはありませんか? 裏切りの罪の罰を、そ

ろそろ執り行なっても?』

『ああ。…充分だ。罪を犯せば、罰を受けるのは当然だ』

『……』

『子供達にこれを見せた時、眼がきらきらと輝いていた。俺の力だけじゃ、このPlutoは作ることが出来なかった。資金が足りなかったからな。その資金だけを利用して、最後には兵器として使わせないようonlyを設定したんだ。お前達にとっては、俺は重罪

人だな」

『ええ。その通りです。では、覚悟を』

『ああ』

『せめて子供達が悲しまないよう、死体をあなただとわからないくらい滅茶苦茶にしてあげましょう』

『それは優しさじゃないよ。むごいだけだよ』

『私にとっては優しさです。では、さようなら』

会話はそこで途絶えて、上半身だけのヒートは男の子に戻り、女の子はティへと戻る。

明らかに過去にあった出来事が、男の子と女の子によって再現されていた。

その男の子と女の子は、全員が口を揃えて。

「喰わせて」「

とまるで良い情報を与えたのだから報酬として身体を下さいと言っているがごとくに、言った。間違いなくそう言っている。

そして口裂け女のように口が大きく横に開き、まばたきをする間にPlutoのコックピットに急接近してくる。殺される、と思っただが青白い光は途中で輝きを失っていき、男の子と女の子の恐ろしい顔は、暗闇の中に溶けて、結局、消えていたのだった。

耳をつんざいていたノイズ、”あああ”もそれに伴って止まり、Plutoの内部は静寂を取り戻した。

ふと背後に振り返ってみると、何事もなかったかのように 形の口でぼりぼりしている太郎。

夜空には鉄の天井と、明かりの少ない街並み。青白い光はもう無い。

騒動は通り過ぎていったようだった。

(何だったんだよ本当に！ めちゃくちゃだ)

ホルシユはため息をついてから、Plutoの加速装置と操縦桿

を使って夜空に行くのを再開するが、どうにもさっきの会話だとか恐ろしい顔つきだとかがチラチラ脳裏で思い起こされて、落ち着かず、鳥肌がおさまらない。

というかホルシユはひどく消耗していた。

それはそうだろう。ラーメンを食った後に寝ゲロさせられたり、Hadesとして上空と地上を行ったり来たりしたり、鼓膜をつんざく不気味な音だか声だかを聞かされたり、さらには口が裂けた男の子と女の子に喰われそうになったのだ。

その消耗の具合は彼本人が思っているよりも凄まじい。

操縦桿と加速装置を、何時から彼は手離していただろうか。

気絶。操縦者は気絶。

当然、Plutoはアング・ラ・ノノ・エ・デンデンに辿り着くことはなく、高度を下げていきついに地上へと落下。最近、地下街の中で栄えてきた耕土の、畑に、足から突っ込んで下半身を地中に埋めてしまった。

ヤマザキとスガス　そして殺意

ある朝、最近いろいろな事が上手くいっている男性、崎山＝ヤマザキ＝Ｙが目を覚ました。

いろいろ上手くいっているおかげで調子が良い。以前は寝覚めが悪かったのに、最近はすぐにベットから身体を下ろすことが出来るし、口の中がひどくべたべたしていたり胃酸がひどくて朝飯に口を付けられなかったりということが無くなり、だるくない。

「朝ごはん、できてるよ」

三ヶ月前に知り合ったばかりだというのに、トントン拍子で親密な仲になり結婚までしちゃった妻の声。階下より呼ばれたヤマザキは、眠っている間に空いた腹を摩りながら階段を降りる。

食卓には白いご飯、ロールキャベツ、味噌汁、焼き魚。ヤマザキの胃がぐるると音を経て食欲をそそる匂いに導かれて、椅子に座る。彼の妻がにこにこ機嫌の良さそうな顔で、

「おはよう。今日もいい一日になるといいですね」

ヤマザキはにやにやと嬉しそうな顔をしながら返事をする。

「おはよう。いやー、今日もすこぶる良い気分だね。最近の僕は流れが良い。星の巡りとかがいんだろうねきつと。おそらく朝のニュース番組とかでやる占いの奴とかでも一位になってたりするんじゃないの？　もしくは二位あたり」

陽気で騒がしい調子である。ご機嫌なヤマザキ。

リモコンでテレビを点けてニュース番組のやっているチャンネルに変えるヤマザキ。

占いが丁度やっている。名前占い。ヤマザキだから『や』が気になる。朝ですよ起きましょー、って感じの朝っぱい爽やかBGMが垂れ流されている訳なのだが、そんなBGMの爽やかさなんてどうでも良いので順位が気になっていると何時になっても『や』が出てこない。

そして残されたのは一位とビリ。どっちだろうか、いや俺は最近調子が良いからビリなんてことはあり得ない一位に決まっていると念じる。いや、ビリであった所で世の中にはたくさん『や』がいるのだ、別にビリだったからと言って俺の運勢がすこぶる悪くなるわけではない、いやでもどうせなら一位であってくれると今日も上機嫌で一日をやっつけていけるのだけだな。

と思っっている彼の眼前に叩き出た。

『や』……今日の残念さんッ！ これまでの楽しい生活全てが叩き壊されるような圧倒的恐怖を味合わされた後に再起不能な止めの一撃を被って平常心ではいられなくなっただけで気が狂ってしまうでしょう！ ラッキーアイテムは……無し！

手に持った箸をぼろりと落としてしまった。

あまりにもひどい。あまりにもごくない？

なんなのがこの占いは。全国の『や』の人からクレームが届くでしょうこれ。爽やかなBGMが隠れた陰謀の正体であるような錯覚を覚えさせられるほどに、このニュース番組に対して俺は殺意を覚えた。ぐおおおおお、と叫びたい衝動を抑えながらも、妻の面前だ、恥を晒すわけにはいかない、さあ味噌汁を啜ろうとお椀を手にとったその時。ヤマザキに衝撃走る。

(っ、冷たい、だっ………冷蔵庫に冷やしてあったがごとくに、冷たい……だっ……)

味噌汁が入っているお椀が、氷を入れているコップのように冷たい。

指に走ったその冷氣と共に、冷や汗が全身に走る。なんだこれ、どういふ状況だこれ、と強張ってくる背筋。額からたらたらと汗が流れ落ちる。手が震える。しかし震えが止まらない。

妻の方に顔を向けてみる。

するとそこには、さっきまでは笑顔だったのにすっかり冷めた顔をしている彼女がいて。

フライパンとお鍋の蓋を持って、胡座を掻いて瞑想みたいなこと

をしているのだった。

「な、何を冗談やっちゃってんの…。こ、これ、味噌汁めっちゃ冷たいんだけどこれどうしたことなのこれ、びっくりですよー！ そしてどういう格好なんだよそれ」

しかし彼女は何も答えない。目は開いている。さっきまでの明るい空気が嘘のよう。幸せな夫妻って感じの雰囲気は幻だったのだろうか、とヤマザキは涙がちよちよ切れそうになる。

訳がわからない。今まで絶好調だったのに！

ヤマザキは、幸福の日々が終わりを告げてしまったかのような予感に襲われる。

『耕土』プロジェクトが軌道に乗ってお金をたくさん儲けることが出来てこれからも耕土は発展していくに違いないから俺の人生薔薇色、とか思ってたのに。借金というリスクを背負いながら『耕土』プロジェクトを信じ続けてきたから、こうして耕土が流行り出してくれてプロジェクトに初期から参加していた俺はその儲けをがっばがっばでたままない毎日。嫁さんもGETして、マイホームという奴も購入できた。豪邸。

そうやって今浮かれているのは借金というリスクを背負った上で成功したからなのに。

浮かれちゃだめだったんでしょか。その報い？

（まさか俺がそこら中のキャバクラで女の子と遊び回って、金に物を言わせてそういう女の子と散々にいちゃいちゃしてきたのがバレたから妻は冷蔵庫で冷やした味噌汁を朝飯として出してきたのだろうか。たしかにいちゃいちゃしたのは悪かったかもしれない。だが、楽しかったんだ！ めちゃくちゃ盛り上がったんだ、調子付いちゃったんだ。許してくれよう。許してくれよう）

ヤマザキは心の中で一人勝手に懺悔した後、ぎんぎんに冷やしていた全ての朝食を頑張って平らげたのであった。食べ終わる頃には腹を壊していた。朝からひどい下痢便をしなければならなかったのである。

昼頃まで調子の悪い腹と格闘を続けたヤマザキは、ひどくげっそりしていて体重が五キロくらい減ったとしても不思議じゃない様。しかし畑に出て作業をしなくては野菜が虫に食われてしまう。耕土キヤベツが。

下痢をしている場合ではない、と己に言い聞かせて便器から尻を上げたヤマザキは、脱水症状に近い状態になりながらも必死、靴を履いて玄関から外に出ると、鉄の空の下に出る。

そして畑の方へと歩いていく。と。

近所に住んでいる同業の春日「スガス」Aがどっすんどっすんと近づいてきて、

「ヤマザキさんの畑、大変なことになってますよ」

と人指し指を宙に突き出しながらふんぞり返った姿勢で言うのだ。つた。

スガスは長話が好きなので、こんな時に面倒な奴に出会っちゃまった、とヤマザキは片手で尻を密かに抑えながら、早くこいつどっか行ってくれ、と思う。だが、ふと、ヤマザキは今スガスが言ったことを脳内でもう一度再生させてみる。

『ヤマザキさんの畑、大変なことになってますよ』

占いの結果が現実のものとして現れたのか。

嫁に冷や飯を食わされ、下痢で半日苦しめられ、止めの一撃のごとくに、今まで苦勞して育ててきた畑が大変なことになってしまったと言われたその現実。

「ありえんていー！」

叫びながらヤマザキは駆け出した。脇目も振らず、自らの畑に一直線。

息を切らして。精一杯な速度で。道を駆け抜けて、数年かけてようやく商売として形になってきた耕土プロジェクトの、要である手塩にかけてきたキヤベツ畑へ。

「あ……ああ……」

もしかしたらさっきスガスが言ったことは嘘で（彼は冗談好きだ

から)、キャベツ畑には何らの支障もなく、いつも通りにたわわと葉を成長させている現実があるかもしれないのだ、というヤマザキの希望、願望、は彼の目の前で見事に打ち砕かれた。彼は頭を抱えてもう一度叫ぶ。

「ありえんていー!」

隕石が墜落したかのような巨大なクレーター。月面かつ、と問いたくなる穴ばこ。

キャベツ畑は見事なほどに全滅していた。なんか知らんが。

ヤマザキは死のうかな、と思いつながらしばらくその畑を眺めていた。

何時の間に行ったのか、その背中に彼の妻が声を掛ける。

「鬱憤晴らしをしに行きましょう。私達オシマイよ」

「どこに鬱憤を晴らしにいって言うんだよ。ありえんていー!」

「落ち着いて夫。どうせ借金地獄に追われて死んでしまうのなら、その前に上の連中に復讐をしてからでいいじゃない。それからTitanにぶち抜かれて死ねばいいのよ。その方がドラマチックな死に方だと思わない?」

「……え。……随分と過激じゃね? それ? ま、案外、悪くないかな。あ、下痢でた」

「臭ッ。……じゃあ夜がやってくる前に準備を完了させないとね。包丁とか用意しておくわ。上から落ちてくる連中は丸腰だろうから、軽く殺れるわね」

「憎しみの対象を殺してから、自分たちもその憎しみの対象の眷属に殺される、か。たしかに悪くないかもしれない。ありえるー!」

「多分、ものすごい数の地下街の人間が集まるわよ。みんな鬱憤が高まつてるもの」

「ああ、楽しみだなあ」

「ええ。楽しみでしょ?」

その夫婦は狂気的な微笑みを浮べてから、台無しになった畑をしばらく眺めていた。

その二人の背中を、スガスガ偉そうな姿勢で眺めていたのだった

……

「私の畑は、無事ですよ」

彼の突き出している人指し指の先が、鉄の天井を示している。

見えた

ヘンバンスに何か一言余計なことを言われるかもしれない、と勝手に悪い想像を働かせてはいたのだが、案外なことに彼女はP I u t oと太郎を、快く、再び引き取ってくれた。

「いや、びっくりしましたよ。このロボット、太郎君を乗せてどっかに飛んで行っちゃうんだもの。いやあ、契約違反だっつってあなたに怒られるものと冷や冷やしていたんですけど、そっか、あなたの所に飛んで行っていたんですねえ。恋しくなつたとかそういうことですかね。機械なのに意思でもあるんでしょうか。すごいクオリティーだなあ」

やけに饒舌だったのが怪しくはあつたが、どういう経緯であれP I u t oが飛んできてくれたおかげで命長らえることをさせてもらえた上にT i t a nを破壊できたのだから、ホルシュには彼女を細かく追及する理由などない。もう一度預かってもらえるなら、余計なことを尋ねない方が物事はスムーズに進むに決まっている。

そういうわけで。

「ああ疲れた。帰ったら昼寝しよう。……これからどうなるのか考えるのは、それからだな……」

と、まだ昼になつた頃だというのに目の下の隈がすごい真っ黒なやつれた顔のまま、ホルシュは帰宅していく。(畑を荒らしちゃっただけど大丈夫だろうか。大丈夫じゃないか……)と夜中に気絶したせいで突っ込んだ畑のことを思い出すと、鬱屈が募る。もし自分が突っ込んだのだということがバレたら賠償金とか請求されるのだろうか。最近流行っている耕土の畑に突っ込んだなんて、何て恐ろしいことをしてしまったのだろうか。ていうかたつたの一日で出来事が起こりすぎだろ。

ホルシュはすっかり心身が気だるい。寝たい。

途中、歩行者用信号機が赤で点灯しているにも関わらず、横断歩

道を渡ろうとした。

大きな通りには車が何台も走っているというのに。

「危ねえよ、クズがッ！」

軽トラから顔を出したおっさんにクラクションを鳴らされてから怒鳴られる。

ホルシユはその怒って眉間に皺が寄っている顔をまじまじと眺めるだけで、何の反論もしないまま数歩背後に下がって、そこでようやく自分が信号が赤なのに横断歩道を渡ろうとしていたことに気が付いたのだった。

「やばいなー。そうとうつかれてるなー」

頭の中で太郎が百匹くらいいる。それらの太郎は全て色が違っていて、ある太郎は金色だし、ある太郎はピンク色だ。そして全ての太郎たちがホルシユを眠りの世界に誘おうとしている。つまりそれは夢へと入り込むその入り口の錯覚である。その百匹に気を取られれば、街中で意識を喪失してしまうことになる。地下街という治安の悪い場所で眠ってしまうのは金を取られる恐れがある。

もちろん取られるお金なんてホルシユには無いのだけれど。

そういえばおなかもへってるんだっとな、とホルシユは寝ゲロさせられたことを思い出す。

ティのせいだ。

そういえばヒートを無惨な殺し方をしたのもティだ。

昨夜俺を見捨てる案を真っ先に思いついたのもティだ。

俺からラーメンを吐き出させたのはティだ。ティティティティティティティティ

ホルシユの頭の中で百匹いた色違いの太郎が、色違いのティへと変わっていく。赤色のティ。茶色のティ。どれもが色彩が違うが、間違いなく全てティだ。刀を片手に持ちながら、おいでおいでと手招きしている。この夢に誘われたら、ひどい悪夢を見させられそうだ。百人のティに刀で八つ裂きにされるとか。

そんな夢を見たいと思えるDMでは無い。

ホルシユは悪夢を見たくない。それが意識を現実に止めておくための鎖となった。

これのおかげで道端で倒れることもなく、車に轢かれることもなく、道に迷うこともなく、アパートに帰宅することを達成したのである。

「おかえり。姉ちゃんと兄ちゃんの両方がなかなか帰ってこないから僕は捨てられたのかと思ったけど、そうじゃなかったんだね。はっ、安心したよねー、まったくさあ」

皮肉な微笑みを浮かべている寝間着姿、小さなスーが一日を戦い抜いたホルシユを出迎えたわけだがそれに答える余裕を持ち合わせない程に疲労しているホルシユは、シカトみたいな感じでスーのことを横切って、敷きつ放しの布団に気絶したかのように倒れた。

スーはシカトされたことに怒りを顕し、「んだよっ」とか悪態を付きながらドアを閉めたのだが、部屋の中に戻ってから死んだように眠りこけている兄の姿を見れば、怒りの代わりに啞然と口を開けることにもなる。

「えっ。何、どっか体でも悪いわけ？」

尋ねるが寝息を口から垂れ流すことしかししない兄。

気持ち良さそうな顔をしてはいたから、これは寝かしておいた方がいいのか、と感じる。

スーはそこら辺に腰を下ろしてからちゃぶ台に置かれている薬を取り出し、水と合わせて飲む。

暇なのでテレビを点けてみると、ニュース。

三十代半ばの女性アナウンサーが舌を噛むこともなく原稿を読んでいる。

「55719323番号以下にあたる国民たちの地下送りが本日実行されますが、それにたいして地下街国民たちによる、大規模な逆行行為とも取れる活動が各地で見られ始めています。チップによる解析によりますと、それらの地下街国民には上層指定悪性情緒が強く見られるということで、55719323番号以下の国民には警

告が送られています。それ以上の措置は取られない様子です。地下送りは予定時刻通りに実施されるので、各地で驚きの声があがっています」

映像が切り替わると、明らかにネジが飛んでいると思わしき、修羅な雰囲気垂れ流す連中が行進しているのが見える。各々が凶器を利き手に持っているという、ある意味では地下街に住むものらしい”、地獄の屍のような陰気さで。

スーは思わずちゃぶ台から身を乗り出して、そのLIVE映像を見やる。

一体どこに今まで潜んでいたのだろうか、と思える。鉄の天井に取り付けられている高性能カメラが映すそれは、水の無い下水道を集団で移動している蟻んこのように見える。黒々しく、ちょこまかしく行群は一つの方向へと足を進めており、おそらくその向う先は上層と地下街を繋ぐ巨大エレベーターだろう。そこに待つのはおそらく、凶器など規則で持つことを許されない丸腰の墜落者たち。

墜落者が殺されればTitanは動き始める。Titanが動き出せば行群している人間たちはガトリング砲で穴だらけにされることはまず間違いない。あそこで行群している人間全ては死んでしまおう。地下街に住む人間なら誰でもわかる流れだ。

つまりあれら全てが、命を捨てる覚悟だけはある（いやそれも怪しいけど）、自暴自棄の人間ということになる。上層指定悪性情緒というのはそういうことで、彼らには普段から募っていたどうしようもない、やり場のない、憤り、憎しみ、嫉妬、惨めさ、そういう”負”と呼ばれる感情が集束していたのだろう。その集束が地下送りというトリガーを引かれたことで大爆発を起こしてこのような行群を行うこととなり、上から降りてくる連中を虐殺してから後に、自らも殺されてしまおうという発想に至ったのがあの蟻んこ達だ。

（健康な体の癖に）

スーはそう思う。思ってしまった。

途中嫌になってチャンネルを他に回してみたが、どこの局もこそ

って蟻の集団を映している。

ローカルな局は『突撃！朝ご飯』という番組をやっていた。迷惑な番組だ。

スーはテレビは点けっぱなしにして、冷蔵庫から卵を取り出す。そして御飯があることを確認してから、チャーハンを作ることにする。野菜は無かったが、何も食べないよりはマシだった。

スーが自分の分だけ完成させた所で、ホルシユが匂いに釣られたのだろうか飛び魚のごとくの勢いで起き上がった。そしてスーはチャーハンを彼に奪い取られてしまったのだった。

「ああー！」

「ばくばく」

「ああー！」

「ごちそうさま」

「……………」

ホルシユは食べ終わるやいなや食器を片付けることもせずに二度寝してしまった。

鬼気迫るような様子でチャーハンを食った兄に対して殺意が湧いたが、まあチャーハンなんてすぐ作れるし、と思い直して立ち上がるうとした彼は、一瞬だけテレビ画面に目をやった。

何気なく、なんとなく目をやったただけであったが、そのテレビ画面に映っているものを彼は見逃さなかった。スーは立ち上がるうとした半腰の姿勢のまま硬直。

（今は……………）

信じがたくはあった。しかし彼は半腰のまま動けぬ。眼球で捉えたテレビ画面の向こう側にいた者は、見間違いでないならば……………。彼は時計で時刻を確認する。

現在、PM4:30。

上から55719323以下の人々が堕ちてくるのは、テレビからの情報によればPM8:30。

虐殺が始まるのはPM9:00あたりからだろうか。

どつする。

スーは混乱する。

PM9:00までに。それまでにあの蟻んこの群れの中から、今先ほど間違ひなく映った”両親”を見つけ出せるだろうか。母も父も虚ろな顔をして凶器を持ち、群れの蟻の二匹として進行していたのを、さつきわずかな時間ではあったが、目撃した。出稼ぎに出ていたはずの彼と彼女は、虚ろな目をしてニヤニヤと微笑みを浮かべていた。あのままでは、間違ひなく人殺しをした後にTitánにぶち抜かれる。

殺される。

(間違ひなかった。あれは父さんと母さんだ。絶対そうだった。やばい、どうしよう)

かなり焦りながらもスーは、さっきの場所がどこら辺に位置するのか、今映されている背景からその場所を推測する。

特徴のあるオブジェ(野球ボールとバットを持った少女の像)。

古ぼけたビルが数多く建てられている。街灯もいくつか。

道路だけはやけに広く、そしてよく整備されている。

そこまで見たスーにはわずかな希望が昇った。その場所を知っていた。そこはこのアパートから徒歩二十分ほどで辿り着ける、耕土のおかげで栄えてきた、賑やかな地域。

「兄ちゃん、起きてくれ。やばいんだよ、かなりやばいんだよ」

斬！

夢を見ていた。

自分の股間が突如として膨れ上がると鞆丸ごと破裂して、その中から『大当たり』と書かれた紙が出てくるという夢だ。つまり、自分の鞆丸がくす玉みたいなものだった、ということだ。

衝撃を受けていると、前に死者がいてスパナーダンスを踊っている。

汗を掻きながら、掛け声を出して、熱意溢れるダンス。踊りながら死者はこう告げる。

「起きろ」

やけに厳しい言い方だった。命令口調で、上から威圧的に押し込んでくるような。年だけを取ってしまった自分には何の取り得もないと自虐した人間が怒りを周囲に撒き散らすことで気を紛らわせているような、そういう激しい憤りのある言い方。でもおかしい。ヒートはPiuetoを作るほどの才能を持っている人物だったではないか。

「起きろ」

彼はもう一度それを告げる。

彼程の人物がそう言うのだ。ならば起きなければなるまい。

股間から垂れている『大当たり』という紙を鞆丸の中に閉まっから、パカッとくす玉みたいに分かれてしまっている鞆丸を元に戻すと上を見上げた。

鉄の空がそこには無い。晴れ渡っている空。真っ青な空。映像で見たことのある過去の空。

上と下で分かれる前の……。

「起きなきゃ」

青空を見ていると、何故だかそう思えた。

歪曲が生じて青空は暗転して景色は転じていく。夢と現が入れ替

わっていく。

時刻はPM7:30。陽が落ちて暗くなったそのアパートの一室にはテレビの画面からのバックライトの照射だけがある。電気は付けられていないその部屋には一人の男しかいないわけだが、彼は今日の昼頃から大変な騒ぎが起きていることを、いまだ知らない寝ぼけた男だ。

ホルシユはアザラシのように緩慢な動作で上半身を起こすと、ふと鞆丸をチェックしてみる。いつも通りだったので安心した。

そして何故に部屋の電気がついていないのだ、テレビが点けっぱなしなのだ、と疑問に思う。

テレビに映っているのは三十代半ばと言ったところのアナウンサー。彼女の淀み無い声が入ってくる。

「55719323番号以下の、地下送りとなった国民が地下街国民に殺される危険が生じている問題に関して、上層政府は特に改善策などを示してきませんでした。今入った情報によりますと地下街に降りた人々の命を守るためにエレベーターの扉は開かないということが決定されたそうです。しかし対策はそれのみで、上層政府は55719323以下の国民たちに対して”持久戦を望む。どうかしばらくの間エレベーター内で耐えていて欲しい”という言葉を送るに留めました。これに上層各地から批難の声が上がり、また地下街国民のエレベーター前に集まっている人数は益々増加しているということから、事態の混乱はさらに深まっていくことが予想されています。また、地下街の人間たちをTitannによって殺すことになるのか、という上層政府からの問いに対して、地下管理局はTitannのシステムは自律しているため殺人に関与したと思われる人間をTitannが処理することは変更しようが無いと回答しています。そしてこれが現地の映像です。中継が繋がっております」

映像がLIVEに切り替わる。

そしてホルシユは目を見張ってそのLIVE映像を眺める。

様々な場所に火のようなものが上がっている。上半身裸で何事か

をめちゃくちゃに叫んでいるだけの人間や、むっつりとした殺意を秘めている顔つきで歩いている人。中にはまだ子供だと思える者までいて。食べ歩きしながら空いている手には凶器を持っていたり、中には重たそうに銃を担いでいる者、ロケットランチャーみたいなものを持つている者までいた。凶器を保持しているだけではTitianは動かないから彼らは凶器を隠すことすらしない。

「ひでえ……まるでお祭り騒ぎだ」

何を馬鹿なことをやってんだ、と思う。

上から落ちてくる奴らが憎いのはわからなくもないけど、それを殺したって何かが変わるわけじゃない。それなのにその代わりに命をTitianにくれてやる必要が何処にある？明らかにこれは暴走だ。しかもそれを止める力(Titian)は惨劇が起きた後にしか動かないし、さらなる惨劇を引き起こしさえするのだ。これが今の人間社会の形なのかもしれない。

ホルシユは暗い顔になりながら、立ち上がり、部屋の電気を点ける。暗闇が剥げ、明るくなる屋内。そこで彼は初めて、ちゃぶ台の上に食べ物を食べた後の食器が置いてあることに気が付く。

そういえば、とホルシユは腹をさすってみる。あれだけ寝る前に空腹感があつたのに、今はさほど腹が減っていない。あれ、飯食べたっけ？ ていうか、あれ？ 何かおかしい気がする。

ホルシユはまだ多少寝ぼけていた。

だが眩しさに目が慣れてくるに付して、そう言えば確かに俺は途中起きてチャーハンを平らげたような覚えがある、と思いつく。

じゃあそのチャーハンを作る体力が俺にはあつたか。

と、想像してみようやくスーが作ったのを奪い取つたのだと思いついた。野生の獣のごとくに彼からチャーハンを奪い取り、勢い良く皿上のそれを貪り食つたのだと思いついたのである。

嫌な予感がする。

急ぎ足でスーの布団に近づくと、それをめくり上げる。

もっこりしていた部分には岩が一つ、置かれているだけだった。

そしてそこに貼り紙があったので、ちぎりとって内容を読むと驚かされる。

『父さんと母さんが蟻の群れの中にいました。見つけ出して、連れ戻してきます』

「ありえねえぞ……」

ホルシユは紙を丸めてポケットに突っ込んでから、もう一度LIVE映像に目をやる。そこにあるのは黒々とした人々の渦。こんな所に病弱の十二歳が足を踏み入れるということは、自殺行為をする、ということと同義だ。

ホルシユは先ほどスーがしていたような半腰の姿勢で、先ほどまでスーが立っていたその場所で、テレビの映像を呆然として眺める。スーは今この部屋にはいない”。テレビに映っている火燃え盛る危険地域に、己の足で向っていったのだ……！

どうする。いや、俺もいくしかない。

そう思ったホルシユは蟻の行群が今どの地点を侵攻しているのかを、背景を見ることよって確認する。それによつて大体場所はわかった。走っていけば二十分くらいで辿り着くことができる。急げば虐殺が開始される時間が訪れる前に、両親も含めた三人をこのアパートに連れてこれるかもしれない。

彼は顔を洗つて気合を入れる。よしっ、と言つてからテレビを消そうとリモコンを手取る。

その時に丁度映つた映像。

記者がマイクを使つて様々に喋っているが背後の騒音がやかましく、また記者自体が他の奴らにからまれたりなどして碌にレポートが出来ない。そういう映像の脇。普通なら気にも止めない所に、いた。

見えた。三人が見えた。

スーは両親と手を繋いでいて、そして両親は狂気的な様子で蟻の中を、自らも蟻と化させて歩いている。スーはその二人の間で戸惑っている様子だが、しかし一緒に歩いている。連れ戻すのではな

ったのか。

「……………ん」

しかし良く見てみると、その”両親”。

「おい、まさか……………」

両親ではない。その二人は良く見れば、いや、確かに似てはいるが……………これは……………。

別人だ。

他人の空似。では何故スーはそんな他人と一緒に、手を繋いで行進しているというのか。

話しかけてみるまで他人の空似と気付かなくて、そして成り行きであんなことにでもなってしまったのだろうか。それともスーはただあれを両親だと勘違いしているのだろうか。

どうでもいいが、あの両親に似ている二人は異常な様子に見える。あんな奴らと病気の十二歳が一緒に歩いていて良いはずが無い。くそ。

悪態を脳裏で呟きながらホルシユはテレビを消して、玄関へと駆けて行く。急いでスーを連れ戻さなくては、という焦燥感に駆られながら。（俺はこのアパートで三人で生きていくことを任されてるんだ！ 絶対にあいつを連れ戻す！）

ホルシユは玄関から出てアパートの階段を降り、明らかにいつもとは空気が違う夜の暗闇を、駆け出そうとする。それこそ本当にお祭りの日の夜のように、妙に静まっていて、遠くから騒がしい音が耳に入ってくる。

どういうルートである行群の所に行くか見当をつけてから、ホルシユは走り出す。

だが、彼の足はすぐに止められる。

黒いスーツ姿で姿勢が良い。刀を脇に差しており、艶のある長い黒髪。

ティティティティティティティティティティ。完全にホルシユを待っている状態だったのだと窺える。彼の進む道を遮る位置で、

突っ立っているだけなのに容易に通り返けさせてくれないのだとわかるオーラを携えている。

ホルシユは立ち止まり、

「どげよ」

と言うが彼女はどかず、彼に近寄ってくる。そして、

「時はきましたよ。八城〃ホルシユ〃C」

と相変わらずの無感情で告げたと思つたら、脇に差してある刀の、刀身の銀色を夜空にきらめかせてほとんど見えない速度でスパツ、と一閃。

ぶしゃあと血がすごい勢いでホルシユの斬られたその位置より噴出していく。片腕を持っていかれた。その片腕は夜闇のどこかに転がり落ちて、ホルシユは一瞬だけそれを眺めたが、まるで自分の腕ではないような錯覚が生じた。だが自分の肩から伸びているはずの片腕が無くなっているのだから、その腕は紛れも無く自分の腕。そして激しい痛み。血がぬめぬめと流れ落ちると、噴き出ていくもの。グロテスク。ティ。またやってくれた。

こいつ、邪魔ばかりしやがる。

「ふ、ざけやがって………！」

言いながらホルシユは再び気絶した。

返り血を頬に浴びたティは、それをハンカチで拭き取ってから、昨日と同じように倒れたホルシユを背に担いだ。昨日と違うのはホルシユの片腕が無いことだ。

「少し軽くなりましたね。大丈夫、あなたのことを殺すわけではありませんよ。痛いかもしれませんが、我慢してください」

彼女はお祭り騒ぎの夜を、一人の男を背負ったまま誰よりも素早く駆け抜ける。

アパートの前には斬られた者の片腕と、血のたまりだけが残ったが誰もそれを気に留めることをしないのは、外に出ている者がほとんどいないから。外に出ている者は蟻の行群として街を練り歩いているから。残された片腕は、手をパーの形にして物言わず、ぴくり

とも動かない。

何処か遠くで、爆竹が破裂したような音が、鳴った。
パツン。

切削

準備は整った。

「ことを始めましょう。人は支配されなくてはならないのですから！」

彼女はその墓場で白い光を見ている。

現在PM8:30。上層の地下送りを命じられた連中は予定通りエレベーターによって地下街へと降りたそうだが、その降りた先の巨大扉はまだ開かれていないそうだ。そりゃそうだろう、開いた瞬間に大虐殺が始まって、エレベーターから外に出ることもなく55719323以下にあたる連中は血の海に沈んでしまうのは確定的だ。

さすがに政府もそれは望んでいないから扉は開けないのだろう。

しかし地下送り自体を中止すれば誰もが死なずに今回の騒動は終わっただろうに、何故に地下送りを実施してしまったのか。政府はまだ具体的な発表をしていないが、『それはもう決定されたことであるが故に、中止はあり得ない』という一言で済ますのだろう、と彼女は想像する。

（残念ながら、今の人間社会、政府は腐敗している。いや、腐敗しているのは政府だけではない、人間という種自体が腐敗を取り戻しのつかないところまでできてしまっているのだ）

それは彼女の思想。いや、彼女の父、不弥生ⅡドガースⅤの思想だ。

ドガースは優秀な研究者であると同時に、独自の思想を持った人物でもあった。

そして『Pluto』と、この、墓場にて輝く『白い光』。既にドガースは亡き者であるが、このPlutoと白い光、そしてその姉弟に彼の思想そのものは受け継がれている。ではその思想が為し

上げる具体的行為とは。それは、

『人間を宇宙妖怪という生物の支配下に置かせる』

である。めちやくちなことであつたが、ドガースはそれを実現しようと日々研究を行つていた。しかし、ある日背後からバキヨンと撃たれて死んだ。彼の思想が危険な域にまで達したと判断した”誰か”がそれをやったのだ、とティは察することとなる。ティは、研究に日々励み、一つのことを為そうとし続けていた勇敢なる男であつた父のことが大好きであつた。

そんな父が殺された。志半ばで。

「許せるはずがない」

その時、ティは凄まじいほどの怨念と激情を込めた表情を作つた。阿修羅のようなそれである。

そしてそれを最後に、彼女は表情を鉄仮面のように固めて、無感情たる女となつた。

表情は”作る”ものであり”変わる”ものではない、なぜなら表情というものは相手に自分がどういう状態であるかを伝えること、そのもつともわかりやすいものであるからだ。だから表情は常に”作ら”なければならぬ。他人に自らの素直な表情を伝えるなど、愚な者のすることだからだ。

生きていく為の心がけ。

ティはドガースの意志を継ぐために、己に様々な試練を課したのである。

これによつて拷問も平気で行えるようになったし、自らの感情を客観的にコントロールするという術まで身につけた。極端なほどの自律行為。

父ドガースの遺恨を晴らすために。

だがそのひた向きさは、弟のバチャリルでさえ退かせる程の極端さではある。

だからバチャリルは、片腕をもぎ取つてonlyの男を捕えたティのやり口に心の底で辟易してしまふ。縄かなんかで縛つてしまえ

ば済む話なのに、何でその人物の片腕をちぎり取るなどというむごいことをしたのか、バチャリルには姉の行為が理解出来ない。

バチャリルの心は姉からゆったりと離れていく。

それに伴って父ドガースの思想に対する、反発心、のようなものも心の中で湧き上がってくる。

本当にそれが正しいのか？

たしかに父の殺され方は理不尽だった。だが、だからといって人全ての生活を一新させるこの行為を、やってしまつて良いのか。自らも人間であるのに、人間を宇宙妖怪に支配させるなど、そもそもこんなこと人間としておかしな行為のような気がする。人間なのだから人間の繁栄を願うのが人間らしさじゃないのか。わざわざ人間を宇宙妖怪なんていう謎の飛来者たちに支配させるのは、変だ。地球を宇宙人に明け渡すようなもんじゃないか。

そもそも宇宙妖怪たちが土地を食い潰すようになったせいで、人間たちは住めるその地域を奪われ、二つの層に上下で分かれて住まわなければならなくなった。

今の狭苦しい社会が作られたのは、宇宙妖怪が原因。

その宇宙妖怪に人間を支配させようという思想は、幾らなんでも不自然すぎるのではないか。

バチャリルは今までこういうことを考えてこなかった訳ではなかった。

しかしそのことに関しては、ぼんやり、と考えるだけであり、確かな答えを出してはこなかった。

姉テイを信用していたからである。ぼんやりであろうとも、姉についていけば良かった。

彼女の言うことはバチャリルにとって正しさであった。故に姉が信じる父ドガースの思想も難なく己に取り込むことが出来たのである。

しかし、バチャリルは今、やる必要の無い残虐行為を一人の人間に無表情でやってしまう姉の姿を見て、ぼんやりとではなく、ハッ

キリと自分の意見を考えた。その意見は、姉や父のことを裏切ると
いう結論に達している。

いまさらではあった。だがそう感じてしまう。

彼には守りたい者もできた。

八城「シヤアリ」C。

出会ったのは昨日。彼女が気を取り戻して会話をしたのは今日。
バチャリルは会話をした結果、さらに彼女のことが好きになっ
てしまった。

だから彼女と結婚したいので、今まで信じていた姉と、その思想
を裏切ることに繋がるということでもあるだろう。

「テイ姉。もうやめよう！」

とどのつまり好きな子ができちゃったから気が変わった、という
ようなものでしかないのだと姉側からすれば感じる。勿論バチャリ
ルからすれば残虐行為に辟易している、という部分もあるわけだが、
今まで散々拷問してきた姉からすれば、それはイマサラでしか
ない。

「何を、言っているの。バチャ。……………あなたが今、言ったの？」

「そうだ！」

「どういふことだか詳しく教えて」

「詳しく？」

「そう、詳細に、私にどうして今そんなことを言ったのか、教えて
……………」

テイの顔が蒼白に映って見える。白い光に顔の半分だけを照らさ
れている彼女の、そこには作られた笑顔が貼り付いている。その笑
顔のままに、バチャリルの方へと一歩ずつ、ゆったりと近づいてく
るが、バチャリルは背後へと後退りしていく。

「何で逃げるの。私から何で逃げるの、バチャ。私たちは姉弟。そ
して思想を同じくする者。そんな私から逃げる必要はないんじゃない
の。バチャ、教えて。何で私から逃げるのか」

「テイ姉……………」

「ねえ卑怯じゃない。なんでこのタイミングでそれを言うの？ それじゃ大事なところで臆病腰になったと思われても仕方が無いじゃない。バチャはそんな男なの？ そんな男だと私に思われてもいいの？ ねえバチャ。あなた、自分の都合で物事を決められると思っているの？」

「テイ姉は真つ直ぐ過ぎるんだよ。……僕、気が付いたんだ。どうやらこの世は、そう簡単に変えちゃいけないものなんだよ。この人を見て、僕はそれを思い知らされた」

バチャリルは今は眠っているシャアリ。彼女の方へと顔を向けて、安堵するようなため息を付く。

そつという弟の姿を見て。

薄情で軽薄で気移りな弟の、安堵のため息をつく様子を眺めて。

「バチャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

テイは表情を”変えた”。唸り上がる漆黒の炎がテイの長い黒髪を、左右に広がらせて、まるで魔女のように禍々しい髪型となった。表情は歯を剥き出しにしており、銀色の刃の刀身が伸び上がって人間よりも長い刀身へと変貌する。

「墓場の幽霊たちが私に力を貸してくれているぞバチャ！ 彼らは言っている！ お前のようなふしだらで破廉恥なみつともない男は弟と言えども抹殺せねばならないと！ 一つの事を成し遂げるには邪な者は切り捨てなければいけないと、幽霊たちが私に力を貸してくれているぞ！ お前にも見えるかああああああバチャアアアアアアアアアア」

「テイ姉。悪霊に取り憑かれてるよ！」

「お前に対する憎悪が悪霊を呼び寄せたのだ！ KILL!! KILL!! だああああああ」

「納豆視線みたいなことを言わないでくれ！」

「ああッ!? それの何が悪い！ お前みたいな細かいことで気移りするボケ糞に、私の思想を理解できるはずがねえだろうがよおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

バチャリルとて戦いが出来ないわけではない。それにここは墓場だ。霊を視ることが出来、またその力を借りることが出来る不弥生姉弟。バチャリルの武器である傘に、彼に協力してくれる幽霊たちの力が宿った。刀と傘が交わる。ティの刀の刀身は長さを増して行き、バチャリルの傘は木槌のように分厚さを増していく。それに伴って二人に宿っているそれぞれの幽霊同士の火花も凄まじく散り、墓場中に霊圧が充満する。

その霊圧を白い光は吸い取っていき、さらに光の密度を濃くする。
光光光。光、光、光、光光光光光。

男の子と女の子たちが集まってくる。くすくすと笑いながら、二人の凶器の切削する隙間より抜け出てきて空气中を踊ってから、白い光へと入り込んでいく。白光は膨張していき、幽霊を視ることの出来る者だけに視える輝きとして、墓場中を昼のように明るくする。雷光より鋭く。太陽よりは大人しく。しかし途絶えることなく。

「喰わせる」

その白光の眩しさで、シャアリは目を覚ました。

「あー、良く寝た」

両手をぐーんと伸ばしてからシャアリは周囲を見回すと、自分が墓場で横になっていたことを知る。寝た時は車の中だったのに。

（一日中寝ちゃったのかな。夜に起きるつもりだったのに、もう朝か……）

墓場が白光に満たされているために、彼女は今が陽の出ている時間だと勘違いする。

そんな彼女の背後で、ドンツ、と凄まじい衝撃音。すぐ後に体が浮き上がるほどの衝撃波がシャアリに襲い掛かり、彼女は墓場の隅にある草むらに頭から突っ込んでしまう。

草むらから顔を上げてから、彼女は衝撃が来た方向を見やる。

「何、あれ……」

凄まじいBATTLEがそこで展開されていた。格闘ゲームか何かですか、と問いたくなる凄まじい光景が墓場の中で繰り広げられていた。彼らにとっては墓石は足場であり、或いは武器にもなっているらしい。墓石がどんどん破壊されていて、墓場は見るも無惨なあり様が変わっていつていた。

その二人がぶつかり合う度に衝撃が発生して、シャアリは木の幹に必死になってしがみつかないと吹き飛ばされてしまいそうな程だった。そしてその衝撃波が生じる度に男の子と女の子が空中に現れては、くすくすと笑いながら、白い光の中に入っている。

シャアリは以前にもこの白い光を見たことを思い出す。

しかしあの時とはまったく様子が違う。青白い粒子らしきものを周囲に撒き散らしながら光り輝くそれは、目を細めていないと、目が潰されてしまいそうなほど眩しい。そして空を飛ぶ気球のように丸くて大きい。

彼女は状況をどうすれば良いのかわからない。
戸惑っていると言が聞こえてきた。
いつも聞こえる、幽霊が奏でるその歌。

夕暮れ時の小熊鳥

朱色に染まって何処へいく
ことごと電車に揺れながら
帰れる場所に 帰ろうか

天の星より落ちてきた
小さな小さな災害者

人らはこの地に追いやられ
遂に果てては息絶える

人よ人よ何処へいく
僕らがここで見送ろう

枯れて焦げいく海の子よ
土に還り何処へいく

朝に騒がし小熊鳥

朝日を背にして何時へいく
懐かしい生まれの陽

眠れる場所にいくのかな

「あ、頭が……」

激しい痛みに突如として追いやられてうずくまるシャアリに、
”ああ”と誰のものなのか人のものなのかも判別がつかない音が侵
入し、鼓膜ごと彼女の全身を震わす。痙攣しながら、彼女は草むら
に突っ伏し、ひれ伏した。

それを視界の隅で捉えたバチャリルは慌てる。

「シヤアリさん！」

「余所見してんじゃねえよ弟おおおおおおお！」血走った眼が迫ってくる。

「危ッ……」

墓石を蹴ったその勢いで突撃してきたティは、バチャリルを一刀両断するつもりで横薙ぎを容赦無く放ってみせる。空気自体が斬れてしまうような凄まじい横薙ぎではあったが、バチャリルはそれを傘で受け止めてみせる。どちらの凶器も幽霊の力を借りて青白く光り輝いているため、決着は簡単には付かず、互いが互い、己の体術を駆使して引けを取らない。

その代わり墓場は荒地のようになっていく。破壊され、墓石は石の破片となり、壊滅していく。

墓場が破壊されていくに従って、密かに地底より浮き上がってくるものがある。

今まで眠っていたにも関わらず、起きざるを得なくなるものがある。

死者を統括するものが、幽霊よりも偉大で、力を持ったものが墓の深く下にいるとしたら。

生者はそのことを知らぬ。幽霊だけが、どーなっても知らねえぞ、と胸奥でひやひやしている。

『ザ……ザ……オ……ラ……コ……』

それは死者の世界を統括する存在。死者の魂を守るために存在する偉大なる存在。

遙か古代の人間たちが恐れ、敬い、信仰してきた、容易に触れてはいかぬもの。

だが姉弟はそれが墓場を荒らされていることで怒っていることを、気がつかぬまま、刀と傘で互いが火花を散らすことをやめぬ。幽霊たちは偉大なる存在を恐れて姉弟に力を貸すことを止めはじめているのだが、夢中の二人はそれを疑問に思っても、思うだけで、争い

をやめようとはしない。

「テイ姉は寝てるおおお！」

「傘なんかで闘ってんじゃねえええええええ」

「刀なんて危ないもん振り回すなあああ」

「うるせえ黙って死ねえええええ」

むしろ姉弟の闘いは時間を経るごとに激しくなっていく。幽霊たちはもう野次馬してるわけにもいかんな、と除々に二人に力を貸すのを止めていき、白い光に逃げ込んでいく。

偉大なる存在は地底より昇り上がりながら、生者というのは面倒くさいものだな、と人間の生きている状態は騒がしいのが欠点だと嘆く。刀と傘が切削して響く音が地底まで五月蠅いのだった。

これはひどく五月蠅い。今後一切、こういうことは止めて欲しい。というか墓場を荒らされると靈魂たちがどっかに飛んでいってしまったんだからふざけんな、と思う。

そこで偉大なる存在は閃く。

そつだ何故今まで気が付かなかったのだろう。

生者がいるからいけないのだ。全てを死者にしてしまえば世界は静かになって良いものに変わるではないか。私は生者どもの騒がしさのせいで眠りを邪魔されることもなくなり、地底ですつと眠っていられるではないか。

なぜ今まで気が付かなかったのだろう。生者が騒がしいというなら、全部死者にしてしまえばいい。

というわけで、地表から抜け出た偉大なる存在は（不弥生姉弟からもその姿は見えない。幽霊たちにだけ視える）、白い光の中で屯つていちゃいちゃ遊んでいる幽霊たちに向って命令する。

「お前達いちゃいちゃしてないで、普段から私に面倒見てもらってるんだから、その礼に報いることをしろ。霊だけに、なんつって（笑）」

礼と霊をかけた親父ギャグは幽霊たちには全くウケず、白けた空気が幽霊同士の間で漂った。

偉大なる存在は咳払いをしてから、

「人間全てを、生者から死者に変えてこい」

と言った。幽霊たちは当然、啞然とする。正義感のある方である幽霊が口を開いて反論する。

「そんなのできません」

「じゃあお前は消えろ」

「え」

偉大なる存在はパチンと指を鳴らした。すると恐ろしいことに、正義感のある男の子幽霊は霧のように薄くなって消えてしまった。その男の子と手を繋いでいた女の子は驚いて、悲しくなって、偉大なる存在に何か叫んでいたが、パチン、と鳴らされて女の子も消されてしまった。

幽霊たちは、これは、びびった。

全員が萎縮したのを見計らってから、偉大なる存在は、へらつとした顔のまま脅迫染みた声で言う。

「消されなくなかったら……あとは、わかるな」

このように言いたいことだけ言って、しかし確かな恐怖を幽霊たちに与えて、彼は再び地底へと潜っていった。完全に姿を埋めていくその途中で、「まずは五月蠅い連中から始末しろ。あの墓荒らしの二人だとか、何か遠くて騒がしいことをやってる連中とかを優先して死者に変えるのだ」

と指示して、後は影も形も無くしたのだった。

白い光で屯っている幽霊たちはしばらく、まごまごして相談し合ったが、幽霊の中でも特に悪性の強い奴らが盛り上がってきた。

「生者は美味いぜえ。そしてあいつらが吸い取られて死者になっていく時の表情、たまったもんじゃねえ。お前ら、その快感をいくらでも味わって良いと命令されたんだぜ？ お祭りじゃねえか、パーティーじゃねえか、ひゃっほう！」

それがキツカケとなり、普段はおとなしい幽霊たちですら、自分の存在を消されることに怯えているからやる気を見せ始めた。偉大

なる存在なんて毎日ぐーたれているだけの奴なのだが、自らの存在という人質を取られた幽霊たちは彼に従わざるを得ないと考え出す。自我を失わないために。

白い光たちは、それぞれが男の子と女の子の手を繋いでいる状態になると、屯うのを止めて墓場の上空に拡散する。

そして己を包んでいたその配色を、青白い光から、真つ赤な光にした。

悪性の強い幽霊がくすくすと笑ってから、墓荒らしの姉弟へとゆっくり降り下していく。

一組の男女が言った。

「喰わせる」

魂の色

八城姉弟は、そういう惨劇を眺めることになる運命にあるのだからか。

シヤアリは草むらと木の幹を使って身体を隠しながら、不弥生姉弟が喰われるのを見る。

「うがああああああああああああああああ」

「きやああああああああああああああああ」

「ひ……ひどい……」

人ならざる者の叫び声。表情筋とか、或いは、骨格とか。彼らのそういうものが全部あり得ない方向に曲折している。ばりばりにホラー映画だ。手首がひしゃげている。足が曲がらないはずの方向に九十度折れ曲がっている。まるで彼らはピカソの絵の中に出てくるあれだ。奇妙な奴だ。

真っ赤な幽霊たちに、魂、みたいなものを吸われているのが見える。

魂は人によって色が違うようだった。ティのは紫で、バチャリルのは黄だった。

赤い幽霊たちはお猪口に唇を付ける時のような表情をしながら、数匹の幽霊で、魂を何分割にもして喰っていた。全部食べた後には満腹になった人のように、腹をぱんぱん、と叩いてどこかへと飛んでいったのだった。

魂、みたいなものを食べられた後のティとバチャリルはぐったりとしている様子だった。だが、そこに何だろう、魂とは違うっぽいんだけど、身体から青白い何かが湧き出てきたかと思うと、うわ不思議、バチャリルは男の子に、ティは女の子になっていた。あの青白い幽霊たちと同じ姿に。

そしてその二人も他と同じく手を繋いで、空へと飛んでいったのだった。

と、思ったら途中で方向転換して、テイだった女の子と、バチャリルだった男の子が、シャアリの目の前に着陸したかと思うと、驚くことに話しかけてきた。しかもかなり陰気な顔をしている。

第一声は、

「うらめしい」「

それだけでは終わらない。

「喰わせる」「

シャアリは金縛りに囚われて、全身が麻痺し、動かせなくなる。

男の子と女の子が、かごめかごめをするかのように周囲を回転しはじめた。

回転をされればされる程、全身の筋肉が弛緩するような感覚が強くなり、全てが安らぎの綿に包まれてこの世が幸福だらけだとわかった。今までの人生にあった嫌なことかとも、実は全て良いことだったのだと伝わってくる。地上から安らぎの綿は迫り上がってきて、すごい居心地が良い。一生ここにいたらなあ。一日汗を掻き続けた後にお風呂に入った時の、あの最高に気持ち良かった時。あれよりも気持ち良いよ。

しかしそれは実に油断。

気持ち良くなっているうちに魂が頭上にふわふわと抜け出てしまっていた。

魂の色は、銀色。

へえ結構悪くない感じの色じゃない。もっと汚らしい色をしていると思うた。

もういいや魂吸っちゃってください。随分と気持ちが良いので、もう全部がどうでも良いです。

シャアリは自分が生きている内の今、何か思い出したいこととか無いかな、と考えてみる。

しかし何も思いつかなかった。ただただ気持ちが悪くて、ただただ全てがどうでも良いと思えるばかりだった。

じゃあもう御終いかな、と思う。死ぬのかな、まあいいか、と。

でもしかし、ふと思いきす。あれ、何か忘れてないか。

何かを忘れているような気がする。それも大切な、根源に関わるような、自分のアイデンティティーって奴の根っこにあるようなあれ、何かを忘れているような気がするのだけれど。

でもしかし、駄目だからない。思い出せない。それよか気持ちが良いなあ。幽霊の状態つてのがずっとこの状態だつていうなら、構わないことなのだけれどなあ。あ、でもやっぱり気になるかなあ。なんだっけなあ、思い出せないなあ。あ、今なんか、通り過ぎたよ。うな。何だろう、過ぎた。私のこれは何時の記憶だろう。通り過ぎていったのはあれ、何時の景色だったっけ。あれは重要な私のあれだった気がするんだけどなあ。あれ、あれ、つてなんだっけ。でも綿、安らいで心地良いなあ。はああああ。でもあれだなあ、思い出したくもあるなあ。あ、ん、また通り過ぎた。気になる。

影。だれの影？ あれは そうだ思い出せそうだ、あれは昔みんまで行った所。みんなって誰だったっけ。難しい。でもまた通り過ぎてる。思い出せそう。思い出すにはどうしたらいいんだろう、あそうか簡単なことだ、この綿から抜け出れば思い出せるの、じゃなかったっけ。あ、でも、あ、そうだ銀色の、私、あれ、たましいあれを取り返せば思い出せるかな。ほいっと、手を伸ばせば届きそう、つて、あ、私の手が恐ろしい方向にひん曲がっているではないか。でも、これあれだな、頑張れば元に戻りそう。すごい嫌な音をたてながら、でも元に戻りそう。よし、あ、よいしょ、あれ、よつと、痛くない、あ、気持ちよい、いいね、これ、綿、綿のおかげだな、でも思い出さないと、私の大切な、何だっけ。あれだよみんなです。いった遊園地。あ、違う、違う、な、なんだっけ思い出せそうなんだけど微妙に違うな、動物園、水族館、幸せな場所、幸福っぽい場所、ああ違う気がするなあ、じゃあどこだっけ思い出せそう、んー、おもいだせそうなのだけれど。あ、思い出せない。あ、でも魂には手が届いた。良かった。これがなくちゃあ、やっぱりね。どっこいしょ、ほら、取れた。魂が取れたよ、これ、入れて、よいしょ、

よいしょ、よいしょ。出来た。入った。魂が私の中に進入してくれたよ、おかげで思い出せた。

あれは遠足だ。みんなで遠足に行った記憶だよ。

なんでだろうその遠足にはみんながいた。家族も同伴して、友達もいて、先生もいた。

みんながいたあの遠足の、その向った先は心地よいキャンプ場だった。私達は夜にはキャンプファイヤーをしたし、バーベキューをしたりしたのだ。懐かしい昔の記憶。私達の魂に刻み込まれているはずの大切な記憶じゃない。安らぎの綿は気持ちよかったけど、でもだめだね、こういうことも忘れてしまったら、私はもう私じゃないに違いないんだもの！よくわからないけど、多分きつとそう。

さあ、幽霊お二人、私は私の魂をあなたたちに上げたりなんて、しないんだからね。

「どっかにいつちやえ！」

拳をグーにして突き出す。男の子と女の子は案外、臆病な気質らしく、ふわふわっと頼りない様子で彼女から離れると、ふらふらと弱々しく、宙に浮いて姿を消していくのだった。

そして姿をどこかへとやっていった二人を見送ってから、暗い、すっかり荒れ果てたその墓場を眺める。もう騒がしい幽霊達はいない。白い光もない。不弥生姉弟も。

でもPlutoはずっとそこにあっただ。

墓場からちよつと離れた場所に、乗ってきた車と一緒に、Plutoはずつと置かれてたみたいだった。

白いおかげで暗闇の中でもシルエットが浮かんでいるPlutoに近づいていく。

そしてそこに辿り着いてみれば、人型機械の足元で横たわる、ホルシユの姿があった。

しかも大怪我をしている。片腕が無いし。

「……あ」

でも大怪我をしているのは自分も一緒だったと、この時になって

気が付いた。

シヤアリは自分の身体を見下ろして、（あ、ピカソ）と思うのを最後に、地面にぶっ倒れる。

P l u t o .

二人を優しく掌で包み込んで、鳩尾部分に運んで内部に入れてくれる。

青白い光で二人は抱擁されて、関節があり得ない方向に曲がっていることも、片腕が無くなっていることも無かったことになって。元の通りに戻って。意識を取り戻していく。

先に意識を現世に戻したホルシュは、シヤアリを木の麓に置いた。H a d e s になるかもしれないことを考えれば姉と意識を共同するのは何か嫌だったし、それに危険な場所にわざわざ二人で行く必要は無い。二人まとめて死んでしまったら、どうしようもない。

「姉ちゃんは悪いけど、待っていてくれ」

そう一言だけ告げて、ホルシュはP l u t o の操縦桿を握り、加速装置を踏む。太郎もちやつかり今までいたらしく、P l u t o のコックピットの背後部分で身体をぼりぼり掻いている。もちろん、形の口で。「厄介払いだもんな、あの女、はじめから真つ当な商売をやってくれる気なんて無かったんだ」太郎を慰めるようにして言うが、わかっているんだか、わかってないんだか、おでこっばい所を撫でてやると、くすぐったそうに饅頭の体を震わせるが。

「いくぜ。時間はあまり無い。このP l u t o の力をいまこそ……」

…

「そこまで言いかけた所で、」何かから背中を強く押された。

何かを言う暇も無い、ホルシュはコックピットから吐き出されて、地面に尻から落っこちた。

どういうことが、と戸惑うホルシュ。彼はP l u t o を見上げる。するとホルシュのその上に太郎が落下してきた。ぶにゅ。柔らかい感じで落ちてきたので痛くは無かったが、息ができない。

「どけちよつと太郎」

と叫びながら饅頭の太郎を両手でどかしてから、立ち上がる。

Plutoは誰も乗っていないというのに、加速装置を吹かして夜空へと飛んで行ってしまっていた。

その真白の後姿がどんどん遠くなっていく。

夜空の中へ。鉄の空へ。そして星のように小さな点になって、姿が見えなくなった。

ホルシユはもう、いろいろと最近驚きすぎたので、このような展開になったというのに、ため息一つ零れることすらしなかった。

機転は早い。

幸い車のキーは差し込まれっぱなしだ。

「巨大エレベーターまでは十分もあれば……！ 扉さえ開かれないなら、まだ虐殺は開始されていないはず……なら、まだ間に合う……」

……

車の中なら大丈夫だろうと思い、まだ気を失っているシャアリを後部座席に乗せる。太郎もぴよんぴよん跳びはねて勝手に入った。

車のキーを捻って、エンジン音を鳴らす。

ヘッドライトを点けて、夜道を八十キロで駆け抜ける。

現在、PM9:30。

墓場の静まり返っていた空気から一転して騒々しい。車を走らせれば走らせるほどやかましくなっていくのだが、テレビの映像の音声から流れていたそれとはまた別の騒々しさだ、とわかり、わかると共にそれが枯れ焦げていく気配を持っていることを感じれば、事態の切迫さを実感する。

ホルシユは既に閉まっているガソリンスタンドに車を駐車する。
後は走るだけだ。

裏通りでは黒猫が一匹、緑色の目を光らせるだけで、人はいない。自らの走るに伴っての呼吸の音やコンクリを踏んで鳴る靴の音。そういう自分の音が聞こえるほどに裏通りには人が無いが、遠くからの騒がしさの気配は止まれないまま。

夜道を、今度はテイの邪魔をされることもなく、スーのいると思われるあの行群と距離は近づいているはず。そして裏通りを出れば、あとは探し回るだけだ。

ああああああああああああああああああ

この世のモノと思えぬ咆哮は、先ほどから絶えず続いている。一度たりとも止まらず走り続けているホルシユの耳に、止まることなく聞こえるが。

この咆哮がもつとももの不安要素となっている。これは尋常じゃない。

彼はまだその正体を知らぬが。

大通りにパツと出れば、それは見えたのだ。

魂の色。

様々な展開がありすぎて肝が据わったような気がしていたホルシユは、またも驚いて息を飲む。

何十色とあるのだろうか。色鮮やかに夜空を彩っているのは、蟻の行列としてやかましくお祭り騒ぎをしていた連中の、魂、みたい

な丸いもの。色のついた。

物凄い数の、これもまた数えられない真っ赤な幽霊たち全てが手を繋いで、かごめかごめをしている。そして口をすぼめて、空中にどンドン浮き上がっている魂を吸い取っているのだとわかる。翡翠、蘇芳、赤、茶、黄、青、群青、蒼、赤紫、若草、黄土、薄茶、黒、灰、白、銀、金、青紫、色彩のついている魂たちが夜空を彩る。星空というものが鉄に遮られて見えないはずの地下街で、それらは星空よりも美しく、幻想的に、街の宙で映えている。

ああああああああああああ

ホルシユは、魂を吸われている人たちの咆哮が裏通りにまで響いていたのだと知る。

彼らの様子はホラー映画に出てくる奇怪な何かのように歪んでいる。

魂は吸われ続けている。空でかごめかごめをする幽霊たちに。

「スーが……………」

弟がいた。探す必要なんて少しも無かった。そして、スーの魂の色は群青なのだを知った。でもそれがわかってしまっただけでは、その命が吸われていくということじゃないのか。

ホルシユは駆け出す。そして叫ぶ。

「スー、頑張るんだ。お前の魂が吸われているけど、それを耐えるんだ！ スー！ 聞こえるか！ お前は病気が治ったら何処へでも行けるんだ！ 魂を吸われたら何処にもきつと行けないぞ！ お前は、それでいいのかよ！」

しかし声は聞こえていないようだった。

骨格はおかしく曲折していて、皮膚に変な皺が浮き出ている。

スーの群青の魂は、真っ赤な幽霊達に囲まれて、そして吸われていくから粒子のように細かくなっていると、やがて全てを喰われた。

ホルシユは一瞬だけスーに触れた。だが一瞬だけだった。

彼が手を伸ばしたすぐ後に、スーの体は青白く輝き、男の子の幽霊となつて夜空へ飛んで消えていく。その姿はすぐに小さくなつて、

どこかへ隠れてしまう。

間に合わなかった。一体全体、何でこんなことが起きている。

扉が開くだとか、そういう問題じゃなくなっている。なんで人間全てがこのように、こんな幽霊みたいな連中に命を吸われて死ななくてはならないのか。何だこれは。訳がわからない。

こうやって訳がわからないことばかり起こるから、世の中はむかつくんだ。

なればこそ力が無くては。守りたい者を守る力が無くて、むかつく相手を蹴散らすことは出来ない。俺にその力はあるか。

まだ、大丈夫なはずだ。

Pluto。

「俺に力を貸せよ、Pluto!」

真つ赤な幽霊たちが踊りまわる空に。

人間一人の、人間らしい咆哮は轟く。

それ以外は全て化け物染みた、命を吸われているために流れる咆哮の中で、彼は叫ぶ。

「今俺は全てが憎たらしい！ この世界はめちゃくちゃだ！ 腐ったような根性ばかりの連中、女々しい人間、他人を巻き込んで自分の鬱憤を晴らすことを平気でやる奴ら、文句ばかり言うだけの奴、愚痴ばかりで五月蠅い奴、ああ、ああ、全部憎たらしいよ！ 世界なんてなあ、人間社会なんてなあ、めちゃくちゃで、どうでもいいんだよそんなもん、でもなあ、でも俺たちは生きてるんだよ生きるから、せめて生きてる内に家族や友人や仲間たちとさあ、いろいろとさあ、生きてるんだろ？ がよおおお！ それが何でこんなわけのわからない、誰の願いかもわからない、こんな出来事で、それが邪魔されていくんだ！ 俺達が弱いからそれに負けるのだとしたら、俺は力が欲しい！ 憎しみを全部燃やし尽くすほどの力を、Plutoなら持っているだろう！ なら俺に、この哀れな弱い人間の一人でしかない俺に、わずかでも力を貸してくれよ！」

地獄のように赤くなっている空に、魂はまだいくつも浮かび上が

っている。

それは次々に喰われていて、星が昼になれば見えなくなるのと同じように、夜の中から姿を消していく。その混雑した、ありえるはずが無いのに、実際のものとしてある、この景色。

Pluto。

その混雑している全ての景色と雑音を突き抜けて。

真白の機体は再び降臨す。

「……きた……ほんとに……」

自分で叫んだ癖にホルシユは驚く。さっきはコックピットから追い出した癖に、どういう気変わりだ、と思わなくてもない。しかし、今は目の前に黒い掌を突き出して、乗れ、と言ってくれているように見える。

「いいのか……これは……」

ホルシユは先ほどまであんなに喧しかったのに、平気で現れてくれたことでわずかに怖気付いた。

しかし黒い掌は、間違いなくホルシユという人間に、差し出されている。

ホルシユは息を飲んでから、足を乗せた。そして高揚する。

コックピットが開いている。受け入れてくれるらしい、その鳩尾。内部に入り、座席に座る。

ハッチが閉まると共に景色がディスプレイで映る。前方百八十度が確認できるディスプレイには赤色の幽霊たちと、無数なる魂。あり得ないような景色。

幽霊たちがPlutoに注目しているのが見えた。大きく口を、あの口裂け女みたいに開きながら、全ての幽霊たちが迫ってくる。凄まじい速度で、Plutoをかごめかごめしようと呼び寄る。

集団でかかれれば余裕だと思ってるのか。

「お前らずりいんだよ、死ぬよなああああああああああああああああ
ああ！」

青白い光と同化し、自分の肉体が機械と混ざり合っていく感覚が

来た。あの感覚。自分「Pluto」。そしてPlutoは漆黒への変貌を開始した。掌より始まり、じわじわと蝕むように白を侵食していく黒。瞬く間に広がり、Pluto「Hades」。ホルシユ「Hades」。

Hadesは赤い幽霊たちを挑発する。

手招き。こつちに来てみる相手してやるから、という雰囲気を実に垂れ流すそれ。

釣られた幽霊たちは口を大きく開けた状態のまま、コックピット目掛けて次々に飛んでくる。その数、二百、と言ったところだろうか。ホルシユはそれら全てをデコピンで始末した。両手で高速でデコピンをすることによって全てを弾いてやった。虫けらのように始末してやったということだ。デコピンをされた奴らは屈辱と共に空気に霧散し、散った。

それで釣られなかった他の幽霊たちも、あまりに仲間が簡単に消されてしまったのでびびる。怯えてしまってHadesと距離を置こうとする。

しかしHadesは敵が間合いを取ろうとすることを許さない。手足合計二十本の指、それらのそれぞれの先端から”青白く光る糸”を十本ずつ発射する。10×20、つまり計二百本の糸を入り乱れさせて発射させる。乱雑に絡み合わせながら二百本の糸を進ませることによって、敵にその軌道を読ませないようにする。そういう工夫が為されている糸だから、幽霊たちは一瞬、糸が何をしようとしているのか判断できない。それが仇となり、糸から逃げる事ができなかった。

Hadesの意図は成功する。二百体もの幽霊を、それぞれの糸でぐるぐる巻きに拘束。

そして超振動を糸に発生させることで、幽霊たちは震わされてその組織を分解されていき、空气中に跡形も無く霧散した。二百体が片付いたらまた別の二百体。それが終わればまた二百体……という風に、青白い糸は幽霊を次々に葬り去っていく。

「集團の赤い幽霊どもを存在として抹消。」

「In your face!!! idiot!!!」

そして誰もいなく

敵と思えるものは呆気なく片付けた。青白い幽霊どもは高みの見物を決め込んでいるのか近寄らないし、襲ってこないならばどうこうする理由もないから放置しておく。Hadesというものは圧倒的だ。もう騒動は静まった。

しかし、色鮮やかたる魂たちはその残影と共にこの世から消失していく。命を救えた、というわけではない。

Hadesは失われていくそれらを掌に集めようと空を飛びまわるが、掌からすり抜けていく故にどうしようもない。確保できない。弟スーの群青の魂もどこにも見当たらない。

宙で漂うHadesの周囲で魂は次々に失われていく。存在しなくなる。

身体という魂を留めておく容器をなくしてしまったがためだろう。ふつつつとする、やり場の無い気持ちでHadesを覆う。

巨大エレベーター前であれだけ集まっていた人間の密集体は、もはや、禿げてしまったかのようにちりぢりとなっている。ニユースで見た時の十分の一と言ったところの数だろう。それを救えただけでもよし、と賢者のように賢くおさまれとも言っただろうか。何の為にホルシユは生きていたか。

両親が出て行く時にホルシユは託された。三人での生活を。その柱として頼む、と。

彼はそれを承諾して、その柱としての役割を達成することを目標として日々を送ってきた。

だがその目標は崩れ落ちて水の中に溶けて、薄まってもう見えな

い。
ホルシユ＝Hadesは両手で頭を抱えて、その場で狂うようにして踊った。激しく。踊りというよりかは、言葉にしづらい良くわからない動き、というか。加速装置で回転するのだ。

では、生き残った少数の人々、広場にて多くの同胞が突如死んでしまったというショックを受けたばかりの人々は。その踊りをどういうものだと捉えたか。たださえ人が突然ばたばたと倒れた出来事後の、非常に混乱している広場にて生き残っている人々は、禍々しい漆黒の機体が狂氣的に踊り狂っているのを見てどのような捉えをしたか。見た？

当然、悪魔のように捉えた。

そこにいる九割、いやほぼ百分の人間たちがHadesがこの事態を発生させた要因だと思っただ。

なぜか。それは普通の人々には幽霊の姿は見えないからである。人は自分の五感で感じ取れないことは認知しない。だから認知できる情報の中から、状況を探るしかない。

そうなると自然、多くの命が突如として失われたその原因を求めれば、夜空に滞空している漆黒の悪魔こそが、その犯人だと、元凶だと、思うのは言ってしまうえばそれは当然に違いない。

禿げ散らかった広場でHadesだけを確認する人々は、指を突き出しこう言う。或いは、脇目もふらず逃げ出す者もいたし、いやああと絶叫してから失神する者も。

明らかにHadesに怯えているそれで。

お前が悪魔か、と決め付けたそれで。

では、自分の生きる目標を喪失したばかりの落ち込んでいるホルシユ＝Hadesが、自分が助けた命たちにひどく怯えられ、あるものには石を投げられ、ある者には「くるな、くるな！」とヒステリックに拒否されたりなどされ、どこかにいけと、霊から助けてあげたのに礼どころか怒声を浴びせられたらそれはどう思う。喪失と共に憎しみも持っていたその心が刺激されれば。

彼は加速装置で回転するのを止めて、踊るのも止めて。

空で人々を見下ろして、ただただ空しくそれを眺めて。

タイミング悪く現れたTitanたちがすぐに行動を開始した。

彼らはHadesがこの事件の犯人だと断定したのだろう、高台か

らならプログラムによる問題も解決するらしく、ガトリング砲をぶちかましてくる。

そして巨大エレベーターの扉も、もはや開いていた。

地下街送りにされて屈辱と悲惨に染まっている人々は地下街に足を踏み入れて、広場にて騒動が起きているはずなのにそれが沈静化されていることに驚くと共に、漆黒に染まっている見たことも無い人型機械が、完全不敗のはずのTitanを次々に破壊し、蹂躪し、殲滅していくその戦闘を見上げることとなる。上層の人間にとってTitanは正義。それが無惨な姿で壊されていくのを眺めれば。

自然その連中も、あの漆黑機体こそは禍々しい悪魔である、と捉えることになる。

人間の憎悪が、恐怖が、怒りが、Hadesへと送られていく。

次々に、様々な偶然とも言えるそれらが重なって、全ての責任がHadesにあるような。悪魔こそがその象徴、とでも言うようなそれはHadesからすれば理不尽だが、人々にとっては実に理に叶ったごもつともな象徴。

あれこそが原因だ、と己の五感を主に信じる人々は、断定する。主観とは誰にでもあるものだから、それはどうしようもないことだとも言えたかもしれない。自然な流れだと。人間として普通のことだと。

だがその憎悪や、理、を押し付けられるようにして与えられるHades側からすれば、納得できたものではない。HadesはTitanを潰しながらも、その視線をひしひしと感じる。その感情の矛の先が向けられているのをひしひしと感じる。どうしたことだ、と思える。

お前等何様だ、と思える。

人間がさっきの幽霊たちと同じようなものと思える。

自分はHades。人間じゃない。あいつらは俺とは”別種”だ。憎しみを俺に向けるなら、俺だってそれを向け返してもいいということだよな。

種と種が争うことによつて生物が繁栄するというなら、俺は生きて
いるのだから戦つても良いということだ。もう目標は無い。だか
ら人間としては生きていない。でも俺はHadesだ。その目標は
今、ある、そうだな種として己の命を残していくのは、これは使命
だ。だから人間という数だけはやけに多い、ずるい連中は、俺が自
身の身を守るためにはいくらだつて撲殺して構わないということじ
やないだろうか？

「……………Hatred is slaughter」
言葉はため息のようにこぼれる。

そのため息とともに、別種を一匹殺してしまった。

ああ、と、取り返しの付かない事をやってしまったような切迫が
途端に襲い掛かるが、それを振り切るために、ため息をつきながら
もう一匹。

「slaughtered!! slaughtered!!
slaughtered!! slaughtered!!
slaughtered!! slaughtered!!
slaughtered!! slaughtered!!」

大虐殺ルートって感じ。

Hadesは多くの屍をそこにたくさん作ってしまった。

でも終わってから、ふと、空に魂が浮かんでいることに気が付く。
あれ、と思う。あ、と思う。でも良く見たら、本当だ、ある。

遙か上空に。魂たちはあった。

消えたと思つていた全ての魂たちが遙か上空で、漂つていて、ど
れもが一つも消えていなかったのだ、と、Hades、気が付いた。
でももう地上にはたくさんの死体。今さっき、魂を抜き取るこ
とせず全部抹殺したばかりのそれがああ、たくさん転がってしま
つている、感情の発露に任せて暴れまわった結果がこれだ、もう取
り返しは付かないだろう。取り返しは付かないだろう。取り返しは
付かない。

魂の中で群青のものを見つけた。それを掌で捉えてみる。

「生きているじゃないか」

言えることはそれだけだった。それは人間ではない、魂でしかないのかもしれない、でも確かにそれは生きている存在している。ならばまだ目標は失われていなかったのではないか。

それなのに、どう考えても取り返しは付かない。

ホルシユは群青の魂を掌で握ってみてから、思う。

Hadesとして今、人間を止めた、ということを経由して大暴れをしても良いのだと決め付けて大虐殺をした。それは彼らがこちらを憎しみの対象として見ていたのも悪いはずだ。でも、もし彼らが仕方なくこちらに憎しみを向けていたのだとしたら。自分がさつき目標を失ったと思った時と同じような失望感に捕えられていたから、それを紛らわしてくれる悪が欲しいのだと思っただけなのだとしたら。それは、同じように、虐殺で心を紛らわそうとした俺がどうして責められるだろうか。俺は人間だった。人間だからこそ、俺は自分が別種だと言いつけていたのだし、人間から向けられる憎悪に胸が痛んだし、そして心の鬱憤を晴らすことが楽しかった。俺は人間だ間違いない。なのに、人間をたくさん殺した。同じように日々何かの目標や、或いは、それが無くとも、生きて、生きて、一緒に時代を生きてきて、そしてこれからも生きていくはずだった仲間、近い境遇にある同胞、それを一方的に力で虐殺した。……ああ、気付いてしまった。それは何ら、俺たちが憎む上層のやり口と何ら変わらない。Titanで人間を殺すあの連中と、Hadesで人間を殺した俺と、何処がどう違うって言う？　ほとんど変わらないじゃないか。何も変わらないじゃないか。いや連中よりもひどい。あいつらは粗があるが、客観的事実に基づいてその殺人を執行しているに過ぎないが、俺は俺の感情に任せて人々を殺した。そして殺した後になって、イマサラになって、失ったと思っていた目標のその魂があつたからといって、贖罪を求めている。いや、だめだ。もう、だめだ。

ホルシユは宙に浮きながら、自ら、十字架に磔られるような体勢を作った。

もし今日、こうやって十字架に自ら磔にならなかつたら、そういう状況に行ってしまうなかつたら。

みんな何をしていただろう。

誰も死ななければ。こんなことにならなければ。

ビーフカレーだって、食べれたのに。両親が帰ってくる日に、肉を買ったり。

くだらないことで笑い合ったり、コルク栓やゴムボールを使って姉を起こしたり。

ヒートのリンボーダンスを眺めたり。太郎のぼりぼりしている様子を見たり。

おぼっさんと他愛も無い話だとか。みんなで笑いあって。

「でも、もう全ては手遅れだ。現実つてのはちゃんとここにある。

見えるもんな、これが」

ホルシユは目を瞑る。そして。

青白い幽霊たちが磔にされているホルシユに近づいてくる。

全てがその鳩尾辺りに集束していつて、白い光となっていく。

空に集まっている魂たちが、その白い光の周辺でランダムに回転していく。

ホルシユは鳩尾の辺りの白い光を、世界中に広げていくかのような心持ちで、拡散させていく。

それに伴って色鮮やかな魂たちが、虹を描くように、オーロラを描くように、夜空中を駆けずり回っていく。

白い光もその後について、世界中のいたる所へと拡散していく。十字架に磔となった姿勢のホルシユは、その白い光が止んだ頃には空中から姿を消していた。

そして広場には、誰もいなくなつた。

天の星空　そしてみんな笑いあって

あるところに、姉弟がいます。

アパートに両親と一緒に住んでいます。

姉も弟もとっても健康です。二人は仲が良いので、両親はいつも安心して二人を見ています。

そしてこの日は遠足の日です。
待ちに待った遠足の日です。

それは学校で企画される行事で、地域の人みんなの親交を深めようという意図もありますからいろいろな人が参加します。賑やかな遠足です。その学校の、年に一度行われる大きな行事です。

もちろんその家族も遠足に参加しました。

バスに乗ってみんなで山に行きまして、その後にはキャンプ場です。

夜にはみんなキャンプファイヤー。焼肉をたくさん食べて満たされた御腹で、みんなは星空を見上げます。星が天の川です。さらきらとそこら中で輝いています。そのキラキラと輝く星々の間を、火の粉が潜り抜けるようにして飛んでいきます。綺麗です。

みんなが楽しそうです。心地良さそうに、それを眺めています。

そして姉弟の、お姉さんのほうがふと、思いついたように立ち上がりました。

彼女はとっても満たされているはずでした。家族がみんないて、友人がいて、先生がいて、街のみんながいる。星空も、お月さんが出ていますし、とても綺麗です。でも満たされません。

彼女は一人、みんなのいる篝火の場所から身を離して、暗がりの中に入り込みました。

暗がりは少し怖くて不気味なので、あまり好きではないはずなのですが、この時は何故だか、大丈夫でした。彼女はてくてく歩いて、暗闇の奥へ奥へと進んでいきます。

途中に、青白い影を見ました。

それはほんの一瞬のことでしたが、しかし彼女はたしかにそれが影、だったとわかりました。

幽霊だろうか、と彼女は怖くなります。そんなの初めて見ちゃった、と。

でもそれでも彼女は怖くありませんでした。むしろその幽霊を見たかもしれない暗闇の中でも、心地よくなっていきます。気分が落ち着きます。

青白い影がまた見えないかな、という余裕まであるのです。ですが、それは現れませんでした。

次第に彼女は暗闇に飽きてしまつて、それにふとある瞬間に、急に暗闇が恐ろしく感じられ始めたのです。彼女は急いでみんなのいる篝火の所へと、帰りました。流れ星が上空で一筋、飛んでいます。彼女はそれに気が付きません。願いを三度唱えれば、願いが叶うという迷信も知りません。

しかし道の途中で、変な宇宙妖怪に出会いました。

見た目はどう考えても饅頭です。宇宙妖怪はみんなに愛される存在ですが、しかしその宇宙妖怪は、今まで彼女が見てきたどの宇宙妖怪よりも可愛くて、ぷにぷにして触ったら気持ち良さそうでした。形の口でぽりぽりと身体を搔いている仕草が、彼女のツボに入ります。

お姉さんはその饅頭みたいな宇宙妖怪に、太郎、という名前をつけます。なんだか怪我をしている様子でしたから、もしかしたらそれを理由に宇宙妖怪を飼ってもらえるかもしれない、という算段も含めての元、彼女はみんなの元へと太郎を引つ張っていきます。意外と重たいので運ぶのは大変でしたが、何とかみんなの所へと、連れていったのです。太郎も、最初は嫌がっていましたが、途中からぷにぷに跳びはねて付いてきてくれるようになりました。可愛い、と思いつながらお姉さんはみんなに太郎を見せます。「この子、可愛いでしょ」。

その後、少し揉めたりもしましたが、太郎は晴れて彼女の家族で飼われることになりました。といってもアパートなので、近くの河原に宇怪小屋を建てて、そこで飼ったのでした。彼女は毎日毎日、そこに行つて太郎と遊びます。彼女が学校をサボったりすることを両親は良しとほしませんでしたが、しかし彼女は楽しそうでした。

姉弟の方の弟は、健康優良児で、運動神経も良くて勉強もできませんから、将来が期待されましたし、本人もそれが嬉しくて勉強にも運動にも勢を傾けます。

担任の中田先生は、

「彼ほど優秀で、彼ほど学校を楽しんでいる少年は他にいませんよ」と言いますが、中田先生は案外適当だ、ということのみんな知っていることでしたから特に浮かれあがりたりはしませんが、そう言われて嫌な気持ちにはなりませんでした。弟は楽しそうに優秀になつていきました。とても、健康です。しかし面白い事が一つあります。

「なんでこんな雑誌が好きなの？ 全然面白くない」

弟はその雑誌がとても好きです。prayと名づけられているそれは、何故廃刊にならないのかいつも不思議に思われている、買う人のもつとも少ない雑誌だとも噂されるそれです。しかし彼はそれを毎号かかさず読むのです。特に、『伝説のゴメラ』がお気に入り、なのでした。

ある夜のことです。姉はトイレに行きたくなって夜中、起きました。

そしてトイレを済ましてから、もう一眠りしようとする途中のことです。何でしょうか、耳に聞こえてきました。何だか背筋が寒くなりはしましたが、耳に聞こえて来るその音が大きくなるほうへと歩いていきます。それは外です。河原のほうからです。

太郎に何かがあつたのだろうか、と思つたお姉さんは、そう考えしてみるともたつてもいられなくなつて、夜を駆け抜けました。

しかし呼んでいるのは、この声を叫んでいるのは、太郎ではない、

と途中でわかりました。

だってそれは歌なのです。よく注意して聞けば、それは歌なのだとわかるのです。

でも怖くありません。夜に歌が聞こえてくれば怖いはずなのでしようが、しかし怖くありません。お姉さんはその歌の聞こえて来る方へと、近づいてみます。

そして、遠足の日に見た青白い幽霊を再び眺めることになったのでした。

青白い幽霊は、街灯があるそこでスポットライトを浴びるようにして、ただただ立っています。

立ったまま歌っています。

夕暮れ時の小熊鳥

朱色に染まって何処へいく
ことごと電車に揺れながら
帰れる場所に 帰ろうか

天の星より落ちてきた

小さな小さな災害者

人らはこの地に追いやられ
遂に果てては息絶える

人よ人よ何処へいく

僕らがここで見送ろう

枯れて焦げいく海の子よ

土に還り何処へいく

朝に騒がし小熊鳥

朝日を背にして何時へいく
懐かしい生まれの陽

眠れる場所にいくのかな

「ホルシユ」

ふっ、と歌を聞いているうちに、湧き出てきた言葉でした。でも全然知らない名前です。

しかし名前だとはわかりました。それしかわかりませんでした。

お姉さんは目を瞬かせてその名前が何だっただろうかと思いつつとします。

その内に青白い幽霊は、どんどん薄くなって行って、街灯の光に溶かされるようにして消えてしまいました。

そして幽霊が消えてから後には、お姉さんは、あれ、と思って夜の暗闇を見渡しました。

「なんでこんなところにいるんだろう」

彼女は先ほど聞いた歌のことも、スポットライトに照らされていた幽霊のことも、呟いた思いだせない名前のことも、全部脳味噌の中から落つこととしてしまつて忘れえました。

夢遊病なんて持ってたのかな私。

そんなことを思いながらお姉さんは、太郎が安らかに寝息をたてているのを確認してから、アパートへと帰っていきます。

彼女は布団の中にもぐりました。押入れの中の自分専用の部屋です。

しばらく布団の中で眠ろうとしましたが、何だか落ち着きません。気が付くと、訳もわからず泣いていました。彼女自身が驚いてしまつ、本当に訳のわからない涙です。それが流れてしまつのでした。そして彼女は泣き疲れて、眠りに落ちます。

夢を見ました。

遠足にみんなで言った時の夢です。

そこにたしかに彼女は見ました。起きた時にはすっかり忘れてはいますが、みんなと一緒に笑いあって、またみんなもその人のことを知っています。名前も知っています。ビーフカレーが得意なことも、面倒見が良いことも、アルバイトであることも、知っています。知っていますが、夢の世界や幻のようなもの、としてしか見えない人です。

夢の間だけでしか、笑い合うことは出来ません。

でもその篝火に辺りながら、天の川のような星や、まあるいお月様を眺めながら。

たしかにそこで、笑い合っているのです。

みんなでそこで。

踊りまわって。話し合って。

たしかにそこで、笑い合って、いるのです。

「またみんなで来れるといいな」
「次に来る時はもっと大勢でね！」
「料理の腕だつて磨いておくさ」
「おいしいビーフカレーをよろしくね」
「それまではお別れだ。みんなでまた会えるのは、別の日だ」
「ここを出たらまた忘れちゃう？」
「忘れてもまた思い出せばいい。それでオツケーだつて」
「そんなので平気なの？」
「そんなものだよ。そしてそれがきつと大切」
「ばいばい。またね！」
「じゃあ、また」
「待ってるからね」
「そうだな。また会える日を。また楽しくさ！」
「ばいばい！」
「ああ」
夢と現がひっくり返り、朝がやってくれば彼女はそれを忘れてい
る。
でも目覚めて起き上がった彼女の顔つきは、頬がやわらいでいて、
足取りは穩やかだ。
日差しが強くなってきた。
空の太陽からの、贈り物だった。
そしてPlutoの。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5253u/>

p&P

2011年8月9日03時11分発行